

富士

富士

4

柿沼日明 著

白蓮大聖人御伝

富士

4

小説  
富

士

第四卷・目次

塚原問答	一
一	一
二	十五
三	三〇
四	四四
五	五五
六	六五
開目抄	七七
如来滅後五五百歳始觀心本尊抄	九三
佐渡の四条金吾	一〇九
一	一〇九
二	一一五
鎌倉帰還	一三一
殿中問答	一四五

一 . . . . . 一四五

二 . . . . . 一六〇

三 . . . . . 一七三

大聖人鎌倉を去る . . . . . 一八三

一 . . . . . 一八三

二 . . . . . 一九〇

蒙古襲来 . . . . . 一九七

一 . . . . . 一九七

二 . . . . . 二〇五

三 . . . . . 二一一

四 . . . . . 二一八

四条金吾 . . . . . 二二七

一 . . . . . 二二七

二 . . . . . 二三八



## 塚原問答

### 一

杉木立の根もとの雪の少ない所に、筵をしいて五、六人たむろし、薪をあかあかともやして暖をとつておる。そのような人のかたまりが、大きな杉の根もとは、どこにもある。数えると五十個処もあるであろう。人数にして三百人はたしかだ。或る個処には経文が山と積まれておる所があるかと思うと、書籍が荒縄でしばられたまま、かがり火に照らし出されておる所もある。しかし或る杉の根もとは、立派な経机に、町重に経文が積まれて、筵の上に、更に熊の毛皮などをしいて、立派しやかな僧が、端座しておるのもあつた。恐らく名のある寺の住職であろう。殆ど僧侶の群であるが、中には武士もおり百姓もおる。薪火のあたたかさで、杉の小枝の雪が、とけて、どさつと落ちるので、各処で、わあつという叫び声があがる。夜もふけて、寒さが加わると、薪火だけではおつつかなくなつて、どぶろくを呑み始めた所もあつて、笑い声がしきりにあ

がり始めた。中にはどぶろくがすぎて、なにやらわからないが唄を歌い出した処もある。

ここは大聖人さまのおる塚原の三昧堂まじかの場所である。時は文永九年の正月十五日の夜、塚原の山野を埋めつくした、かがり火のために、今夜の満月はむなしく中天にかがやいておるだけであった。

明日十六日には、大聖人さまを相手として諸宗の僧侶が、三昧堂の大庭において、佐渡の代官、本間六郎左衛門尉重連を仲介として、問答をしようと言うその前夜なのである。念仏宗はここ、禅宗はそこと、地割りをしたようなものの、結局は早い者勝ちなので、その前夜からつめかけて、以上のような大騒動となったのである。

ガヤガヤと、しゃべる言葉なまりも、越後、越中、奥州、信州、関東と大変なことである。信州弁ではアクツ、アツコ、越中越後ならキビス、キビシヨ、出羽の方ならばアクド、会津地方ならアグツに、アダト、これが全部関東弁で言うならば、カカト（踵）のことである。こんな調子だから、なにをしゃべっておるのか、よほど耳をすまさねば、各処の話はわかりかねるが、いずれも、明日の問答についての下馬評である。真言師は真言宗が勝つと言え、禅宗の僧侶は、勝者は禅宗であると言い、念仏も負けてはいず、これだけ集まったって、数の多いのは念仏だから、なにかの時に、日蓮法師をやつつけるのは、わが宗であると鼻いきがあらく、うかうかすると、大聖人と問答をする前に、お互い同志で問答をしかねまじき光景であった。



明日にそなえて、うとうとと眠る僧侶は、余程自信のある僧侶とみえ、なにかのきつかけで、日蓮法師を一言で、とつちめて、わが名をこの問答において、一躍上げてみようと思う、高名にあこがれた学僧であるかもしれない。

そう言った群の中で、ここは珍らしく一人の尼僧が、大声で立ったまま話をしておる。年配は五十すぎであろうか。かがり火にうつる尼僧の顔は、どうみても女とはうけとれぬ、おつかない顔である。話をする度にたった一本残った前歯がちらちらみえて、話にすごみを加えていた。聴き手は薪火にあたりながら二、三十人はいる。話と云うのは、尼僧が冥土から帰ってきたと言う話だから、聴き手が一生懸命になるのも無理がない。その尼僧は一度死んで、七日目に冥土から還ってきた。なぜかえってきたかと言うと、閻魔王の前までいったが、閻魔さんが、名前をまちがえていたことが、わかったので帰してくれたと云うのである。

「こんなに、坊主が沢山あつまつたって、冥土までいって、閻魔さんに逢ってきたのは、わたしだけなんだから、明日の日蓮法師との問答には是非とも、わたしも一枚加えて貰いたいものだと思っておるよ。いくら口達者な日蓮法師だって、冥土の話は出来まいからねえ」

「そうだ、そうだ、閻魔が塩からをなめた顔と言う言葉があるが、お前の御面相では、閻魔もあきれて、娑婆へかえしてくれたんだろう。どうだ」

わあっというわらい声があがった。

「機能がきは、その位にしておいて、閻魔がなんとか言ったと言う話を早くやれっ」

「今するよ……」

尼僧は、野次った人の顔をにくにくしそうに睨めつけながら、話を始めた。

「いいかねえ、冗談を言うのではないよ。本当に、仏法の話をするんだから、よく聞いて貰いたいよ。妾が閻魔の序によび出されて、おしらべを受けた時、丁度、五人の坊主が閻魔さんに、しらべられていたんだ。一人は国は何処だが知らないが、槃若寺の道品という坊主だった。この坊主は、常に大涅槃經四十巻を誦讀致しておりましたと、言葉すくなくに申し上げたら、閻魔王は、よろしい極樂行きぢやとぼんと判子を押された。その次ぎはと閻魔が言うと、宝明寺の智生でございますと一人の坊主が進み出たら、汝か……汝は坐禪苦行の功があるぞ、極樂行きぢやとこれも又ぼんと判子を押した。次は融覚寺の最曇でございますが私は、生前中、涅槃經四十巻華嚴經六十巻を数千人の人に講義を致しましたと自慢げに申し出たのだ。そうしたら、その時、閻魔はなんと言ったと思う、皆の衆ようくきけよ」尼僧は得意げに、あたりを見廻して一寸言葉をきつた。

「いいかなあ、その時の閻魔の裁きはこうだった。汝はお経の講義をしたと言うな、だいそれた

ことをした者である。講義をするものは彼は秀ぐれておる、これは劣つておると言つて經文を比較するの罪におちいるのである。それに講義をしようと云う以上は、自分より聴き手は劣るものと考えやすく、己におごる心が出来るものである、今はただ坐禪と經文誦誦の時であつて、經文を講義するの時代ではないぞと言つた。あわてた最曇は、平身低頭の頭をあげて、「私は金持ちの家に生れた訳でもなく、まことに貧者の家に生まれまして、おごりたかぶるの心なぞ毛頭にございません。只生来學問がすきでございましたので、お経を講義しただけでございます」と言つたが「言訳はならんぞ……」と閻魔王が言つと、ばらばらつと、青鬼が十人程、とび出してきて、最曇をとりまくと、こつちだ、と最曇を追いたてて、西北門の方に出て行つてしまつた。門のあく時に、ちらつとその方向をみたが、門も真黒なら家も真黒で余り好い処ではなきさうだつた。

お次ぎと言つと、私は禪林寺の道山でございます。私は沢山の檀家を教化し、等身大の仏像十体をこしらえて供養し、尚且つ一切経をこしらえた者でございます。これも自慢たらしく申上げると、閻魔さんは、帳面をくつた手をやすめて、道山ようきけよ。沙門と言つものは、常に心を一に摂して、仏道を守ることと坐禪經文誦誦が第一である。世間のことに心をつかうことなく、經文や仏像をこしらえることは一応正しいことではあるが、すでに仏像をつくるには、他人の財物をあてにしなげれば、僧侶の身では到底つくる事が出水ないであろう。物を得れば、必ずらむさぼるといふ心がおきる、むさぼる心とは即ち貪心である。貪心を生ずれば貪毒、瞋毒、

痴毒ちどくの三毒が必らず生ずる、三毒の生じたるものは、煩惱を具足して沙門にふさわしくないぞ、汝も更に糾明の要がある。閻府が語尾に力をいれて断定すると、青鬼めが再び十人程現われて、道山を黒門の方に引き立てていったが、道山は悲しい声をあげて、娑婆では、功德になるぞと思つてやったのに、ここでは話が違ふとは。情けなや、情けなや、黒門がしまつても、道山の叫び声がかこえていたのは本当に気の毒であつた。五人目の坊主は靈覚寺の宝明といたが、閻魔の前に出ると、大いばりなみえを切つて語りだした。私は坊主になる前は公卿でございました、いろいろな役にもつきましましたが、最後は若狭の国の国守になつた時、自分で靈覚寺を建立して僧侶になりました。急造の僧侶でございますから、経文誦誦と云うところでは、多少劣るかも知れませんが、仏様を札拝すると言ふことでは、決して人後に落ちるものでもございませぬ、如何なものでしょうか……閻魔王は宝明と申す者、汝も愚かな者ぢや、ようくきけよ。汝は国守であつた時に如何なることをしたか、その浄玻璃の鏡にかけてみようか、如何じやと言へば、最初の勢は何処へやら、宝明は、ふるえながら消えいらんばかりに、地にうづくまつてしまつた。頭上に閻魔王の声が鳴りひびいていた。そうであるう。鏡にかける迄もない、汝が国守であつた時は、理をまげ法をまげ、あまつさえ民の財産を、さんざん横領したではないか、靈覚寺を建立したと言うが、それも汝の力ではなく、民百姓のものをかすめてつくつたものである。何んの功德があるろうぞ、汝は最早糾明の必要はない、早速に地獄ゆきじや、この言葉が終わらないうちに赤鬼

が、どやどやと大勢やってきてうずくまった宝明を、つまみあげると、さつきと黒門の方にひっぱって行ってしまった。どうじゃ、これが、わたしが七日間冥土にいつてきてみてきた話だ、本当の話だ、この閻魔のさばきでもわかるように、今は坐禪と経文読誦をしておれば救われる時代なのだ、それが、たった一人の日蓮法師を相手に、問答しようとして、この雪の国佐渡の島にこんな集まっておるとは、本当にばかばかしいことではないか、どうじゃ皆の衆……」冥土の話をすると言うので、長いこと静かにしていたが、冥土の話が終ると同時に急にガヤガヤし始めた。

「尼さん、尼さん……」

人の群れから声がかかった。

「なんだよ……」

尼が言うと、

「その閻魔さんと言うのは、何代目の閻魔さんだねえ」

とひやかした。

「閻魔に何代目なんかあるものか、閻魔は閻魔だよ……」

と言ったので、どつと笑い声が上った。

「閻魔は一人でいたか」

誰かが声をかけた。

「無論一人さ、わたしがいった時はねえ」

と尼が返答すると、

「玄応音義二十一という書物をみたことがあるか……」

「そんなむずかしい本はみたことがないよ。どうせわたしは無学の尼だからねえ」

「その本によると、閻魔とはくわしくは閻魔羅社と呼ぶのだ、閻魔とは二つということと羅社とは王ということだ。だから二王という意味だから二人いなければならぬ」

「一人は何処かに、遊びにいつていたのだ」

とまぜかえしたので、どつと笑い声がどよめいた。

「真面目にこの尼さんに物を教えておるのだ、まぜつかえす奴があるか、二王は兄と妹ということになっておる。二人とも地獄の王であつて、兄は男の方を裁き、妹は女を裁くとある。お前は尼だから、羅社の方がさばくのであつて、閻魔がお前をさばくことはない筈だ。嘘を言つては、それこそ、舌をぬかれるぞ」

「嘘なんか、言うものか、だが、そんな偉らそうなことを言うなら、明日は一月十六日、なんの日か知つておるか、答えてみる」

尼僧は本当に怒つて、問い返した。

「一月十六日……一月十六日はだなあ……」

「ごまかすな、お前こそ何んにも知らないらしい、教えてやるから覚えておけ、正月の十六日と盆の十六日は、閻魔さんの命日の日だ、子供だって知っておる。貴様こそ、閻魔さまに舌をぬかれるぞ」

再び、どつとかがり火の火をあおるような嘲笑が起つた。

「日蓮には十王讚歎紗という著述があつて、中々閻魔の研究をやつており、自分もみてきたようなことが書いてあるから、尼さんの舌ぐらいでは、日蓮と問答は無理だよ……」

と別の杉の根もとがら声がかつた。

一寸静かになつたと思うと、禪坊主らしいのが、法衣の袖をまくりながら、大きな声で怒鳴つた。

「仏法出現以前の世相いかん……誰か答えてみよ……仏法出現以前の世相いかん」

このどなり声に、塚原の山野は人なきが如く、静かになつた。かがり火がもえきつたか、ぱあつと、火のこを散らしてふつと消えた。

なる程今夜は月夜だったのかと、お互いが気がつく程に、杉の木立をもれる、月の光りがあざやかに輝き渡つた時、突然でつかい声で返答があつた。

「天下泰平、天下泰平」

わおつと爆笑が起り、再び塚原の山野は以前にもまさる喧争の場所となつた。

丁度その頃、ここも塚原の一軒の大きな農家に、佐渡の有力な諸宗の僧侶が集って、明日の問答の準備に余念がなかった。念仏の唯阿弥陀仏を頭として、生論房、印性房、慈道房、道観房、慈観房等々が、板の間の炉辺を中心にして相談をしておった。

「鎌倉から極楽寺の院代善観上人の御着でございます」

土間から声が掛ると、一座はどよめき出して、奥の部屋に、あたふたと伝言するものがある。

「とうとう、問答に迄もちこしてしまつたのですか、不手際な話ですなあ」

院代の善観上人というのが、不機嫌な顔をしながら、二、三人のお伴をつれて家の土間に立つた。

一座の中で、それに返答をするものはいなかった。奥の部屋から、唯阿弥陀仏、生論房、印性房等々が、五、六人どやどやと出てくると、土間の善観上人に向つて叮重を極めた礼をして、「御上人さま、どうぞ、奥へお通り下さい、そこではお話も出来ません。この夜中の御着さぞ途中困難ごんなんでございましたらう」

「途中の困難などどうでもよいですが、何故日蓮と問答なぞするようにしてしまつたのですか。極楽寺良観上人さまの御苦心は水の泡となりました。残念、残念、奥の部屋より、この炉辺の方



が結構です」

善観が炉辺に坐ってしまったので、首頭部の僧侶も仕方なく、その前にすわり、今迄、この部屋にいた僧侶は、あべこべに、奥の部屋へといつてしまった。

「問答ということになったところをみると、あの御教書は……」

善観は声をのかと、眼がおで、話しても大丈夫かと言うような様子をした。一座の人々は、互いに顔を見合せて、大丈夫でございますと、うなづくのであった。

「あの御教書は、ばれましたか」

「善観さま、残念ながらばれたのでございます」

生論房が答えた。

「余人がつくつたのならともかく、この佐渡の国の国主である、武蔵守宣時殿の御教書ではないですか、何故、ばれたのですか。この御教書を出すようにしたのは、良観上人さまの並々ならぬ御苦心のある所です。ばれたとあれば、良観上人さまのお顔にも、かかわることですからなあ」

善観が深刻な顔をするので、一座はしんとしずまってしまったのである。善観は言葉をつづけた。

「大体が、貴僧達も御承知の通り、この佐渡の島に流されて帰った人は一人もありません。順徳上皇さますら、この島に流がされては、佐渡の土となって相果て申した。日蓮が竜ノ口で斬首と

きまつていたのにもかかわらず、その刑をのがれたのは、御執権職時宗さまの御台所が御懐妊であつたからです。なにも日蓮なぞの法力なんぞによるものではありません。日蓮の仏力、法力で竜ノ口の難をのがれたと、近頃言いふらしておるようですが、まことに笑止千萬な話です。そのような彼等に都合のよい噂話を消すためにも、ここ、佐渡の島で、日蓮の首を切つて、仏敵を亡ぼされはなりません。そのための深謀遠慮な御教書であつたのですが……」

印性房が、思わず返答した。

「御言葉中甚だ失礼ですが、申し上げます。申し上げます」

「なんですか……」

印性房は、興奮のあまり、声を出してしまつたのだが、落着いてみると、自分が、善観に向かつて返答する資格のないのに気がついて、

「……、……」

だまつてしまつたのである。この時首領格である、唯阿弥陀仏が始めて口をきつた。唯阿弥陀仏というと、阿弥陀仏の次ぎぐらいに、えらそうにきこえるが、実はそんな意味ではなく、念仏を常に申しておりますと言う意味の名前であつて、学識の方ははなはだ、あやしい人物である。

「善観上人さま、実は、佐渡の念禅真言の僧侶も拱手傍観しておつた訳ではありません。この佐

渡の島こそ、仏敵日蓮を亡き者にする場所と考えまして、日夜努力しました。一滴の水一粒の米も、日蓮の喉を通すまいと思つて、四辺に警護をつけて充分の用心をしたのでございますが、不思議と日蓮は死にません。邪法をつかうと聞き込んでおりましたから、十日や二十日はさもあらんかと安心しておりますと、中々死にません。そこで、しらべてみますと、なんたることでありましょう。日蓮に食い物を、ひそかに運んでる奴がおるのでございます。そこで、面倒だ、遠矢にかけて射殺ろしてしまえと、或る日、強弓自慢の者をつかひまして、遠矢をかけたのでございますが、それがなんと、日蓮めにみつかりますと、高い杉の樹から堂とおちまして、介抱してくれたのが、敵の日蓮といったような調子でございました。そこで、武蔵守様の御教書をいただいたので、この機を逃がすなと、島の全部の僧侶は勿論、念禪真言の信徒二、三百人をひきつれて、代官本間六郎左衛門の屋敷につめがけまして、日蓮を早速殺せとつめよつたのでございますが、代官は言を左右にして応じません。大勢の力をもって代官をせめたてますと、六郎左衛門はならんと言うのでございます」

「何故、ならんと言うのですか」

善観の問いに答えて、

「代官はこう申しました。実は日蓮には、執権職時宗殿の副状が、この島にきた時からあるぞと申すのでござります。

大勢の人々が興奮のあまり、みせよ、みせよと叫びましたので、代官はついにその副状をもつてまいりました。この唯阿弥陀仏たしかに、わが眼をもつてみました……」

「なんと、書いてあつたのですか……」

「それには「この人はとがなき人なり、今しばらくありて、ゆるさせ給うべし、あやまちしては後悔あるべし」とあつて、たしかに執権殿の書き判がございました」

「ううむ……」

善観は思わずうなつた。

「時宗殿の副状がある以上、たとえ武蔵守殿の御教書があつたとしても、勝手な処分は相なりませぬと、代官本間六郎左衛門が副状片手に叫びましたので、代官所におしかけた二、三百人の人間も、ついだまつてしまいました。六郎左衛門も利口な奴ゆえ、当方の武蔵守の御教書はみせよともなんとも言わなかつたので実は当方は助かりました。そして六郎左衛門めが最後につけ加えたのでございます。皆様方も、御僧侶は昔から問答と言うことがあつて、法の勝劣を決めると言うのではないか、問答によつて、日蓮を攻め落とすと言うならば、六郎左衛門も決して仲介をいやがるものではない。問答せられよ、問答せられよと叫びました。すると、つめかけた念禅真言の信徒が、そうだ、そうだと叫びましたので、ついに、日蓮と問答となつたのでございます」

善観も沈痛な顔をして、ついに一言も発することなく、事態の急をみとめざるを得なかつたの

である。

一一

文永九年一月十六日の朝がきた。

佐渡塚原の三昧堂の大庭である。

はためく幔幕の前に、本間六郎左衛門とその兄久経の二人が一族郎党を引きつれて床几に厳然と腰かけている。後年人々が天下三問答の一つと名をつけた、この塚原問答の本日の仲介をかつて出た訳である。六郎左衛門としては、法門の勝敗を決定する役柄とは毛頭思つてはいない。むしろ自分も念仏宗の信徒であつてみれば、本日の問答は念仏の僧侶に勝たせたい。又勝つものと思つていた。だが、念仏の僧侶が問答に勝つたとしたら、どうなるだろう。恐らく、三百人の聴衆の怒りは、よもや日蓮を生かしてはおくまい。六郎左衛門の眼前で、日蓮はなぶり殺しになるだろう。

それを代官としては恐れたのである。

守護所に数百人が押しよせて、日蓮を殺せ、日蓮を殺せ、罪があろうがなからうが、この佐渡の島に流がされて、最後まで生かしておいた、ためしはないではないか。頸をはねろ、そつ首ひ

つこぬけと叫んだ時に、六郎左衛門は

「時宗殿より日蓮を殺してはならぬという副状があるぞ」

と叫んで、本日この問答にもちこんだ、六郎左衛門であったのだ。だから、六郎左衛門は、問答に負けた場合の大聖人の処置を考えて、警備を厳重にしていたのである。

大聖人は如何かとみれば、そまつな筵の上の敷皮に、どつしりと座をしめて、仏像の如く静かであった。この大聖人を取りまいて唯阿弥陀仏（これは常に南無阿弥陀仏を唱えておる人の意味である）生論房（律宗）印性房、慈道房、道観房、等々の僧侶がならび、その外輪に、越後、越中、出羽、奥州、信濃の国々からあつまつた法師達が、怒りの眼をきらきらさせており、その周囲の杉木立の中には、百姓やら、にわかじたての僧侶や、金剛杖をかまえた修験道のものもいた。最初から問答は無用、日蓮を打ち殺すものは、我が修験道なりと構えて、口の中でぶつぶつと言っておるのは、さしずめ大聖人をしてへいこうせしめようという、答力欠失の呪文を唱えて祈禱しておるのである。

その数ざあつと三、四百人が大聖人さまを中心にして、一問一答、或いは問答をどんどんとしかけていって、返答をさせる隙はもたせず、たとえ一句なりとも詰つたならば、勝つた勝つたと、凱歌をあげて、そのどさくさにまぎれて打ち殺してしまえというのが、この場所には、今は顔を出してはおらぬが、昨夜、急をきいて鎌倉から、塚原にかけつけて、背後でみんなをあやつる極楽

寺良観上人の院代をつとめる善観の策略であった。

時刻はせまった。

佐渡代官職本間六郎左衛門重連が、扇子をきつと右手であげると、背後の武士が、

「佐渡配流の日蓮と、諸宗諸派大徳方々の問答を只今より許すの儀、代官職よりお許しが下され  
ました……」

塚原の山野にこだまする程の大きな声であった。

わあつという喊声があがり、その声のひびきで杉木立の枝の雪が一勢におち始めたので、そこ  
ここに、どよめきが起り、筵にあぐらをかいていた、諸大徳と言われた、僧侶達は落ちてくる雪  
に悲鳴をあげて、全部がたちあがつてしまった。

「すわれ、すわれ」

「みえないぞ、雪がおちてきた位で騒ぐ奴があるか、前がみえないぞ」  
と、どなるやら、

「問答がみえない、すわれ、すわれ」

「馬鹿、問答はみるものではない、きくものじゃ、あほらしい……」

「みるも、聞くもあるもんか、まだ一向に始まった訳ではないぞ、おちつけ、前はともかくすわ  
れ、諸人の迷惑だ……」

てんで、てんでのことを、どなって、暫く騒然としたが、やがて、嘘のような静けさがおとずれて、頭上を吹く松籟の音がさあつとすぎてゆくだけであつた。

大聖人は依然として黙しておる。

六郎左衛門兄弟も沈黙のままである。

そして塚原の山野にあつまつた、三、四百人の人も黙然として、すぎゆく風の音に耳をすました。

これは、誰が第一番の口をきるかと言うことの期待をかけられての沈黙であつた。

六郎左衛門が、しびれをきらして、扇子を上げようとした時である。

「日蓮坊……」

と声をかけて、僧侶がどなった。

「貴僧は、念仏無間、禅天魔、真言亡国、律国賊と常に言われるそうだが、それは本当のことか、もし本当だとすればいずれの経文にそのような、馬鹿げたことが書いてあるか、返答をせよ……」

大聖人は依然として口を即座に開かなかつた。返答をしたのは外の僧侶だつた。



「日蓮坊その返答は暫くまで、只今の質問者は、自分の姓名をも言わず、問答をしかけようとしている、そんな作法知らずに、日蓮坊が返答する筈がないわ、問答をいどむものはすべからく、所屬の宗派を先ず名のれ、この大勢の中には、寺ももない貧僧もおろうがそれにしても、宗派と姓名は名のれ、そして住職ならば、寺名も名のれ……」

「ついでに僧位も名のれだろ……」

弥次が、とんだので、わあつと笑い声があがった。

「笑いごとではない、僧位を名乗るのが本式だ、貴公等は問答の法式を知らんなあ」

と怒鳴りながら、あたりをみまわすと、西の群れの中からすわったまま声がかかった。

「おい、そう言う貴公こそ、宗派も宗旨も、どこの住職だかも名のらんではないか、自語相違というのが仏語にあるが、貴僧知っておるのか、こんな所で、自己の姓名所属宗派僧位住職など、なんで名乗る必要がある、殿中においてする問答ならまだしも、ここは塚原の山野ではないか、正式の問答の形式なぞなんているものか、先程、問答開始の時の、代官殿の家来のこと忘れていたのではないか、佐渡配流の日蓮と、諸宗諸派の大徳の方々との問答云々と言われたではないか、日蓮は、お上よりお咎の流人の身であるぞ、これと問答するなどは、実はもつての外で、口をきくも我身が汚されると思っておる程じゃ」

「そんな考えなら、なんでやってきたのだ」

「わしはただ見物にきただけじゃ」

「見物にきただけなら、閉口して見物しておれ」

「そうだそうだ」

と同ずるものと、

「何処の僧侶か、知らないが、先程の僧侶が言われたことは正しいぞ、ここは殿中ではない形式はいらない、姓名なぞ名乗る必要なぞあるものか」

「そうだそうだ、姓名も宗派も宗旨も名乗る必要なぞあるものか、日蓮に勝った時はよいだろうが、負けた時は、後代まで、名がのこるからなあ、まあこういった処がずぼしではないかなあはつはつはつ……ア」

この一言の刃物のような声は、すみ渡つてきこえ、一寸塚原の山野も静かになった趣きがあった。

業をにやした、本間六郎左衛門が、

「各自各手の問答は、始まったが、日蓮法師との問答は一向にないのが如何なものか、さあさあ問答つかまつたら如何じゃ……」

と言い放った。

この時、間はつをいれず大聖人は言われた。

「各々方々には、遠く、奥州、出羽、越中、越後、信濃の国々より、本日、日蓮房に、お教えをたれようとしておでかけ下さった方々であります。昔帝釈天王は野干を拝して仏の教をきいたということも仏説にございます。法によつて人によらざれ、本日、日蓮は教示を賜わる側にあります。しかれば、宗派宗旨、僧位、尊名を名のる必要はございません。御自由に御教示を賜わりたく思います。また、日蓮も答えると同様に、皆様方に質問して教示を賜わりますよう、では」

大聖人が辞をひくくして、一膝のりだと、不思議や三、四百人の人々が、すこしづつ膝をうしろに引く音が、ざあざあときこえるのであった。

「禅宗の僧、教示を願う、禅天魔とはいずれの経文にありや」

「汝、禅宗ならば、何故、禅天魔の所在の経文をたずねるか」

「何故の反詰ぞ、直ちに経文をあげよ」

「禅は一切の経文を、はきたるつばきと言ひ、月をさす指となして、天地日月等も汝等が妄心よりいでありと言うて経文を笑うに、汝その経文に天魔の所在をたずねるは、禅宗にして禅宗を知らざるの輩なり、いかん」

「……………」

一人沈黙してすわると、一人がたつた。

「日蓮坊主ようくきけ、仏説大梵天王問仏決疑経に「我れに正法眼蔵の涅槃妙文実相無相微妙の

法門あり教外に別に伝う。文字を立てず、摩訶迦葉に付属す」とあって、迦葉にこの禪の一法を教外に伝う、故に、仏の経経は月をさす指、月をみては、後は不用のものなり、心の本分禪の一理を知って、後は仏教に心をとむべきの用なし、されば、我が禪の先哲は、十二部経はすべて是れ閑文字とたつなり」

「禪に三種類あるを知って、汝、日蓮に問うか否や……」

即答はなかつたが、大聖人はすぐと言葉をつづけた。恥をかかせたくなかつたのだろう。

「如来禪、教禪、祖師禪である。汝が今富う所は祖師禪であるが、教外別伝きょうがいべつでんと言つて、教をはなれて之れを伝うといわば、教をはなれて理なく、理をはなれて教はなき道理。教とは全く理ということの道理を汝は知らざるものである。釈尊金棺こんかんより、拈華微笑ねんげみしやうして迦葉に付属し給うと言ふも是れ教ではないか。文字を立てずという四字も即ち教であり文字である。汝は汝が師匠に一言も問わずして今日の僧となりたるか、汝が師匠は一冊の書籍も汝にあたえずして仏教を習えと教えたるか、如何、返答あれ」

これには、さすがに返答がなく、人ごみの中に、すばやくすわると、その影をかくした。三、四百人も、とりかこんだ中から、誰れでもきやすく問うことが出来るので、そろそろと活気を呈してきた。

「日蓮、御坊、禪天魔とは経文のいずれにあるやと、最初の問者が、問うたのに、何故経文をあげずして、うまく問をのがれたのか、拙僧は貴殿が、卒直にその所在をあげてくれればよいのだ、そしたら、本日只今より禪宗の数珠をきつてもよいのだ。経文をあげられい、経文をあげられい」問者の真面目さが、塚原の大庭を圧して、ちよつとしまつた気配であつた。

「日蓮が、禪は天魔の説と云うのは日蓮が言葉ではありませんぞ、仏の御遺言に「我が経の外に正法ありと云うは、天魔の説なり」とあるから申しておるのであります……達磨大師が印度より唐土にきて、四卷の楞伽經りょうがを第二祖たる慧可にさずけて、我れ唐土の国をみるに、この経よりすぐれたる経一卷もなし、汝たちちて修行して仏になれと教えたりと、慧可禪師の伝記にあるではないか、されば、達磨も慧可も、すでに経文をさきにしておるではないか、もし経によると言うならば、その経文は、大乘教か小乗教か權教か、実教か、教の勝劣を弁別すべきではないか、達磨が西よりきて、人の心をさして仏なりと言つたことに、禪宗の諸僧はひどく感心しておられるが、これ程の理屈は、華嚴、大集、般若、等々の法華經以前の權大乘の経にはざらにあることで、なんらめずらしいことではないわ、禪宗が楞伽經、首楞嚴經、金剛般若經を依り所の経文としておるのは、教外別伝、不立文字と自語相違ではないか」

禪宗の僧侶達は、なにをほざく日蓮坊とか、配流悪僧の駄弁、警策をもつて、叩き殺せと叫び

つづけたが、なんとか名のある禅僧であろう。

「各々、悪罵をつつしまれたい、禅徒の恥ではないか」  
と両手をあげて、大勢の喧噪をしずめて、

「では、日蓮法師、これは禅家の公案であつて、質問するも、あんまり身勝手と思うが、答えられたら、答えてみられい、決して勝負をきそふと思う質問ではないが」

大聖人は静かに、微笑をうかべて答えるのであつた。

「松に藤かかる、松枯れ藤枯れて後如何」 (註一)

「上らずして一打」

「……」

ううむと言う呻り声が、塚原の大庭の禅宗の僧侶の口々から上つた。奇問をもつて奇襲したつもりが、みごとに破れたのである。念仏や、真言の僧侶たちは禅宗の僧侶が思わず、うーむとうなると、これは暗黙のうちに、負けたと考へたので、凱歌こそあげないが、いざまだと言わんばかりの表情であつた。だが禅宗の負けたのはよいが、こんどは拝聴ばかりしておれない。いよいよ自分達が質問しなければならぬので、一寸容易ならんぞと言う心持ちが、禅宗以外の諸宗諸派の人々の顔にみえていた。

そうした沈黙は大聖人の言葉で破られた。

「只今の公案の御返答は、禪家では満点の返答であろうが、それが、満点の返答だからこそ禪は天魔といわれるのである。釈尊が八十歳にて涅槃に入った時、沢山の外道や天魔がよろこんだと言うが、それにも似たのが禪家である。なぜなれば、禪宗は滅度の仏をみるが故に、松枯れ藤かれるなぞと言うのである。法華経の仏とは、寿命無量常住不滅の仏であり、この娑婆世界に常に住して法を説く、不滅の仏である。法華経には「この法法位に住して、世間の相常住なり」とある。禪宗は仏を滅度したとみる、外道の無に見いだすものである。だからこそ、一切経を習うものは、犬の雷をかむがごとし、猿の月影をとるにいたりなぞ言うのである。而して禪僧等が、天魔の言にまどわされて、今鎌倉では武士の間に禪が流行しておると言うが、その実体を卒直に話してみると、禪宗の禪を、ふんどし禪とよんで、ふんどし宗と考えておる輩が大勢おるわ……」

思わずわあつと言う笑い声が、塚原の山野を動かし、代官職の六郎左衛門兄弟すら、いかめしい顔を忘れて笑い出すしまつであつた。

すると、聴衆から野次がはいった。

「禅僧の高僧達が本来無一物なぞと、教えるので、裸体になつて修行しなければならんと考えたりしておるが、どうしても無一物になれないで、こまるものが、でんとついておるんで大弱りの態という処だ」

わあつという、前にもました笑い声がおこつた。

「そうだ、そうだ、その一物がとれたら、たいした悟りを得られるだろうが、名僧智識でも、これだけは御勘弁下さいの大切な珍宝だ……」

笑い声がまたわあつとあがった。大聖人は言葉をつづけた。

「……或いはまた、禪の宇を単衣即ちひとえものとよんで、嚴寒にも、着物をきずにふるえておるのが禪宗だと考えておるのがたんとあるのも気の毒だ、臘八の摂心（註二）にいつてみよ、単衣ものを着て、松樹の上でふるえておるのが禪宗だと思っておるのが、今鎌倉で流行の武士の禪宗というものだ。天魔の言葉のみいりしかとは、このことを言うのだと申してもさしつかえがないわ……」

禪宗の僧侶は、大聖人の言葉をさえぎる勇氣を失っていた。

「真言の僧侶、真観、出羽の国の住人、日蓮坊に問う、御坊は真言亡国というが、由来天子真言公卿天台と言われるくらい、天子の帰依ふかき我が真言宗をば、なんの証拠あつて、真言亡国と称するか、返答せられよ、あれにおける修験道の人々は、問答は最初から無益のこと、代官殿が言う時宗殿の下知状なども、この辺国佐渡では、通用するものか、斬つてすてよと言うのであるが、先ず、先ず、先ずと拙僧がとりなしての問答、心して御返答を受け賜りたい……」



この声をきくと、三、四十人の修験道の連中が、一勢に法螺貝を、ふうつぶうつぶうつとふき始めたので、その音のうるさいこと……

「法螺貝をやめい、法螺をやめい」

六郎左衛門の家来達が、法螺貝にまけないくらいの大声でどなったのだ。

「法螺をやめい大法螺をやめい、調子のよい本当の言い草だ」

座中の人々も口ずさみながら笑い始めた。

ところが、修験道の連中は、そんな制止なぞの声には、とんちやくなく、益々法螺貝をふきつづけるのであった。

真観が、何やら念珠をもんでさあつと伸し、さつととじたりすると、ぴたりとその修験道の法螺貝はやんだ。

「日蓮坊、只今の法螺貝は、せめて配流の御坊と問答する拙僧の法のためじゃ。汝が常に口にする法華経の序品に「大法螺を吹いて大法鼓をうつ」とあるではないか、さあさあ、真言亡国の現証を出されよ」

「真観房とか、言われたなあ、その真言亡国の証拠は、御房そなたの顔を南にむけてみられるがよい、それで充分にわかる筈じゃ」と言われた。

「……」

真観房の奴、全くその瞬間あつげらんとしたのだから面白かった。

「御房はこの佐渡の国には、始めてまいったのですか」

大聖人はやさしく問われた。

「勿論、流人の配流される、このいまわしき佐渡の島に、なんて従前こよう筈があるうか、始めてじゃ、真言を亡国の教えと称して、この佐渡島にながされた、貴様のことをきき、斬り殺す前に、問答を許すときいたので、噫呼、世にも、哀れな僧侶もおるもの、同じ仏道を志しながら、自ら、配流の身を恥じようともせず、おこがましくも諸宗と問答をするという。出来ることなら、真言秘密の法をもつて、汝日蓮の病悩を救わんものと思つてはるばると、出羽の国から、この佐渡の国に、始めて来島いたしましたまで……」

「始めてこられたのでは是非もないが、御房、日蓮が言葉をきいて南の方をむいて、懺悔滅罪の合掌をなされよ、ここより北方黒木御所にこそ、真言亡国の現証がまざまざとあるのを御存知ないのか」

「真観、この佐渡の島には、始めてじゃ、今御房の言う如く、本当に亡国の現証あるならば、この真観、真言をすててもよいが、返答如何んでは、そなたの首はないものとおもってもらいた  
い」

「人皇八十四代、順徳天皇の御陵はいずこにあるのか、真観房殿は忘れたものとみえる。

この佐渡国の配流の生活二十二年にして、何故順徳帝はこの佐渡の土となられたかを御存知ないとも見える。今を去る五十三年の承久三年に、何故、三上皇は、臣下よりこの島に遠流せられたかを、真観房殿は考えたことがあるか。これひとえに真言の邪法の故である。そもそも人王八十二代隠岐の法皇は、承久三年五月十五日、伊賀太郎判官光季を討つて、鎌倉の北条義時を打つ血祭りとなし給い、六月八日に日本国に仏法渡りていまだ、二度までは行なわぬという、十五壇の真言の秘法を修法した。十五壇の法とは、一字金輪、四天王、不動、大威徳、転輪、如意輪、毘沙門、愛染王、仏眼、六字、金剛童子、尊星王、大元、守護経等の大法にして、この法の目的とする所は、王国国敵となるものを降伏して、命を召しとつてその魂を、密厳浄土へおとすという法である。これを行ずる人は、天台の座主慈円、東寺御室、三井の常住院の僧正等四十一人、ならびに伴僧等は三百人であった。しかるにどうか大願成就の七日目の六月十四日に、関東の軍勢は、宇治勢多を押し渡つて京に入り、三人の帝王は生けどりとなり、宮中に火を放たれて九重は灰燼となり、三帝は三国に流罪と決定した。その一帝は、この佐渡の島に相果て申したではないか、これすべて真言十五壇の秘法のとがによるものである……」

この事実<sup>に</sup>抗弁する人は一人もなく、大聖人の声は、塚原の大庭を圧してなおもつづくのであった。

(註一) 松枯れ藤枯る云々。松を釈尊に藤は經文にたとえる。釈迦が死んだと言うことにこだわる、小乗の教

(註二) 臘八の摂心―十二月八日を言う、釈尊の成道した日で、一日から八日間、摂心即ち坐禪を昼夜屋外にてくみ、八日の暁方出山の釈迦像の前に大悲呪を誦する。

三

承久の乱の歴史的事実をあげての、真言破折には、真観も口のききようがなかった。

だが、真観は口をふさがなかった。

「日蓮坊、承久の乱の事実は肯定しよう、だが、すべて戦さは時の運というもの、たとえ五戒十善の君と仰がれる帝王たりといえども、いくさは、いくさだ。勝敗は時の運にしたがうの外はない。いくさなぞは帝王の起こすものではなく、すべて側近の輩が企てるものである。帝王は雲の上にあつて「大君は神にしあらば、いかすもの雲の上に庵ますかな」と万葉の昔からある。俗事にかかわるが故に、そのような結果となつたのであつて、それがなんで、真言の秘法をきずつけようか。そもそも真言にて仰ぐ所の大日如来とは、マカビルシヤナといい、マカとは日本語で大を意味しビルシヤナとは日の別名なれば、大日と訳す。或いは別名にビルシナとは光明遍照の義

で、<sup>へんしやう</sup>遍照如来とも称す。日蓮坊、この塚原の山野の杉木立。松の大木をみよ、すべてこれ、日の当たる裏側には影がある。それよりも、汝が座せる、筵の上には、汝の影がある、今我が、真言にて言う所の大日とは、そのような影のある所の日ではない。外を照らせば、内に及ばずという日ではない、我が仰ぐ太陽は、唯昼ありて夜はともさず、斯くの如きものは劣にして、大日如来の日光は、一切にあまねいて、内外昼夜の別はない、故に最高頭最広眼蔵如来と号するのである……」

真観が、大日如来の功德の話をつづけておると、大聖人の声が、それをとどめた。

「真観殿、真観殿、日蓮はもともと真言宗の僧として、出家得度いたしましたもの、そのようなことは充分存知しております。では、真観殿に伺うが、大日如来の御両親は、どう言うお方で、なんという御名前でしょうか、一つおきかせを願いたい……」

「大日如来の御両親の姓名とは……」

「左様、伺いたいものでございます。ついでに、御両親がわかれば、生れた処も伺いたいものでございませう」

「生れた処……」

「さよう、そして生れた処がわかれば、死んだ処も伺いたいものでございます」

「汝日蓮、汝は自分の口から、たったの今、自分も真言宗の僧として出家されたと言われたでは

ないか、真言宗の僧ならば、そのようなことは、とつづく承知の筈である、馬鹿馬鹿しい……」

「真観房殿、日蓮は、たしかに、大日如来の父母右、生ぜし所も死んだ所も、全く知りません、是非是非御教示を願いたいと存じます」

「日蓮坊、汝は諸宗を悪罵破折するの僧と言うから、少しは経文を学んだかと思つたら、みると、きくとは大違いであつた。そもそも大日如来の父母生死を問うとは、ただ、驚きいった俗物だ、そもそも大日如来は無始無終の色心にして、なんで父母両親や生死の場所なぞあるうか、よく考えてもみよ……」

「これは驚くことをきくものかな、なにも大日如来にかぎらず、我等一切衆生も、蟻も蚊も、おけらもあぶも、みな無始無終の色心である、衆生において、有始有終と思うは外道の僻見と言うものである。大日如来の父母生死の場所は如何かと伺つておるので、法身論を伺つておるのではありませんぞ」

意表をつかれた大聖人の質問に、真観もさすがに口をつぐんだ。塚原の大庭の群衆もざわざわと、風にうごく、雑草の如く、うごき始めていた。

「真観殿、御返答なければ、日蓮、更に伺いたいことがある」

大聖人は、真観を更に追求した。大勢の人数の中にすわりこんで、身をかくそうとした真観は、それも出来ず、啞然としたような姿で、つたつたままであつた。

「大日如来は如何なる仏説にあるかを問いもうそう……」

この質問をきくと、硬直した、真観の顔が、にわかに笑顔になって、早速に返答した。

「今更、日蓮坊が、そのようなことを質問するとはちと解せぬことであるが、この塚原の大庭にあつまった、諸宗の人々に、教えるつもりで答えよう。そもそも大日経とは、つぶさに言う時は、大ビルシヤナ成仏神変加持経と称して、全七巻あつて、大日如来の説法を金剛薩埵こんごうさつたの結集せるものにて、永く南天竺の鉄塔中におさめられしを竜妙菩薩これを流布せりとも、一説には北天竺の石室に蔵せられしを、大猿が弘伝したとも称する……」

「真観坊どの、それほど言われるが、その大日経は、そもそもどなたがとかれたのか伺いたい」

「されば、大日如来が、説かれたと申したではないか……」

「されば、その大日如来がおられると言うことは、どなたが、言われたかと、この日蓮は何つておるのでござ」

真観坊は、さすがに口をつむった。

「大日如来がおられると言うことを説かれた大日経は、釈尊がとかれたお経ではなかつたか。大日経には、我昔道場に坐してこれをとくとある、我とは勿論、釈迦牟尼仏たることは明白である。されば、大日経は新訳の経にして唐の玄宗皇帝の御時、開元四年に、天竺の善無畏ぜんむゐ三蔵が支那にもつてこられた経であり、法華経はそれより三百年前の後秦ごしんの時代に羅什三蔵が支那にもつ

てこられたものである。法華經が支那に渡つてから後百余年をへて、天台大師は五時四教をたてて、従来、五百余年の仏教の學者の教相を破り、一念三千の法門をさとつて、法華經の道理をたてたのである。真言宗の名は印度にはないものを、善無畏が支那にて、勝手に真言宗と称したと思うものである。しかも、善無畏は、法華經と大日經との勝劣を判じて、大日經は法華經よりすぐれたりと勝手にたてたのである。何故かと言うに、印と真言とがない故に法華經は劣れりとたてた。およそこれ程、馬鹿馬鹿しいことがあるうか、それぞれ、真觀殿、お手前は、今盛んに、その法衣ころもの袖そでの裏で、印を結んでおられるが、この日蓮はこの通り、問答つかまつて、一向つうように痛痒を感じぬではないか……」

みやぶられたかと、真觀はさすがに赤面したが、もはや、大衆の中に立つて問答をする勇氣もなくなつたとみえて、くずれるようにすわりこんでしまったのも哀れであつた。大聖人の声は、三、四百人の人がおるとは思えないような、静けさの中であつた。

「印と申すは手のはたらきである。手が仏にならなければ、なんの役にたとうか、真言と言うのは口のはたらきである。口が仏にならなければ、その真言はなんの役にたつことが出来ようか、印と真言とを役立てようと思えば、先ず、仏になるべきことが肝要であると言わねばならない。無量むりょうう却千二百余仏の、印と真言を行じて、仏にはなることが出来るものではない、然るに、法華經には、二乗にじょう作さく仏ぶつ久遠くおん実成じつじょう（註一）と申す法門があつて、法華經以前の四十余年の経々



には、二乗は敗種はいしゆの人ときらわれておるが、法華經にてはこれを破して二乗の作仏をのべておる。法華經にはもう一つ、久遠実成ということがあつて、釈尊の始成正覺（註二）を打ち破つて、久遠の本地を開顕せられておる、二乗作仏久遠実成と、印と真言とをならべて比較するなれば、天地の勝劣と申さればならない。久遠実成こそ、全仏教の根本中心の法門であつて、法華經以外には成仏を談ずるの經文はない。故に、釈尊も法華經の開經たる、無量義經において、四十余年には未だ真実をあらわさずと言われておるのである。然るに、弘法大師は去る、弘仁十四年正月十九日に、真言第一、華嚴第二、法華第三、法華經は戲論の法、無明の辺域（註三）天台宗は盗人なりなど申す書を、嵯峨皇帝に申し奉つて、俱舎、成実、法相、三論、華嚴、律、天台の七宗は方便の教であり、真言宗こそ真実なりと帝王に申しあげた。その功によつて、嵯峨天皇より、空海は東寺を賜わり、天皇は空海より灌頂を受けておるではないか……」

さあさあ大変なことになった。真言宗以外の律、華嚴、天台、等々の宗々の僧侶は、「わあわあ」という、どよめきを表わした。

「本当のことか……」

「でたらめだ」

「我々が、合同をして、日蓮を破ぶらんとする作戦をみぬいた日蓮坊主が、奸策かんさくだ、騒ぐではない。日蓮の作戦にのつてはならぬぞ、しずまれ、しずまれ」

と大入道の坊主が立ち上つてどなった。大入道が叫んでる時に、僧侶ではない俗人が立ち上つて叫びつづけた。

「……だが然し、弘仁十四年正月嵯峨帝より我が祖弘法大師が、東寺を賜り、皇帝自から灌頂をうけたのは、歴史に現われた事実ではないか、歴史の事実は、誰がなんと言つても否定することは出来ぬ、日蓮坊主がいったことは本当だ、さればこそ、我が祖、弘法大師は滅後八十七年にして、弘法大師と帝王よりおくられた、日本における大師号の第一番者だ、だからこそ、大師と言えば、弘法大師をさすくらい尊いお方である。ただ、日蓮が嵯峨帝をだましたようなことを言うたのは、実もつてけしからんが、わがみるところでは、真言宗以外の七宗と、それを加えて、近頃流行の念仏宗などは、全く話にならぬ、御宗旨だと断言してかまうもんか」

叫ぶと、その俗人は早速に人なかに身をかくしてしまった。怒つたのは、念仏宗の連中であつた。七宗の中には、念仏は数えられていないから、それみたことかと、得意がついていたところ、僧侶でもない俗人に、念仏の悪口を言われたのだからだまつておるわけにはいかない。

「今、念仏の悪口を言うのは、どいつだ、何処に、まぎれこんだ、出てこい、出てこねばこつちから、さがしにゆくぞ」

と二十名ぐらいの念仏僧が、勢いこんで、立ち上り、彼の俗人の、ひそんだあたりをさがし出すという騒ぎが起つた。

「私の乱暴狼籍は厳として許すこと相ならぬと、御代官職より御言葉がありましたぞ、乱暴いたしたものは、問答の敗者なりとみとめて、即刻この場より、御退場を願います。いな、即刻退散さしてみせませうぞ」

退散させると言うのだから、塚原の群集も静肅ならざるを得なかつた。

しかし、大聖人が言われた、空海が嵯峨天皇をだまして、七宗より真言宗がすぐれたりと断言したこの言葉は、共同一致して、釈尊の御名をもつて大聖人をせめようとした、この塚原の山野にあつまつた、邪宗群の歩調を乱すには十分に役立つたと言つてよかつた。

質問が一寸とぎれたので、大聖人は自ら口をきられた。

「各々方、暫く日蓮の言葉に耳を傾むけていただきたい。叡山に総持院を建立して、第三の座主となつた慈覚大師は、法華経と大日経との勝劣を判ずるために、七日七夜、堂にこもつて、いづれが、仏智にかなうや、否やを祈願したところ、五日目の五更（現今の午前四時より六時迄の間）に、日輪を射て動転せしむとの夢をみて、大日経こそ仏智に従うの経文なりと確信してこれを弘むと言うのである。ようく日蓮の言かれる所に耳をかたむけて貰いたい、およそ、内典五千七千外典三千余巻に、日輪を射るとゆめにみて吉夢となすことは何処にもない。我が日の本の国

にとつては、これはもつとも忌むべき夢である。神をば天照といい国をば日本という。又教主釈尊の母は、日をはらむと夢みて釈尊を生んだが故に、教主釈尊を日種とも申す別名もある。殷の紂王は日天を的にして身を亡し、神武天皇の御時、どみのおさと、いつせの命みことと合戦のさい、命の手に矢がたつ、命みことの云く、我はこれ日天の子孫なり、日に向つて弓をひく、故に我が軍に利あらずと言われ、次ぎには、日を背にして合戦せられた故事がある。故に大日経の仏智にかなわざることは、慈覚の夢をみてもわかることである。真言亡国の現証は先刻のべるところであり、真言が、何故亡国の教えであるかは、教理文証をもつて答えたが、まだまだ不信の由あらばなんなりと問うてみられたらよい、決して返答を惜しむものでは少しもないぞ」

「印性房というものが、日蓮坊、貴公六即ということを知つておられるか」  
ぼつんと、ぶつきらぼうに、大聖人に問うものが出てきた。

「六即を貴公問われるか」

「左様、六即とはいずれの経文にあるか、その出所を問うておるのだ」

大聖人は、印性房の質問をきくと、

「わあっはっはっ……………」

と六尺三寸の体軀をふるわせて大笑いに笑うのであった。

印性坊は怒った口調でつづけた。

「日蓮坊わしの質問が、何故おかしい。そのカンラカンラのにせ豪傑僧の笑い声なぞにこの印性房が、ごまかせるとでも思っておるのか」

「いやいや、これは失礼した。本気で御質問の模様なので、失笑したのを許していただきたい。六即とは、経文にはない言葉でございますぞ」

「なに、経文にはない、そんな不都合なことがあるう筈がない。曇鸞、道緯、善導、法然等々の諸上人が、度々言われておる言葉である、又その配立を伺いたいものでござる」

あさはかな印性房は、次ぎの大聖人さまの返答も知らず、問答に最早勝つたような豪然たる態度に変つて、周囲の僧侶を見廻わしたものであった。

「いくたび問われようが、六即の配立（註四）は阿弥陀経にも、六万巻の経文にも、印性房ないのじゃ、ないのじゃ、分つたか」

「でも、鸞綽導然の諸上人は度々……」

「度々引用せられようともないというたらないのだ。実はなあ、六即とは天台大師が言い出された言葉だから、経文にはないと言うのだ、天台大師がはじめて法華経の円位から、建立した修行の次第というのが六即だ、わかつたかなあ」

「曇鸞、道緯、善導、法然等々の諸上人が、所立ではないと申しても、その義を常に引用せられておるならば、立てたも同然ではないか……」

「左様かなあ、日蓮は、昨年の十一月より、この佐渡の島にながされておる故、六即が阿弥陀経に立つる所の法門と変ったことは知り申さなかつたなあ、これも、都をはなれての流罪の身故の悲しさであろうか、天台大師も御自分が初めて建立された六即の法門を阿弥陀経にとられ申されたか、いやはやでござる……」

大聖人の呵々大笑は満座を庄して、何人なんびとの口もひらかなかつた。

「法華経の三の卷迄に、女という字、いくつありや、日蓮房答えてみよ」

これはまた変つた質問で、しかも男ではなくて尼僧であつた。顔を蒼白にして、ヒステリックな声で問うのであつた。

「一〇」

大聖人は答えた。

「何処どこにありや」

「化城諭品第七に「男女皆充滿せり」とあるのが、それである」

「たつた一字しかないのか」

「左様三の卷迄と言われたから一つと答えたが、女人成仏を説かれた、提婆品には十三あり、開

経たる、無量義経には十四文字ある。汝はそのようなことを、この日蓮に問うて、何んの必要があるうか、恐らく、汝はたつた今、日蓮に問を發した印性房が、かくし妻であるうが、日蓮たしかに、その証拠を汝の如是相にみた」

かく言われた尼僧は、蒼白の面を急に真赤にすると、頭巾をもつて、面をかくすが早いか、女の脚とは思えぬ程の早さで、塚原の大庭から逃げだしていった。

「みたか、印性房のだいこくを」

「みたみた。まじめくさつた印性房が、あんな比丘尼を抱いておつたのか、畜生」

「さすがは印性房の妻女じゃ、夫の敵とばかりに、日蓮坊に問答をしかけたのは、そこいらの、弥次馬坊主とは、信心が違うは、みあげたものじゃ、ほめてよい。印性房はよい妻女をもつたものだ」

と弁護するもの、弥次る者、各人各説であつた。そして、ほめられた、印性房はとさがしてみると、その騒ぎにまぎれて、これも塚原の大庭から影をかくしていた。

「印性房がおらんぞ、してみると、今の日蓮坊主の言葉は本当かも知れないぞ」

「仕方がない、大勢あつまればそんな者もくるものじゃ、だが、日蓮、汝は如何なる証拠をもつて、そのような人身攻撃をしたのか伺おうではないか、いやしくも、ここは法論の場所、可哀想な尼僧に恥をかかすとは、慈悲もない処置ではないか」

「彼の尼僧は、真面目にこの日蓮に問答をしかけたのではないこと明白、ただ、印性房の仇を討つつもりにて、日蓮に問答をしかけたものじゃ、さすれば、これに答えるは、まことに大人気おとなげのないこと故、一寸、言いあててみた迄のことである。その昔、マトーバというものが、善慧という僧侶と問答をして、その問答にまけて、くやしきの余りに七日目に死んだことがある。マトーバの妻はそれをくやしがつて、善慧に問答をしかけたが、忽ちにマトーバの妻たることをみやぶられてこれ又一問にして負けたとある。或る人が何故、マトーバの妻と、わかつたかと善慧に問うた時、善慧の曰く「その面に愁色あつて、哀音あり故にマトーバの妻なることを知るとある」今日蓮も、彼の妻女の如是相を僅にみて、印性房の妻たることを知つたので、無益の問答をして、時を費やすを憂いて申した迄で……あの尼僧が、真の求道者ならば、法華経の女人成仏をきかせてやりたかつたが、逃げだしたとは、自ら地獄の道に走りさつたも同様である」

「女人成仏の法華経の話とは、面白そうだ、一つやってみて貰いたいものだ」

これは先夜、地獄にいつてみてきたという話をした、容貌怪異な尼僧の口から出た言葉であつた。大聖人は心やすく質問を受けると、静かにのべられた。

「一切の川のまがれるが如く、女人の心は曲がれりとか、女人は地獄の使也、能く仏の種子を断ずとか、諸経に悪口されておるが、ただ、日蓮が信ずる法華経のみは、女人の成仏を許すの経文である。



天台大師は、法華經に三十卷の註をつくり給うたが、その第七の卷に、他經にはただ、男に記して、女人においては一向に、諸經において叶うべからずと書かれてある。即ち、法華經以外の經においては、女人は成仏をすることが出来ないとある。普賢經には「この大乘經典は諸仏の宝蔵なり、十方三世の諸仏の眼目なり、三世の諸もろもろの如来を出生する種なり」云々とあつて、この經より外は、すべて成仏のことではない。殊更、女人成仏のことはこの法華經より外に更にゆるされるものではない。銀色女經には「三世の諸仏の眼は、大地に墮落するとも、法界の諸の女人は永く成仏の時なし」とあるにも、かかわらず、法華經においては、八歳の童女が、その身をあらためずして、即身成仏をしたのである。これを始めとして、釈尊のおぼ、マカハジャハダイビク尼は、勸持品において、一切衆生喜見如来となり、ラゴラの母ヤシユタラ女も、眷属けんぞくの比丘尼と共に、具足千万光相如来となり、鬼道の女人の十羅刹女も成仏す、されば、法華經は、殊更に、女性の御信仰あるべき御經である。

この塚原の山野にあふれたる僧侶たちは、みな、女人から生れてこなかつたものは一人もおろまい。しかるに、その女人たる自分の慈母を救うの經文を知らざれば、これ僧侶の面をしておろが、親を救うことが出来ない故に禽獸と同然である、法華經を知らざる諸宗の学者は、畜生に同ずるとは、このことを言うのである」

塚原大庭にあつまつた、三、四百人の人達が畜生と言われたのだから、たまらない。

「わあっ……」

という、怒りの喊声が山野をふるわしてあがったのも無理がなかった。

(註一) 二乗作仏、久遠実成 二乗とは声聞縁覚。菩薩の次の二位で、この二つは、我見が強

くて法華経以外では仏になれない。仏は印度出現の釈迦ではなくて実は遠い昔から仏であつたことを久遠実成と言う。

(註二) 始成正覚 印度出現の釈迦が悟りをひらいて仏になつたと言う考え方

(註三) 無明の辺域 迷っておる仏だと、法華経の釈迦を劣とする。

(註四) 六即 天台大師止観にとく。理即、名字即、勸行即、相似即、分真即、究竟即を言い、

円経における修行の次第

#### 四

「日蓮法師只今は女人成仏の結構な御法門を伺つて、まあまあありがたいと申しておこう。だが、法華経を知らざるものは畜生に同ずるとは、ちと慢心がすぎはしないか。おごりたかぶる心は、僧侶の戒むべきところと思つてどうじや、南無阿弥陀々々々々々々々」

塚原の山野をうごかした、大聖人にたいする叱声嘲笑が、この質問でようやく静かになった。

六十をすぎたの、自ら分別くさい顔をした念仏僧である。

「拙僧は、この佐渡の島にすむものではない。わざわざ越中からきたものだ。今、日本国中の寺々の僧侶が、毎日唱えておる、南無阿弥陀仏の、唱名念仏を悪口して、南無阿弥陀仏と唱える、と、地獄におちると申しておるそうだが、本気で、そんなばかげたことを申しておるのか、この耳でたしかめたくてこの塚原にきたものだ、日蓮法師、しかとさようか……」

「念仏無間、禅天魔、真言亡国、律国賊とは、日蓮が、建長五年四月二十八日より、今年文永九年にいたる十八年の間、叫びつづけたことである。唱名念仏は墮地獄の根源とは四箇の格言のまっさきに申しておる」

「しかし、只今では流罪の身となった日蓮法師、その心持ちも変わっておられるであろうと思いがどうじゃなあ」

「越中から、わざわざこの日蓮坊をみたくてきたと申すから、ようく申しきかせよう。念仏が墮地獄の根源とは、日蓮が一番最初に言い出したのではないぞ、先ず、ものの道理をきかれない……」

大聖人が、一番最初に言い出したのではないと、言ったので、驚きの声が塚原の大庭にわいたが、何を言いだすかという一同の興味も手伝って、水をうったような静けさに変った。大聖人の

凜々たる声が一同の耳をおおうた。

「そもそも、わが国において、今日の如く南無阿弥陀仏の名号を唱えることは、法然のせんぢやくしゅう選択集にはじまる。法然は十七歳にして一切経を習い極め、天台六十巻を知りつくし、八宗を兼学して、一代聖教の大意を得たりと称して、選択集なる書物をあらわして、南無阿弥陀仏と唱えることを諸人にすすめたのによるものである。これをうれいて、みなも知る、天下無雙の智人広学の学者である、斗とがのおの賀尾明慧は、摧邪論三巻を造つて選択の邪義を破した。又三井寺の長史、実胤大僧正この人も希代の学者、名譽の才人であるが、浄土決疑集三巻をつくつて、法然の専修の悪行（註一）を難じ、比叡山の住侶、仏頂房隆真法橋は、天下無雙の学匠山門探題の棟梁である。この人も、弾選択上下をつくつて法然の邪義をせめた。こればかりではない。南都（奈良）山門（比叡山）三井寺の僧達が、度々、法然の選択集の邪義は、亡国のもとであると訴え出たので、土御門院の承元元年二月上旬に、専修念仏の張本人、安樂住蓮等は召しとらえられて、忽ちに頸をはねられ、法然は遠流の重科に処せられた。のみならず、後堀河院の嘉祿三年には、京都六か処から、法然の選択集とその印版をさがし出して、叡山の大講堂の前に、叡山三千人の僧侶があつまつて、三世の仏恩を報じ奉つるなりと称して、これを焼きすててしまった。しかも、法然の墓まであばいて、その骨を京の鴨川にながしてしまつたではないか。これでは、念仏を唱えるならば、地獄におちることは、法然自身が証明しておることではないか、どうじゃ、念仏無間は日蓮

坊が發明したのではなくて、その先例があり、法然自身が実験証明ずみだ御老僧、承知されたか」

「……………」

「返答がないのは、耳が遠いとても申すのか、以上のことは、皇代記という書物にあり、専修念仏の行は諸宗衰微の基なりと、これを禁止するの宣示や御教書は数々あるぞ」

老僧は、なにか、言いたげに、口をぱくぱくさせたが、それは次の質問者が立つたので、老僧の発言の機会はなくなってしまった。

「さてまで日蓮法師、それ程まで禁止された、念仏が何故、斯くも今日隆盛であり、それに敵対して、念仏墮地獄を唱えた、汝自身が、流されたら再び帰えることなしと言う、この佐渡の島に流されておるではないか。法然上人は、遠流と言うても、讃岐に十一か月おつたまでじゃ、汝こそ、許されることなき、この島に流されておる、法華經こそ墮地獄と申してもさしつかえないではないか、どうだどうだ」

と、元氣な奴が、つつ立って、つめよせたので、どうだどうだのこの声に、塚原にあつまつた、三千人の人々が、口をそろえて「どうだどうだ」と合唱した。その勢いで、大杉の枝の雪が、あっち、こっちでどさつと落ちはじめたので、わいわいさわぎになって、「つめたいぞ」「さわぎはやめろ」「問答をつづげろ」などと叫ぶが、こっちやになって、一寸混乱のてい

であつた。

大聖人が口をひらかれたので、大庭は静かになつた。

「その悪口は只今は、そのまま頂戴いたしておこう」

「では参つたと申せ」

「うわつはあはあ」

大聖人が、六尺三寸のからだ体軀をゆるがして、笑われたので、こんどは一同が、唾然としてしまつた。

「……なにが、おかしい、馬鹿もの、汝は口さき三寸だけで、今日迄きた悪僧だ、笑いでごまかさず、参つたら参つたと申せ」

「貴公は、法門をもつて、この日蓮にせまつたのではないから、笑つたのだ。たんなる悪口を言うただけで、法門を申したのではない。悪口とか、石をなげる、瓦をなげる等の罵ばりざんぼう詈譏誹は鎌倉の街中で、常々頂戴しておるので、貴僧の悪口も、ついでに頂戴しておこうと言つた迄のことである。貴僧は眼を何処につけておる」

「御覽の通り、余り立派ではないが、鼻の両うえ眉毛の下にありますぞ」

「汝は小乗教を学ぶものか、仏者か、眼を何処につけておると言う時はその肉眼を言うのではない。涅槃経の第六に「大乘を学するものは肉眼ありといえども名づけ仏眼となす」とあるを知

らないのか。とぼけるではないぞ」

ぐいっと、聖人に睨られると、質問の僧侶は、へなへなど坐ってしまったのは面白いくらい不思議であつた。

「日蓮は今をさる十三年前の文応年中に、立正安国論一卷を草して、鎌倉殿に献じ、法然の選択集を、従来の破折論とは全く異なつた観点より論破した、而して念仏宗に日本国中が帰依するよ  
うなことがあるならば、必らずこの国が、他国のために攻められると言ふ、開闢かいびやく以来の大事が、出しゅつ  
来たすると予言したが、その後九か年をへて、大蒙古国の牒状が、文永五年にきたことは、この山野  
にあふれた人々の知る所であろう。この事実をわざと知らず、知つても、驚かぬものどもは、日本  
人ではない、立正安国論こそ、この日本に生れた日本人日蓮が、国を患うれうるが故に筆とつた日本  
人の魂の書と申してもさしつかえがない。日本の運命を仏眼をもつて眺めたる書論である。国の  
亡びることこそ、大事の中の大事と申すのである。今は配流の身の日蓮であるが、日蓮の眼は、  
末法万年を見通すことの出来る眼である、汝は、只今、何故、念仏が繁盛するかと問うたが、日  
蓮は、法然の念仏が流行するならば、国家を破ぶるものとして、立正安国論に予言したが、それ  
が事実となつて現われ、幕府は今や蒙古襲来におびえて、加持祈禱かじきとうに大騒ぎをしておるではない  
か、なぜ、念仏が国を破ぶるの法であるか、蒙古襲来をうれい、日本人として国を失うことをう  
れうるものがこの山野に僅かでもよい、おるとしたならば、この日蓮坊に先ずたずねるのが、日

本人ではないか、ここには、祖国を失うことをうれうる日本人はおらないのか、自分だけは西方の極楽浄土に生れればよい、後はどうなるうとかまうものかという鳥合の集なのか、日本人はおらないのか、日本人ならば、何故、念仏を唱えると国が亡びるのかと、問うのが当然ではないか、日本人は一人もおらないのか、国をうれうる日本人はおらないのか」

大聖人の絶叫のみきこえる。静まりかえった塚原の山野になった。

「俺は日本人だ。国が亡びたら大変だから俺はききたい。そして坊主ではない、俗人だから、日蓮法師にたずねても恥しくはないだろう。どうして念仏を唱えたら国が亡びるといふ馬鹿げたこととなるのか、ものの道理がわからない、教えてくれ」

自ら俗人と称して立ち上った。

「よくぞ問うた。念禅真律等々宗旨宗派はことなつても、蒙古襲来という、他国がこの日本国を攻めると言う時には、互いに武器をとつて、国を守るのが当然であるう。それでこそ日本人だと見えるのだ。だが異体同心でなければ、戦いは勝つものではない。異体異心ならば、戦いは負けるにきまつておる。法華経は日本人全部を異体同心にする教えであるうと言ふことを忘れてはならない。

では何故念仏を唱えれば地獄におちるか、この日本の国が亡びるかをのべてみよう。よくきくがよい」



「南無阿弥陀仏とは如何なることかを考えてみよう。南無と中す字は敬う心、随う心を言うのである。では阿弥陀仏とは如何なる仏であろうか、その源は釈迦如来の五十余年の説法の内、さき四十余年の阿弥陀経等の三部経にとかれた仏である。この阿弥陀仏は仏になる前は法蔵比丘と称して、十劫の間、修行して、ついに阿弥陀仏となったという。その国はこの我々のすむ娑婆世界より西方十万億仏国をすぎた、極楽世界というのである。

だが、しかし、どなたが、阿弥陀仏ということを言い出したのかを考えてみるがよい。釈尊が阿弥陀仏が西方におるといわれたからこそ、阿弥陀仏があるのだ。言うなれば仏様の口から出た仏にすぎない。しかも、そのすむ阿弥陀の極楽世界とは、この我々のすむ娑婆世界より、十万億仏国をすぎたと言う所であると言う。ようくきかれよ。では我々のすむ世界には我々をすくつて下さる仏様はすんでおらないのだろうか。そんな馬鹿げたことがあるものではない、我々の娑婆世界に、我々を救ってくれる仏がいらないと言うのなら、西方の弥陀の世界をあこがれる気持ちもわからぬではないが、そんなことはない。我々のすむこの娑婆には我々を救つて下さる仏様がちゃんと、すんでおるのである……」

一つの野次もとばさせない、大聖人の所論である。両眼は、慈愛にみちて、みる人をしてやわらぎを与え、その態度は峻厳しゅんげんで人をして、どうしても耳を傾けさせるようにしている。さすが二十一年間も街頭できたえた梵音ぼんのんじやう声である。

「法華經に「今この三界（註二）は皆これわが有なり、その中の衆生は悉く是れわが子なり」と教主釈尊は言われておる、してみれば、教主釈尊こそ、この娑婆世界の仏様ではないか。また「今この所は諸の患難多し、唯我一人のみ能くこれを救う」とも言われて、教主釈尊は、日本国の一切衆生の父母師匠主君である、この三徳あるが故に、釈尊を此土有縁深厚（註三）の仏と称するのである。一切經六万巻の中に、阿弥陀仏が、娑婆の人々の父母とも主人とも師匠とも説いた經文は一つもない。……しかもその阿弥陀仏は、法蔵比丘という時になにを修行し、いかなる經文をきいて成仏、すなわち阿弥陀仏となつたのか、それは法華經を聴聞し法華經を修行した故に仏となつたのである。その故に、弥陀の四十八願中の第十八の願に「たとい我れ仏を得るとも、ただ五逆と誹謗正法とを除く」と言われておる、弥陀の言うところの正法とは、自分が修行したところの法華經をさすのである。五逆の人を救わないと、はつきり言つておるが、浄土宗の人々は、この娑婆にすんでおりながら、自分の父たる教主釈尊をすてて、他人たる阿弥陀仏を信ずる故に、五逆罪をおかしておる、日蓮が念仏門徒は地獄におちるとの法門は、日蓮の言葉ではなくて阿弥陀自身が言われておる言葉ではないか、このところをよく考えてみるがよい。されば、念仏は仏の説ではなくて、人師の説であるから、このような矛盾が出来てくるのである。

支那の齊の時代に曇鸞法師どんらんと言う人があつて、竜樹菩薩りゅうじゆの十住毗婆沙論じゅうじゆびしやをみて、仏道修行におい

て難行道と易行道とをたてた。唐の時代に道綽どうしやくという人がおつて曇鸞法師が三論宗から、浄土宗にうつる書物を見て、自分も浄土宗に帰して、聖道、淨道の二門をたてた。その道綽の弟子に善導というのがおつて、雑行、正行の二門をたてて、念仏を正行とたてて支那において大いにこれを弘め、この流れをくんで、日本に念仏を盛んにしたのが法然房である。法然房の墮地獄の話は先きののべたので今は略するが、支那において念仏を大いに弘めた、善導和尚は如何なる死に方をしたかを話してみよう。「この身は諸苦に責められて、暫くも休息なし」と称して、自分の寺の前の柳の木に登つて、西に向つて「願くば仏の威神をもつて、観音、勢至きたつて、我をたすけ給え」と唱えおわつて、青柳の上より身をなげた。首にくくつた、繩がきれたか、柳の枝が折れたのか、大旱魃の堅土の上におちて、腰骨を折ちくじいて、七日七夜、おめきさけんで死にはてたと申すことである。「流れをくむものはその源を忘れず、法を行ずる者は、その師の跡をふむべし」という言葉がある。この塚原にあつまった、浄土念仏の人々は、師匠の跡をふんで、善導の如く自害をせねばならんぞ、頸をくくつて死ななければ師匠にそむくと言つてもよいのだ。どうだ、みんながみんな、善導の如く、頸をくくれ、しからずんば、師敵対（註四）と申してもよろしいのだ、これでも念仏は墮地獄の教えでないというのか、念仏無間は日蓮が言葉ではないと申したことがわからないのか、善導自身が、身をもって諸人に示し、これを日本に興行した法然自身も亦、念仏は墮地獄の教えなることを、これまた身をもって示しておるではないか、理窟

ならば白も黒と言いざる、口達者な者もここにおるであろう、だが、事實はどうする、歴史はどうする、歴史はもはや書きかえることが出来ぬのだ。教相判釈の上から言うならば、弥陀の三部経は、釈尊一代五時の説教の内第三方等部の内にあって、四卷三部の経は全く釈尊の本意ではない、故に法華経の序分たる、無量義経には、四十余年いまだ眞実をあらわさずと説いて、念仏は暫く、衆生誘引の方便であると称して、教主釈尊自身が念仏の法門を折ち破ぶっておるのだ。しかし、そんなむずかしい法門をとくよりも、善導和尚の臨終の事實を話した方がわかりがよい、さあさあみあげれば雪こそつもっておれ、恰好のよい形の枝ぶりではないか、本当に念仏を唱える気なら、あの枝に頸をくくつてぶらさがったがよいぞ、念仏者として頸をくくらずば師にそむく咎ありと申してさしつかえがない、さあさあ西に向つて、念仏者は、杉の枝に頸をくくれ、それでこそ弟子と申してさしつかえがない。どうした。……どうした……返事がないではないか」塚原の大庭には、大聖人の声のみが、びんびんとひびくのみで、三千人は口をとじて、大聖人をただみあげるのみであつた。

(註一) 専修の悪行 阿弥陀一仏のみをたのんで、他はすべて、すててしまへという教

(註二) 三界 この場合は我々凡夫のすむ娑婆(地球)を意味する。

(註三) 此土有縁深厚 この我々のすむ娑婆に最も縁が多く、娑婆世界を住所とする仏

(註四) 師敵対 師匠に齒向かうこと。

## 五

「日蓮坊、汝は酒をたしなむと言うが本当か、しかもなかなかの呑み手ときいたが、どうじや」

「日蓮に酒の話をするくらいなら、御手前そこに、一升樽でも御持参か、この問答の最中、酒があるのなら、遠慮はいたさない、早速にでも、いただきたいが、これが御返答である」

この答は、塚原の山野にあつまつた人々をして、啞然とせしめた。質問者は、次のようにどなりつけた。

「日蓮坊、汝は五戒をたもたざることを僧としてどう思っておる。五戒の第五は不飲酒戒であることぐらいは十分、承知のことであろう」

「如何にも、十分承知のことである」

「知っておつて、五戒を破ぶり、てんとして恥じることなきは、仏をおそれぬ坊主として悪口されても仕方があるまい」

「汝はいずれの宗旨の僧侶か知らぬが、よほどのたわけものと、この日蓮はみた。禪寺の入口には、碑石を立て、おこがましくも戒壇石と称して「不許葷酒入山門」と書かれておるが、酒は智くんしゅきんもんにいるをゆるる手

水と称して、堂々と山門に入るを、まさか知らぬとは申すまい。……

日蓮はたしかに、酒をたしなむ、だが、吞まずと他に偽って酒をのむ人、のむ故にのむと称して、酒を吞む、いずれがよいのか、貴僧は、前者をとるものであるうが、日本一の正直な日蓮は、酒を吞むが故に吞むと称するのだ」

「……しかし、いくら理屈をつけてみても、五戒を破ぶつた破戒僧には、間違いがないではないか、如何だ、日蓮……」

大聖人は、大人気ない悪口を軽るくうけて、意に解しなかった。

「では、日蓮が、何故酒をたしなむか、その由来をきかせようか……、その昔、伝教大師は叡山三千人の学生に戒めて、叡山は、山深かくして、霧多きが故に、保健のために飲酒を許るされたと伝へる、但し大智度論十三に穀酒、果酒、菓草酒をあげていて、伝教大師の許されたのは、薬酒を用うべしと言うことであつたに違いない、但し日蓮が、酒をたしなむのは、上の如き理由によるのでもなく、先例をあげて、我身を助けるが如き言説をなすものではないことを、よく、きくがよい」

塚原山野の人々は、大聖人の御言葉いかんによつては、今後、おうつぴらで、酒がのめそうな議論が、出てきそうなので、それこそ、今にでも一杯よばれるかの如き、嬉れしそうな顔色で、話をきこうとの人々の態度は、中々よきものがあつた。

「仏教を習おんとするものは、先ず時を知るべしとは、日蓮の言葉であるが、今の世は經文にとかれた、末法という時代であることを忘れてはならない、末法とは無法ということだ、勿体ないが、釈尊の法がなくなってしまうたと言ふことを末法というのだ」

反対の質問をしようとする、喧騒が諸々方々に起りかけたが、大聖人の梵音声が、それを十分に押さえてしまったのは、次の言葉が出たからである。

「その証拠には、今、釈迦牟尼如来を拜んでおる宗派が何処にあるか、この塚原の山野を埋めつくした、三百余の僧侶が、常にこの娑婆世界に住して、我等が父なり母なりと言われた、釈尊を全くないがしろにしておるのではないか、天台宗はもと、天台大師の三大部を（註一）根本宗典として立った宗旨ではあるが、その弟子の慈覚大師が、法華經より、真言すぐれたりと断定したによつて、今は、叡山は真言宗とみなしてさしつかえがない、その真言宗は何にを拜んでおるか、大日如来を拜んでおるではないか、その住所は、淨居大自在天であつて、この娑婆世界とは縁もゆかりもない仏である。念仏宗は阿弥陀仏を一向に拜し、禪宗は、教外別伝不立文字と立つて仏像をたいて尻をあぶつた奴が大禪師と称讃さる、天魔の所行である。どこにも、釈尊をあがめる宗旨宗派は一つもないではないか、故にこれを称して釈尊の法が滅したが故に今は末法の時代、無法の時代と称するのである。末法は如何なる戒を修する時代であるか、釈尊の法がなくなつたら、如何なる仏法が、修せられるかを御存知あるまい、御存知なければこそ、この日蓮は

建長五年四月二十八日以来、今日まで二十年間叫びつづけてきたのである」

「早く、酒をのんでもよい話にしてくれ、今夜からでも、おうっぴらで、日蓮流で呑もうと思つてゐるのだ。酒の話をたのむぞ」

昨夜の寒さしのぎのため、のんだとみえる、からの一升樽を右手にもつて、左右にふりながらの質問者である。

思わず、笑い声が諸処方々に起つた。

「三世を知るを仏と申す、釈尊は未来を考えられて、我が滅後正法一千年、像法一千年、末法一万年とさだめられ我が滅度の後の次の日より正法五百年の間は一向小乗教を弘通すべし、後の五百年は権大乘、像法一千年の内には仏法漸く漢土日本に渡りきたる、と申された。故に富楼那尊者が、維摩ゆいまに向つて二百五十戒を説いたところ、維摩は穢食を宝器に置くことなかれとこれを難詰し、オウクツマラ（人名）は文殊に小乗戒を批評して、「嗚呼あゝ、蚊蚋もんせいのゆくえと、大乘空の理を知らず」と叫んだ、今末法に入つては、法華経の大乘教のみ流布の時代である。五戒をたもつた二百五十戒をたもつのと誇称する奴輩は、市に虎を放なすが如しと言ふ言葉すらある。酒はのんでもよろしい、但し酒にのまれてはならん、これ日蓮が弟子達に常に言いきかず言葉である。ど



うじゃ、からの酒樽なぞいくらふつても中味がなければ、つまらんぞ」

どつと笑い声が、緊張した、問答の庭に上った。

「さて、酒をのんでもよい理屈は、わかっただろうが、これは日蓮が、大乘の戒を持つが故に酒をのんでもよいのだ、嬉れしように笑いながら、日蓮が顔をながめていても、この塚原の山野にあつまった律宗は勿論のことだが、念仏宗、禅宗、真言宗の人々は、酒は一滴たりとも口にする資格がないのだ」

「なんだと、自分はのんでも、他人はのんではならぬとは驚ろいた。ぬすつと酒の猩々坊主、何故だ、話してみる」

口々に意外と思う心をこめて、連呼した。

「さればさあ、念禅真言等々の僧侶は大乘の教を修行する僧侶ではないからだ」

「なんだと、真言宗が、大乘の教でないとはいかかる経文にある」

「禅宗を。日蓮、汝は小乗教とみなすのか」

「馬鹿々々しい、南無阿弥陀仏こそ、末法に於ける唯一の大乘の教ではないか」

各宗それぞれに口を極めて、名乗りをあげたのは無理もなかった。

大聖人は、につこり笑って、その人々をみると、次の如く言い放った。

「如何にも、念禅真言、律宗は言う迄もなくこれを習う人々は、この日蓮は小乗教と断定する

ぞ」

「何故だ」

「何故だ」

「どうしてだ」

「そんな馬鹿なことがあるか」

塚原の山野にこだまする声は、先き程の笑い顔どころか、殺気を感じる、問答の庭となりはてた。後年、この塚原の問答に、安土問答と東海寺問答（東京品川区にある）とを以って、天下三問答と称するのも、むべなるかなと言いたい程の、緊迫した空気が流れ始めていた。

大聖人は、群盲なものぞとばかり、雄然として口を開かれた。

「騒ぎたてる諸僧達は、僧侶になる時には必ず受戒をして僧侶になつたろう。もし、受戒せずして僧侶になつたと言うものは、この公式の問答の場においては、日蓮と口をきけるものではない。税金のがれ、労役のがれ、借銭のがれに近頃は頭を丸めて、僧侶になりすましておるものがあるが、これは、僧侶の数には入らないことは諸僧もみとめられるところであろう、世も末になれば妻子を帯せる僧もおれば、魚島をくらう僧侶もおる、そんなちいさなことは日蓮は問うのではない。貴僧達は必ず戒を受けて僧侶になつておる。特に真言宗、念仏宗の人々にきこうではないか。何処で一体受戒をなされて僧侶となつたのか、何処の戒壇で戒を受けて僧侶の資格をとら

れたか、さあさあ、すみやかに御返答あれ」

真言宗の真観と名乗った、僧侶や、明らかに良観の弟子達で、この問答を企てた背後の有力な僧侶達と思われる方面に、大聖人が、眼をむけられたが、敢て一問の返答もなかった。

「御返答がないので、失礼ながら、日蓮坊が自問自答致そう、先ず大半の僧侶達は、奈良東大寺の戒壇に登られて戒をうけたことであろう。その外ならば筑前太宰府の観音寺か、下野の薬師寺の戒壇において、受戒されたに違いない。さすれば、東大寺、観音寺、薬師寺の三ヶ寺の授戒は、小乗戒の授戒であつて、大乘戒の授戒の戒壇ではない。念仏宗と申し、真言宗と申すは、大乘の教たることは、日蓮も一応みとめ申そうが、その大乘を氣どる処の僧侶達が、何故に、小乗の戒を受けて、僧侶となられたのか、そこ迄は氣がつかかなかつたと申したいのか、だから、日蓮の眼からみれば、貴僧達は小乗戒の授戒をうけたのだから、口でよむ経は大乘だと申しても、戒は小乗戒を授戒させられたのだから、日蓮が如く、酒をのんではならぬのだ。不飲酒戒をたもつて、酒をみても、仏は仏でも、喉仏をならすだけでがまんせねばならぬのだ、日蓮だけが酒をのめる理屈がわかつたか」

塚原三百人の僧達は、ただくやしくて、何にも言えぬのが残念だと、かすかなためいきが、そこそこきこえるのであつた。

「人皇二十九代欽明天皇の朝に仏教が、我が日本の国に渡来してより、孝謙天皇四十六代に至る、二百年間というものは、我が国では授戒する作法を正式に行なうことが出来なかつたのである。その理由は小乗教の授戒法が非常に厳重な規則があつたからだ。小乗教の授戒法は三師七証（註二）、がそろわなければならなかつたからである。故に、孝謙天皇の御代に鑑真和尚（註三）が、我が朝に来朝して、勅命をもつて、東大寺の仏前に戒壇をつくり、聖武天皇、光明天皇、皇太子登壇して菩薩戒をうけ、その他五百人の道俗が登壇して比丘戒（註四）、ウバソク戒（註五）を受け、天平宝字五年正月に、東大寺の戒壇を、下野の薬師寺（現在なし）と、筑紫の観世音寺とに分置し、東国の者は薬師寺に登り、西国の者は観世音寺の戒壇に登つて受戒することに定められ、宗学については小乗大乘の区別はあつても、全国の僧侶は、皆な東大寺の戒弟であつた。それは、薬師寺と観世音寺の戒壇は、東大寺の戒壇の分置、即ち出張所だからである。さて、以上が、伝教大師が叡山に法華経迹門の戒壇を建立する迄の、日本の僧侶の授戒の様式であつた。然るに、伝教大師は、大乘の仏教を修学するものが、東大寺の小乗戒を受けることの矛盾を考えられて、ついに弘仁九年の十二月に、

「我が天台の祖師である南岳大師、天台大師は、昔生に印度の靈鷲山において、大聖釈尊より親しく法華経の説法をきき、菩薩の三聚浄戒をうけられた。而して菩薩の三聚浄戒は師資次第に相伝

して我れ最澄に及んでいる。我れ常に一切の聖教を閲するに、小乗の声聞僧及び声聞戒の外に、大乘の菩薩僧と菩薩戒とあり、又専ら大乘教によりて少しも心を小乗に向けざる一向大乘の人と、専ら小乗教にのみ依りて毫も心を大乘の方にむけざる一向小乗の人とがある。今我が宗の学生は、大乘の戒定慧によつて修行せしめ、ながく小乗下劣の修行を離れしめん」（註六）と断言せられて、自ら三宝の御前に誓つて、かつて延丁四年東大寺の戒壇に登つて受けられた、四分律の二百五十戒を断呼すてられて、叡山三千人の僧侶にさととして「今より以後声聞の利益を受けず、永く小乗の威儀にそむくべし」と言われたのである。この伝教大師の志を可とせられて嵯峨天皇は伝教大師入滅の日より七日後、即ち弘仁十三年六月十一日、治部省の官符をもつて叡山に、大乘戒壇が建立されたのである。これ釈尊滅後、一千八百余年が間、印度、支那、否一閻浮提第一（註七）にいまだかつてなかつた所の靈山の大戒が、日本国に始めて創立せられたのである。伝教大師の功を論ずれば竜樹天親にもこえ、天台妙楽にすぐれておわす聖人であると申さればならない。この戒壇建立については、延歴二十一年正月十九日、天皇自ら、京の高雄寺に行幸せられ、その御前に於いて、伝教大師と南都七大寺の碩学勤操、長耀等十四人等と、法門によつて勝敗を決したることによつて、建立せられたことを忘れてはならない。だが然し、只今は仏法における如何なる時代であるかを知らねばならない。本年は伝教大師滅後三百五十年、すでに時代は、仏説の如く末法である。末法においては、法華經のみ流布するの時であることは仏も法華經にとかれ

ておるが、天台大師は遠く妙道にうるおわんと言われ、伝教大師は末法はなはだ近きにありと言われて、法華經一經のみの流布の時代を恋いされたのである。今末法に入つて正に仏滅後二千二百余年であり、法華一經のみ流布の時である。さてさて各々、長い長い談議で、おつかれだったろうが、日蓮が酒をたしなむから始まったこの話だ。そして、貴僧達が、何故、酒樽をみても、表むきは喉仏が念仏の鐘を叩たくようにのみたくとも、呑めぬ道理は、末法流布の法華經にそむくが故に酒をのめぬのじや。たとえば十重禁戒の第五をあげようか、不飲酒戒とは、爾前の諸經の意は、仏は不飲酒をたもつと説けり、然かれども、法華經の心は爾前の仏は飲酒第一なり、ゆえはいかん、爾前の仏は一住世間の不飲酒戒をたもつにいたりと雖も、未だ出世の不飲酒戒をたもたず、二乗閻提等の九界の衆生をして無明の酒をのませて成仏せしめず、能化の仏いまだ飲酒罪をまぬがれず、いわんや所化の弟子をや。然るに法華經は悉く成仏せしむ。今身より仏身に至るまで爾前の飲酒罪をすてて法華經寿命品の久遠の不飲酒戒をたもつや否やとやるんだ、どうだわかったか。法華經の功德の偉大さを、しかも、堂々と仏前において、酒がのみたければよくきけ、そもそも法華經の戒とは、小乗の五戒は勿論のこと、二百五十戒、並びに梵網經の十重禁、四十八輕戒、華嚴經の十無忌戒、瓔珞經の十戒等をすててしまつて、法華本門文底寿命量の下種たる南無妙法蓮華經と唱えるのが、ただ今、末法における、只一つの戒なのだ。法華經に是名持戒と説いておるのは、このことをさすのだ。貴僧達こそ、爾前諸經の無明の酒に酔つたる人々と称

するのだ、それでも酒をのまず、五戒をたもつと称するなれば、すでに、妄語罪を犯した人々ではないか、如何だ、この道理がわからぬと申すか」

(註一) 法華玄義、法華文句、摩訶止観

(註二) 正しく二百五十戒を受けた人が三人師匠となり七名証人となるのである。

(註三) 唐の揚州の人、戒律を持ち、我が国に正式の三師七証がそろわぬことをきき、日本の

入唐僧栄叡普照の請により、日本来朝を企ててから、前後十二年間かかって来朝した。

日本にきた時には、すでに盲目になっていたのは有名な話

(註四) 具足戒、二百五十戒を言う。

(註五) 五戒、即ち、不殺不盜不邪淫不妄語不飲酒を言う。

(註六) 伝教大師の一心戒文上の文

(註七) 世界第一のこと。

## 六

塚原三百人の僧侶は、無明の酒に酔いしれた、しかも、自ら大乘の教を修行するとも、小乗戒

を授戒して、僧侶となったが故に、すべてこれ、小乗教の徒にして、大乘法華經を行ずる大聖人とは、言わば、問答をする資格はないぞときめつけられて、もはや、一言も発する僧はいなかった。

この時、さつと音がして、大聖人の法衣の袖に矢がつきささった。場内は、わあつと騒然となり、一瞬の後無気味な静けさが湧いた。誰しも二の矢を期待していた。だが大聖人は、静かに、

「南無妙法蓮華經

々々々々々々々々

と唱え始めた。

不思議、不思議、その大聖人の御題目につづいて、

「南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經」

と唱和する声が、この塚原の山野の此処彼処に起つてきたのである。

阿仏房夫妻の唱題もあつたろうが、どうも、それだけではない。念仏の人々の口からも唱えられた、題目の声もまじっているようである。そうでなければ、このような唱題の力強さがある筈がない。



この時である。

地頭本間六郎左衛門の大声叱咤があった。

「本日、塚原の問答は、これにて終りとする。但し、異議あるものは、問答をつづけてさしつかえないぞ……」

二の矢は大聖人をめがけて、ついに飛んではこなかった。

「ないとみえるな、質問者はおらん、では、この問答、これで終る」

六郎左衛門が合図をすると、家来の者どもが、六尺棒をもって、ばらばらと大聖人の前にすすみ出ると、

「問答は終つたぞ、さあさあ即刻に退散退散々々」

「退散せぬものは、害心のあるものとみて、ひつからめて、みせるぞ」

「ちれちれちれ」

六郎左衛門の家来が、どなりちらして、六尺棒をふりまわして歩くので、さすがに、あれ程いた人数もみるみる退散してしまつた。

今迄ここで、問答があつたのかと疑う程の、不思議のようなしづけさが残るのみであつた。

六郎左衛門の五、六人の家来が、念仏宗の数珠を六尺棒にいくつもいくつもひっかけて、戦利品のようにもつてきた。

「大聖人さま……」

本間家の家来の一人が大聖人に声をかけた。

「念仏の数珠が、こんなに落ちておりました。まあまあ戦争で言えば、敵の首をとったようなもので、ございましょう」

「本日の問答、誠に御見事でございました。私も只今より、南無阿弥陀仏は申しますまい。はい、私の数珠も、これこの通りでございませう」

と言うと、腰袋から数珠をとり出して、

「おうい、その戦利品を火葬にしようではないか、皆のものごとにもってこい」

「そうだそうだ」

と五、六人の家来が、捨ててあつた数珠をあつめると、杉の枯葉をさがしてきて、やがてそれに火を放った。くすぶっていたが、やがて、それは燃えだしたが、手脂のしみこんだ念珠とみえて、人を焼くような、いやな匂いであつた。

「これは妙だ。本当に討死したものを焼くような匂いがする。死人しびとの匂いだ。くさい」

「ナンマンダ、ナンマンダ」

「馬鹿野郎」

とナンマンダを、唱えた家来が、横面をなぐられた。

「なんで、なぐる」

「ナンマンダを言うくらいなら、その数珠に、火をつけるな……」

「そうそう今日からは、唱え事が変わったんだ」

「そうだろう」

「ナンミヨウホウレンジキヨウタタ」

「そうだ。俺も南無妙法蓮華経だ」

家来たちも、唱題しながらの後始末であった。

佐渡の代官、本間六郎左衛門は、家来が、一勢に、南無妙法蓮華経と唱えるのを、にがにがしい顔でききながら、問答のあった塚原の大庭を従者一人つれて、黙然として去りゆこうとした時である。

「本間六郎左衛門尉殿、暫らく暫らく」

大聖人が、大きな声で呼びとめられたのである。

不動金縛の術にでもかかったかの如く、六郎左衛門の体軀はからだびつたりととまった。

「日蓮、不思議を一つ申してみようか」

大聖人の御言葉であった。

「不思議を申すとは……」

「されば、御貴殿はいつ頃鎌倉にのぼられますか……」

「なんで、そのようなことを、尋ねるのですか……」

「されば、本間六郎左衛門尉殿を、まことの武士と思つたはずねたのです」

「まことの武士と言われたなあ」

「さよう」

「無礼なり日蓮法師、いやしくも、武蔵守宣時殿の信任をえて、この佐渡一国の代官職を御奉公する、本間六郎左衛門、まことの武士でなくて、どうして務まるか、言葉の強いのは、日蓮法師のくせとは言え、その口が災を自から招いておるとは、名僧でも、お気づきにならんとは、残念至極……」

「いや、これは御立腹を項戴して、恐縮至極でございます。だから、六郎左衛門殿を、まことの武士と思つて、不思議を一つ申しきかせようと、思うのです。本日の問答の御世話かたじけなく思つてのことです」

「御心底わかりました。鎌倉に上るのは、百姓どもに、農をさせまして、七月頃に致そうかと思つております」

「六郎左衛門殿、失礼でございますが、その腰に帯びておるものは、なんでございますか……」

「言わずとした武士の魂こゝろでござる」

六郎左衛門は、また、大聖人から強言をきかされると思い、思わず力をいれて言いきった。

「弓箭ゆみやとるものは、いざ鎌倉という時に、ものの役にたつてこそ、日頃の所領を賜わつておるはずで、百姓に農をさせるために、大小を帯してはおらないことは御承知と思つ」

「そのような用心は六郎左衛門、常に致しておる、日蓮法師おだまり下さい」

「だまりません。いざ鎌倉となつてから鎌倉に上つてなんの役にたちますか、六日の菖蒲あやめ十日の菊ではありませんか。合戦の起らぬうちに鎌倉に登つて、高名を立てて所領をたまわる気はござらんか。本間六郎左衛門と言えば、相模の国では、中々由緒ある武士ではありませんか。合戦におくれたらば、末代迄の恥辱これにすぎるものではありませんぞ」

「では、合戦が、日蓮法師、鎌倉にでも、起きると申されますか……」

「さよう」

「そんな馬鹿なことが」

「起りますぞ、必らず起ります。だから、不思議を一つ申してみましよう、と言つてお引きとどめしたのです。合点がなりませんか」

「合点がなりません」

「日蓮は日本の人の魂であり、日本の柱であります。この日蓮を、斬首せんとし、果たさずして、この佐渡の島に配流させた。故に、この罪によつて、北条一門に同志討ちが必ず起きると申し、次ぎには他国よりこの国を攻めるの難が必ずきたると、立正安国論に書きとどめたのです。同志討ちすることを自界叛逆じかいほんぎやくの難と言ひ、他国から、この日本国をせめることを、他国侵逼たこくしんびつの難と言うのです。その自界叛逆の難が、日蓮流罪後百日後に起こると、日蓮は鎌倉で予言しましたが、その自界叛逆の難が、近く起こる。それ故鎌倉に急ぎ急ぎ上りたまえと、六郎左衛門尉、私はすすめておるのだ」

「わかりません、わかりません。日蓮法師、私も佐渡一国の代官、流罪の僧の言葉に動かされて、鎌倉に上ることは、出来かねます。御免つ」

六郎左衛門尉は、くるりと背を大聖人にむけると自分の屋敷に向つて、歩をすすめた。

念仏の教珠を焼いた先程の煙が、火勢がおとろえて、今は一本の筋のようになって、まっすぐに大聖人の前に立ちのぼっていた。大聖人も寂然として、塚原の三味堂にむかつて脚をむけるのだった。

文永九年二月十五日、京の南六波羅探題、北条時輔は、弟の北条時宗の密命により、北の六波羅探題北条義宗によつて殺された。時輔は時宗より三つ年長で、時に二十五歳であった。（註一）時輔は北条時頼の長男で、時宗の兄であったから、執権職は我こそと思つておつたのに、弟

の時宗に家督をとられ、年来悶々たるものがあつたので、逆心を企て内々その用意ありと、時宗に告げたものがあつたので義宗を上落せしめてこれを殺したのである。鎌倉では時輔の叛逆に相呼応して時宗を殺そうとねらっていたものがあつた。それは北条一門の、北条公時きんときと北条教時のりときであつたが、これは露見することが、時輔よりも早く、公時と教時が一つ屋敷で密談中、時宗の討手が、すきまもなく打ちこんで、一人ものこさず討ち取られてしまった。時に文永九年の二月十一日であつた。自界叛逆の難は大聖人の予一呂通り、京都に鎌倉に起つたのである。

この自界叛逆の報らせは、二月の十八日に佐渡の島について。

本間六郎左衛門はあわてた。直ちに塚原の三味堂にかけつけて、大聖人のお顔をみると、

「南無妙法蓮華経」

「南無妙法蓮華経」

「南無妙法蓮華経」

と唱えつつ、ただ、涙をうかべて、暫くは言葉もなかつた。

「もったいなや、大聖人さま、正月十六日の最後の御言葉を、疑うより、嘲つておりましたが、三十日も、たたずの中いたしました。これでは、蒙古国の攻めきたることも本当でございませう。また、念仏を唱えれば、随地獄ということも、本当でございませう。六郎左衛門、今日只今より念仏を申しませぬ。何卒、お助け下さいませ」

「おわかりになりましたか」

大聖人のやさしい声とその微笑、六郎左衛門は、心の中で、噫々もつたいない。このお方は仏様だときつと感じとつた。

「大聖人さま、ここは、三昧堂とは、うそでございまして牛や馬の死んだのや、罪人をすてて殺すところでございます。六郎左衛門の罪をお赦るし下さいませ」

合掌してわびる六郎左衛門に、大聖人は声をかけられた。

「六郎左衛門殿、それよりも、早く早く、鎌倉に急ぎなされ、それが、武士の習いではないのか」

「はい、さよういたします。でも、半か年以上にもわたる私の無礼な所業を何卒お赦るし下さいませ。そのお赦るしの声を、きかなければ、なんとしても、この島から出てゆけませぬ」

「許すも、許さぬもあるものか、この三昧堂は、私にとつては、日本第一富める者がすんでおつた、金殿玉楼の地と申してさしつかえがない。それより、一刻も早く、鎌倉に上られて、相州武士の誉をきつつけてはなりませんぞ」

「有り難うございます。では大聖人さま……」

本間六郎左衛門は、家臣に、三昧堂から、他の適當の地に、大聖人をお移しすることを、命ずると、その夜、一門をひきつれて、早船で鎌倉にむかったのである。



(註一)

六波羅は、京都賀茂川の東辺、北は五条通り、南は六条にあつた。



## 開 目 抄

佐渡国誌によると、

「日蓮ノ佐渡ニアル三年間、他宗僧徒ノ迫害アルニ拘ハラズ、ソノ学徳ノ高キニ服シ、改宗帰依シタルモノ、多キノミナラズ、所在ノ地頭等ノ保護モ益々厚カリシハ、日蓮サツテ後、数年ソノ宗、寺院ノ開基セラルモノアルニ至レリ

案スルニ是ヨリ以後ノ宗教界ニ一沿革ヲ生シタルカ如シ、日蓮ノ在島中主トシテ之レニ反抗シタルモノハ、浄土宗ノ僧侶ニシテ、日蓮ノ遺文ニヨレバ印性房慈道房ノ如キハ常に他宗ニ先ダチテ、最モ勢カアリ（或ハ鎌倉極樂寺ノ良観房ノ使喚シタルモノアルヘキモ）タルヲ見レハ、当時該宗ノ広ク弘布シテ寺院モ相当備ハリタルヘキニ日蓮宗ノ漸ク盛ナルニ及テハ、ソノ宗漸ク衰ヘソノ盛衰ノ状ハ恰モ反比例ナシタルカ如ク思ハル、真言曹洞二宗ノ如キハ今猶ホ幾多ノ大寺アリテ往昔ノ盛況ヲ想ハシムルモノアルモ、浄土宗ニ至リテハ、寺数甚ダ少クシテ悉ク貧地ナルノミナラズ、ソノ開基モ天正以前ニ於テセルモノハ極ノテ少ク、大抵ハ皆江戸幕府ノ初メテ建立シタ

ルモノニテ、一時同宗ノ非常ニ衰微シタル事アルヲ推知セラルルナリ、之レニ反シテ日蓮宗ハ一ノ谷ナル妙照寺、竹田ナル妙宣寺ノ如キ八日蓮ノ在世ニスデニ、ソノ基ヲ開キテ忽チニ大寺トナリ、後チニタテタル根本寺ト共ニ、今尚ホ、ソノ寺格ヲ保チテ北陸ノ名刹タリ」とある。塚原問答の影響が、第三者の手でかかれておるので引用してみた。

最近の研究である、「浄土思想」民族学、池上広正氏は（昭三九・二・六）の毎日新聞紙上で「徳川家康一族が浄土宗であつたので、秀吉に味方した大名たちの多くが、家康に帰順後は、にわかには、浄土宗に改宗したことは、宗教と政治との結合という点で興味ぶかい。（天正以後佐渡に念仏の寺の出来た理由がわかる）去年の春、私は若い六人の宗教学者と一緒に最近の仏教主要宗派の総寺院数とこれに対する各宗派別寺院数の比率を調べ、またその、全国分布の状態を調べたことがあつた。その結果、総寺院数六九四三寺のうち日蓮系一割弱、真言、天台二割強、禪系三割弱、浄土系四割となり、浄土系の比率が最もたかく、またその分布地域は、北海道、上越、北陸、中部、近畿、紀伊中国、九州中央部にまで及んでいて、この分布地域は、他の諸宗派に比べると、かなり広いことがわかつた」

とある。東京タワーで今は有名になつておる芝増上寺も、昔は日蓮宗であつたのだが、徳川家康が江戸入りの途中、あそこまできて、休息した時、茶をのみながら、この寺の宗旨はときかれ、日蓮宗でございますと答えたら、それはいかん、以後浄土宗になれと言われて、住職は追い

だされて今のように浄土宗になったということである。「神君の御一言」で返答などは無用であったのだ。

さて、以上の引用によつて、浄土宗が何故勢力を得たかの理由もはっきりした訳である。大聖人の末弟と称する徒輩なら、四箇の格言の第一番たる念仏無間を絶叫しなければならぬのが全日仏や日仏連等をみると、中々そうではない。大聖人の精神を忘れてゐる日蓮門下が多いのではないかと思ふ。

大聖人さまの仏法は、末法万年の教えであるから、念仏宗が今以つて一番勢力があると言うことは、いよいよ、折伏の精神に徹して、我等は広宣流布にいきがいを感じるものだと思ふ。

さて、大聖人さまは、

「十一月一日（文永八年）に六郎左衛門が家のうしろ、塚原と申す山野の中に、洛陽の蓮台野のように死人を捨つる所に、一間四面なる堂の仏もなし、上は板間あはず、四壁はあばらに雪ふりつもりて消ゆることなし、かかる所にしきかは打ちしき蕪うちきて、夜をあかし日をくらす、夜は雪雹雷電ひまなし、昼は日の光もささせ給はず心細かるべきすまいなり」（註一）（全集九一六ページ）

さて、開目抄の下に、

「日蓮と言ひし者は去年九月十二日、子丑の時に頸はねられぬ。これは魂魄佐土の国にいたり

て、返る年の二月雪中にしるして有縁の弟子に贈くれば、おそろしくておそろしからず、みんないかにおぢぬらん」（註二）（全集二三三ページ）

との御文章があるが、雪中において世界人類の盲目を開くの書がかれたことは大いに意義があるのである。私の「富士の巻の一」は、戦後早々で机が買えなくて、古塔婆でこしらえた机で書いたのだが、それとこれとは似るべくもないが、立派な文章は逆境においてこそなると実に有難いと拝するものである。

さて、塚原の山野では到底普通人では生きていける筈がないのであるが、その御心中においては「あらうれしや」と法華経体験を心から喜び「仏滅後、二千二百余年が間、恐らくは天台智者大師も一切世間多怨難信の経文をば行じ給はず、さくさくけんひんすい数数見擯出（度々自分のすむ所を追われること）の明文は但日蓮一人なり」（註三）

と覚悟されての毎日の御生活であった。

「我が身法華経の行者に非ざるか、この疑いはこの書の肝心、一期の大事なれば、処々にこれを書く上、疑を強くして答をかまうべし」（註四）（全集二〇三ページ）とあって、することなすことが、毎日法華経の六万九千三百八十四字を身に読むところの御生活であった。

塚原問答は先述の如く一月十六日であったが、文永八年の十一月より普通人ではたえられない環境にあって、この開目抄の構想をねられて二月頃迄に制作せられ、四条金吾殿の使いがこられ

たので、これに托して、日蓮門下に示されたのが、開目抄である。

日道上人の御伝士代によると（大聖人さまの伝記では最古のもの祖滅六十年頃）「日興上人は文永四年九月十二日大聖人の御勘氣の時、佐渡の島へ御供あり、御年二十六歳なり」とあるが、大聖人さまが流人の故に、塚原に一緒におすることは禁じられたと思う。現在の世尊寺という寺が、日興上人の開基になっておる所から察すると、そのあたりにすまわれて、遠くから大聖人さまに御奉公申し上げたのであらう。

当時は流罪人は最初の一か年の生活費は官給であつて、それがすぎると、自営自活せねばならないことになつていたと言う。大聖人さまは塚原問答後自界叛逆の難が、的中して、地頭の本間六郎左衛門の捨邪帰正によつて、四月には一の谷に移られている。日興上人の御奉公が公然となつたのはこの四月以後と考えてよからう。それまでは、日興上人は御奉公の心をもちながら、御奉公できぬ悲しさを十分に味つたことと考える。

日興上人は、この開目抄の上に、自ら、法華本門開目抄と題された。

「総シテコノ書等ニ法華本門ト題スルコトハ日興上人ノ御尊意ナリ、余カ門徒ハ但開目抄等トアルベシ、サレバ、法華本門ト云フガ肝心ナリ、コノ本門トハ諸門流ニ沙汰スル処ノ本門ニアラズ（略）寿命品ノ文ノ上ト文ノ底トニテ沙汰スル処ナリ、寿命品ノ文ノ上トハ在世（釈尊）ノ寿命品ノ事、文ノ底トハ滅後末法ノ寿命品ノ事ナリ」（註五）

「題二法華本門開目ト云フハ是レ興師ノ深義ナリ、法華ノ二字ハ部ヲ挙グルナリ、本門ノ二字ハ要ヲトルナリ、開目ノ二字ハ、事ノ本尊ニ向ツテ、信ノ慧眼ヲ開キ迹ヲ開シテ本ヲ顯ハシ、脱ヲ去ツテ種ヲトル、ソノ証文ヲ引カハ文ニ曰ク「涌出寿量ノ二品ニハツクベキ」ソノ二ニ曰ク「寿量品ヲ知ラザル諸宗ノ学者ハ禽獸ニ同ジ」ソノ三ニ曰ク「寿量品ナクンバ天ニ日月ナク人ニ魂魄ナカラン」ト、是レ等ハ皆ナコレ法華本門ト題ス可キ証ナリ」（註六）

以上の註によれば、我々の信解の上から言うならば、単に開目抄と呼ばずして、法華本門開目抄と拝するのが、富士の法義の深義をのべる由縁となると思ふものである。

富士一跡門徒存知事（日興上人法筆）には、

「一、開目抄一卷、今開いて上下となす、佐土国の御作、四条金吾頼基に賜う、日興所持の本は

第二転なり、未だ正本を以て之を校かんがへず」（全集一六〇四ページ）

とあつて法華本門の四字は欠けておるが、日要師が（祖滅二百年頃）みた開目抄には、この四字があつたのであろう。

「涅槃經に一切衆生ノ諸ノ苦ヲ受クルハ皆是レ如来ノ苦ト云々、今ハ曰ク一切衆生ノ諸ノ苦ヲ受クルハ皆コレ日蓮一人ノ苦ナリ」

この自覚に立たれて覚他（他人をさとらしめること）せしめんがための開目抄である。因みに仏とは大和言葉であつて、煩惱がほとけるとか、仏教が渡来した後に熱病が流行したから、ほと



りけが、ほとけになつた等々出典が四つ五つあるが、仏とは本来は自覚々他、自分も悟り、そしてその悟りを人に教えて他を、覺らしめるの意を仏と言うのである。

故に大聖人さま開目抄の著述の境地は、如上の自覚々他即ち仏たるの境地から、著述せられたことは動かすことの出来ぬところである。ては、その開目とは如何なる開目か。「日本国ニ此レヲ知ル者ハ但日蓮一人ナリ」と言われておるが、今、日要師に従へば、

「高祖聖人自解仏乗ノ事、清澄山ノ明星ノ池ニテ本化ノ菩薩ナレバ此レニテ自解仏乗シ給ヘリ、口伝ニ有リ」

一 二ハ經文ニアタツテノ自解仏乗、弘長ノ夏ノ頃、伊豆ニ流サレ給ヒテトガモヲボヘヌニ流罪ハ不審ナリ、知法思国ノ故ニコソ安国論ヲ作ツテ奏スルニ不思議々々ナル哉トヲボシメシガ、ゲニゲニ（実ニ）勸持品ノ数数見擯出ノ經文ニアウ事ヨ、我ハ上行菩薩ナリケルト自解仏乗シ給フ

二 二ハ伊豆ヨリ帰り給ヒテ、老婆ニ見參ノ為ニ安房ヘ下リ給ヒシ時、東条左衛門ニアツテ及加刀杖ノ難ナリ

三 二ハ鎌倉ニテ雨ノ祈ニヨツテ良觀房等ノ讒言アリシカバ又竜ノ口ニ頸ノ座ニナヲリ給ウコト刀杖ノ難ナリ

四 八又佐渡ノ国エ流サレ給イテ数数ノ二字ヲ伊豆ノ配所ノ時ハ一字コソ読ミシニ今ハ二字ヲ

読ム、サテコソ我ハ上行菩薩本因妙ノ導師末法下種ノ本尊ナリケリト自解仏乗シ給イテコソ有縁ノ御弟子ノ中に開目抄ヲ作テ御遺シ有ケルナリ」(註七)

とあつて丁寧を極めて開目するの動機を述べられておる。文中私見とは少々異なる所もあるが、今は大綱を言うて細目には渡らないで置き、これは後述にゆずる。

論が飛躍してしまつたので、ここで最初にもどつて、何故開目抄が書かれたかをのべてみる。

大聖人が佐渡配流となつて、大聖人門下に動搖の起きたことは十分に察せられる。

日朗上人以下数名の人々は牢内にとらわれ、所領を没収せられた信徒もあり、所を追われた信者もいた。なかんずく、大聖人の心を痛めさせたのは、少輔房であつたらう。この少輔房は、文永六、七年頃京都に登つて、公卿の前で法華經を講義したことを威張つて、大聖人に報告して、うんと叱責せられたのだが、その後、大聖人の門下を退転して、大聖人の竜の口や、佐渡の難が出来ると、自己の先見の明あるを誇り、大聖人の門下の道俗を誘惑して退転せしめた。

「大魔のつきたる者どもは一人を教訓しをとしつれば、それを引懸ひっかけにして多くの人をせめおとすなり。日蓮が弟子に少輔房と申し、能登坊と言ひ、名越の尼なんど申せし者どもは、慾ふかく、心臆病に愚痴にして而も智者と名乗りしやつばらなりしかば、事のおこりし時、たよりをえて、

多くの人をおとせしなり」（全集一五三九ページ）

とは少輔房が自分以外の、沢山の人々の信仰を退転させたことを語るものである。

大聖人が、伊豆流罪以後は、法華經の行者と常に称したのに対して、これを、少輔房、能登坊、名越の尼、三位日行、大進坊等々が大聖人さまの門下を愚弄して、

「日蓮が、法華經の行者と言っておるが、日蓮が常に口に行っている法華經からみれば、大変な相違である。法華經の安樂行品に「天の諸々の童子を以て給使をする。刀杖も加えず、毒も害することが出来ない」又「もし人にくみののしらば口則ち閉塞せん」葉草喻品（法華經第五）には「現世は安穩にして後生は善処ならん」陀羅尼品（法華經第二十六）「頭破ぶれて七分となること阿梨樹の枝の如くならん」勸発品（法華經二十八）「亦現世に於いてその福報を得ん」「もしもまたこの經典を受持せん者を見てその過悪を出ださん、もしは実にもあれ、もしは不実にもあれ、この人現世に白癩の病を得ん」（全集三〇ページ）

安樂行品に曰く「樂ねがつて人及び經典の過を説かざれ、亦諸余の法師を輕慢せざれ」（全集二三四ページ）

等々の法華經を引用して大聖人に反対した、しかも名越の尼などは、大聖人さまが鎌倉にでた建長五年以来、その庇護にあたり、ために大聖人は佐渡配流以前は、名越に草庵を結んだ程である。その尼が、信心を退転したのだから、影響するところは大きかったに違いない。但しこの名越

の尼は、大聖人が、誰しも夢想しなかつた、佐渡御赦免となると、再び信仰をつづけるようになり、八年後の建治三年には、大聖人さまに、御本尊書写をお願い申し出たが、大聖人さまは、御本尊をこの尼に許されなかつたことは、前述したとおりである。

さてこのような鎌倉の状態であつたので、大聖人さまは「日蓮が強義経文に符合せり」との見地から執筆せられて、それが法華経の本当の精神であることをのべられたのである。

日本に弘まつた宗旨だけでも十指にあまるが法華経という經典が一番の径文であり、釈尊自らが「諸経中王最爲第一」と言われておることを開目抄では徹底的に論じられ、ついで、その法華経の弘まるべき時機はいつかと言うと、末法の今であると申されておる。これもまた法華経に、「後五百歳広宣流布」とあるのであるから、単なる大聖人さまの断定ではないのである。

さて、法華経が末法に於いて流布すると言つても、その弘まる所の中心がなければならぬ。その中心は日本国なのである。

今暫く、日寛上人の御指南を拝借する。

「第四に国を知るとは通じて之れを論ずれば法華有縁の国なり、別して之れを論ずれば本門三大秘法広宣流布の根本の妙国なり、

日本の名にしばらく三意あり、

(一) には所弘の法を表じて日本と名くるなり、謂く日はこれ能譬、本はこれ所譬、法譬ともに

挙げて日本と名くるなり、經にいわく、又日天子の能く諸の闇を除くが如し、宗祖いわく、「日蓮曰く日は本門に譬ふるなり」、日は文底独一本門に譬ふるなり、四条抄に名の目出度きは日本第一と云う是なり。

(二) に能弘の人を表して日本と名くるなり、謂く日蓮が本国なるが故なり、故に顕仏未来記にいわく、天竺漢土に亦法華經の行者之あるか如何ん。答えていわく四天下の中に全く二の日なく四海の内に豈尙主あらんや云々、故に知ぬこの国は日蓮の本国なり。

(三) には本門広布の根本を表して日本と名づくるなり、謂く日は即ち文底独一の本門三大秘法なり、本は即ちこの秘法広宣流布の根本なり、故に日本と云うなり。応に知るべし月は西より東に向う、日は東より西に入る之を思ひ合すべし、しかれば即ち日本国は本因妙の教主日蓮大聖人の本国にして本門三大秘法広宣流布の根本の国なり」(聖典八八六ページ)

以上が、日本国と日蓮大聖人さまとの靈瑞感通の嘉名かめい早立の故で後述の文を今は略しておく。

さて末法に法華經が日本を中心としてひろめなければならんことがわかったとしたら、どういう態度でこれを弘めるかと言うと、これは折伏による以外はないのである。折伏をすれば難のくすることは前述したが、では、その前代未聞の法華經の折伏者とは、一体どういう人であるのだから

うか。読者は必らず開目抄を読むもの、或いは読んだものとしてその内容には十分にふれないが、この開目抄だけを読んで、大聖人さまに帰依した有名な人々のおることなどを忘れてはならない。

開目抄の大意については五十九代日尊上人の大意述作を略述してみることにする。

「それ一切衆生の尊敬すべきもの三つあり、主師親これなり」とその尊敬すべき主目を標出し、支那の儒道より印度のバラモンに及び又三国の仏道にその時々主師親を判釈して最後に「日蓮は日本国の諸人の主師親なり」と結勸されておる。繁煩な引文は省略するとして、ここに最も驚愕すべき大問題は、説道の順次によらずして、突如として昂起せる左の聖文である。

「一念三千の法門は但法華経の本門、寿量品の文の底に秘ししづめたり、竜樹、天親、知つてしかもいまだ、ひろいいださず、但我が天台智者のみこれをいだけり」(全集一八九ページ)

この金文は、富士門の古師は、皆本抄第一肝要の文底深秘の真文と絶唱せられておるに引きかえ、他門では冷眼視勝ちである。それは、本文が下巻にも入り、又本迹相對の要所にでもあるのなら重要視せんも、今は全く権実相對の序文に略説せらるる天台付順の一念三千説のようにみゆるのであるから、大聖人主張の極説には間遠いことのようにかたづけて、大悲深秘の文脈に思いつかずして却つて富正義を妄判しておる。正宗の信者は勿論のことであるが、異見の人々も深くここに開目して、この見地にたちて、長篇の権実、本迹相對的のべられておる史説にも、法理

にも暢達せられんことを望む。大聖人自ら、「これは魂魄佐渡の国に至る」とは、その聖き靈なるものは何ぞと言う時、極々上級にみてそれは上行菩薩であり。それが大聖人の本地であるとす。即ち竜口で発迹顕本したと迄しか目が開かぬのである。これこそ富士門古抄の所判の如く「他は全く閉眼盲目で日興一人のみが開目」とあるのがそれで、即ち師弟不二・師資相伝の辺から言うとき五老（註八）は閉眼盲目、日興上人一人のみ開目正視となる。

示同凡夫僧の日蓮の首は竜口で刎ねられて、死後の心霊が、佐渡より開目抄を遺教とする御文の意を、一般の日蓮教徒は、この心霊の本地こそ、法華本門に顕われたる、六万恒沙ごうじやの大菩薩の上首たる上行菩薩である。されば、大聖人は本化上行菩薩の再誕として尊敬し、最大上級の信念を發起したものと自負しておるようであるが、却って煩惱無明の断否を無視したるに拘わらず、内実には、凡夫僧の宗祖をば、強いて教相文上の菩薩の断惑位の高地に押し上げたるかにみゆるは如何なものか。これよりも未断惑なる元初本因妙の初位に落居せしめてこそ、却って我等一迷を断じ得ぬ人倫の中に沈没して一步も浮かび出でざる迷者に対せらるること能所相応して久未一雙の利益が輝くではないか」

以上は堀上人の所説の引用であるが、

要するに一念三千の法門は成仏を論ずる原理であるが、「寿命品ノ文ノ上トハ在世ノ寿命品ノコト、文ノ底トハ滅後末法ノ寿命品ノコトナリ」の日要師の言葉が一番理解しやすい。そして、

末法は文底の寿命品でなければ、われ等は救われないのである。われ等を救つて下される方は、この文底の寿命品を示すところの大聖人であると言つことを明かすのである。

「在世ノ本門ト末法ノ初トハ一同に純円ナリ、但シ彼レハ脱、此レハ種ナリ、彼レハ一品二半、コレハ但題目ノ五字ナリ」（全集二四九ページ）とある。「総シテ当宗当家ノ心ハ久遠常住三世ノ中ニハ過去二宗旨ヲ立ルナリ」と日要師が言われたのは大石寺九代の日有上人の

「当宗本尊のこと、日蓮聖人に限り奉るべし、よつて今の弘法は流通なり滅後の宗旨なるが故に未断惑の導師を本尊とするなり」（聖典九七九ページ）

「当宗には断惑証理の在世正宗の機に対するところの釈迦をば本尊には安置せざるなり、（略）釈迦の因行を本尊とするなり、その故は我等が高祖日蓮聖人にて在はすなり」（聖典九九六ページ）が以上の言葉の証明ともなるのである。

開目抄劈頭の「一切衆生の尊敬すべきもの三つあり所謂主師親これなり」（全集一八六ページ）は、

「大願を立てん、日本国の位をゆずらん、法華経をすてて観経について後生をごせよ。父母の頸をはねん、念仏申さずば、なんどの種々の大難出来すとも智者に我義やぶられずば用いじとなり（我が義が破ぶられない限り断乎として従うことができぬ）我日本の柱とならん（主の徳）我れ日本眼目とならん（師の徳）我れ日本の大船とならん（親の徳）等と誓いし願やぶるべからず」



(全集二三二ページ)

の三大誓願に結論されたのである。

(註一) 種々御振舞御書

(註二) この開目抄は、日蓮の魂魄が佐渡にきて雪の中で書いたものだから、霊魂が書いたものだと思えば恐ろしくもあるが、日蓮と因縁あさがらぬ弟子達には年来の關係をおもえば、その人達はなつかしくおもうだろうが、そうでない他人がみたら本当におそろしいと思うであろう。

(註三)、(註四) 開目抄中の御文章

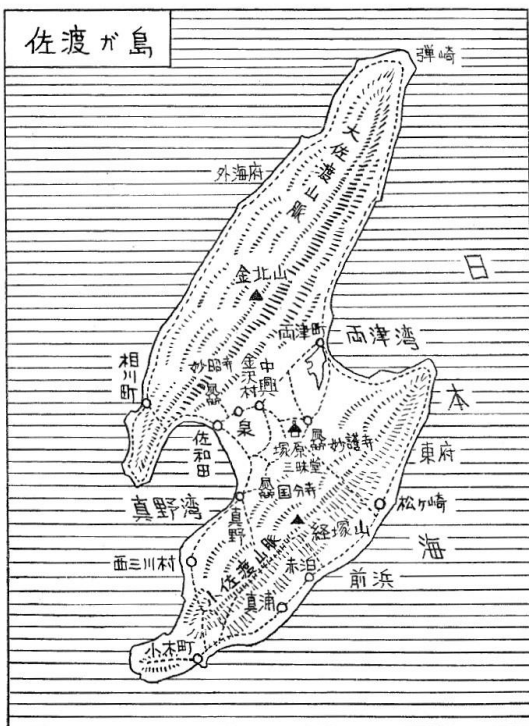
(註五) 法華本門開目抄聞書、保田妙本寺日要、祖滅二百年頃

(註六) 開目抄詳解上、西山本門寺未湛如日応、祖滅三百六十年頃

(註七) 註(五)の引用

(註八) 日昭、日朗、日向、日頂、日持、大聖人さまのお弟子

佐渡が島



如来滅後五百歳始觀心本尊抄 日蓮撰

日亨上人は「大聖人滅後四百年間に、本抄を大聖人さまの意の如く信敬し奉つて、慎んで現当を利益すべく本抄を残したのは、保田妙本寺の日我上人（日師系）と、吾山の二十六代日寛上人のみ」と言われ、富士系に稀に見る広学の要法寺日辰すらのをはずした読みかたをしており、特に大聖人より直伝をうけた若宮の富木日常及びその門下にも光彩を放つべき意見がなく、況んや相伝もなかった。しかも、大聖人滅すると、自ら天台沙門となつた五老の門下には「凡智の研鑽に肱をたく衆は多くとも、聖智に遠かりて益々方針を失する傾きのみあるは慨いても猶あまりある次第である」と、断言せられておるのである。

私は今、日我上人を参考とし、日寛上人の觀心本尊抄文段によつて、表題の題号を私見をまじえず説明して、読者が、觀心本尊抄の本文を読まれることを希望して筆をすめるものである。

如来滅後五百歳始觀心本尊抄とあるが、これを、

(一) 後五百歳に始めて心を觀る本尊抄

(二) 後五百歳の始め心をみる本尊抄

(三) 後五百歳に始めたる心の本尊を見る抄

(四) 後五百歳に始まる観心本尊抄

これらの読み方は、時、法、題意をもつて読むものであるが信用するに足らない。

如来滅後五五百歳とは、これは上行出世の時をあかすのであって、始の字は、上行始めて弘むるの義である。観心はこれ文底所被の機縁の観心を明かすのである。本尊はこれ人即法の本尊を明かすのである。

始の字は万年救護の本尊の讚文に、上行菩薩世に出現して始めてこれを弘宣す云々の明文があるから証言は十分である。

観心本尊については前述の如く、(一)——(四)までのよみかたがあるが、これ等の私見をもつて読んだり、知ったかぶりの読み方は一向にしないで卒直に観心の本尊抄と読む。これは、教相の本尊に対して観心の本尊と言う意であるからである。例えば、三大秘法の本門の本尊と言うのは迹門の本尊をえらび本門の本尊を踏むすのと同様である。

開目抄に「一念三千の法門は但法華經の本門寿量品の文の底にしづめたり」(全集一八九ページ)

ジ) 一念三千の法門は觀心の法門である。文底をもつて觀心の法門と名づける。故に、文上の法門は皆教相に属するのである。これをもつて、教相の本尊と觀心の本尊との相違がわかる。

始の字の意味は、正法時代、像法時代(註一)に未だ弘めずの意を正とするが、その傍から、一閻浮提に始めて弘むるの意味があるのである。

本尊問答抄に「此の御本尊は世尊とき置かせ給ひて後二千二百三十余年が間一閻浮提の内に未だ弘めたる人侯はず、乃至当時こそ弘まらせ給うべき時に当りて候」(全集三七三ページ)万年救護の御本尊の讚文に「大覺世尊御入滅後、二千余年を経歴す、しかりと雖も月漢日三ヶ国の間未だ此の大本尊ましまさず、或は知つて之れを弘めず、或は之れを知らず、我が慈父仏智を以つてこれを隱留し末法のために之れを残す、後五百歳の時、上行菩薩世に出現して始めて之れを弘宣す」とある。

故に如上の理を了すれば、当抄の題号は、

如来滅後後五百歳に上行菩薩始む觀心本尊抄  
となるのである。

では觀心とは誰人の觀心をさすかと言え、末法の我等衆生の觀心である。それは觀心本尊抄

の末又「此の時地涌の菩薩始めて世に出現し但、妙法蓮華經の五字を以て幼稚に服せしむ」（全集二五三ページ）或いは「仏大慈悲を起し五字の内に此の珠をつつみ、末代幼稚の頸にかけさしめ給う」（全集二五四ページ）この文中において服せしむ、或いはかけさしめ給うはこれ觀心であつて、末代幼稚とは今時いましむの我等衆生のことである。

「此こゝに「仏大慈悲を起こして」と仰せられておりますが、この仏とは日蓮大聖人自らのことであります。それは大御本尊を建立遊ばされ頸にかけさしめる御方は大聖人であらせられること、また開目抄に、主師親であらせられることをおあかし遊ばされ「慈悲のすぐれたるは、天台、伝教も恐れをもちだきぬべし」との玉い、身命をすてても、一切衆生を仏にせんとの大慈悲の上にお立ち遊ばされたことを考え合せば、領解し奉ることができます」（日淳上人全集四八二ページ）非常にわかりやすい御指南なので特別にここに引用した。

さて、では末法の我等衆生の觀心とはなにかというと、従来いう所の觀心とはことなつて、当宗の觀心とは本門の本尊を受持して信心專一に、南無妙法蓮華經と唱え奉るこれを文底事行の一念三千の觀心と名づけるのである。

十章抄に「南無妙法蓮華經を心に存すべきことは一念三千の觀法なり、これは智者の行解なり、日本国の在家の者にはただ一向に南無妙法蓮華經と唱えさすべし、名は必らず、体に至るの徳あり」（全集二二七四ページ）とある。

信心口唱のみでどうして観行（心に理を観じて、理の如く身に之れを行うこと）を成就するかと  
言うると、本尊を信じて南無妙法蓮華経と唱えることにより、信ずる所の本尊、唱える所の南無  
妙法蓮華経の、仏力と法力によって速やかに観行を成就するのである。

故に当体義妙には、

「法華経を信じて南無妙法蓮華経と唱える人は、煩惱、業、苦（註二）の三道は、法身、般若、  
解脱（註三）の三徳と転じて、三観三諦（註四）即一心に顕はれ、その人所住の処は常寂光土な  
り。（略）本門寿量の当体蓮華の仏とは、日蓮が弟子檀那等の中の事なり、是れ即ち法華の当  
体、自在神力の顕はす所の功能なり、敢てこれを疑うべからず」（全集五一二ページ）とあるの  
がそれである。

但だ法華経を信ずるのが信力であり、南無妙法蓮華経と唱えるのは行力であり、法華の当体と  
は法力である。妙法の三力とは、法力、仏力、信力を言うので、臨終の時に南無妙法蓮華経と唱  
えれば、妙法の三方の功德によつて速やかに菩提を成ずとは、ここからきておるのである。

次に本尊とは如何なるものかという、我等衆生の受持の法体、信ずるところ唱えるところ  
の曼荼羅（註五）である。日蓮門下一般は、釈尊在世の法華本門八品の儀式を以つて本尊とみな  
しておるが、観心本尊抄を信心の眼をもつてみるならば、そんなことは一応の解釈である。釈尊  
在世の本門八品（註六）の儀式はただ在世脱益の本尊であつて末法下種の本尊ではない。故に本

尊抄の中ではこれを区別するために、文底深秘の大法、本地難思、境智冥合本有無作の事の一念三千の妙法五字をとって末代幼稚の本尊としているのである。

仏（大聖人のこと）大慈悲を起こして我が証得の全体を一幅に図顕して末代幼稚に授く、故に我等ただ此の本尊を信受し余事をまじえず南無妙法蓮華経と唱え奉ればその義を知らずと言うと雖も自然に自受用身即一念三千の本尊を知るようになり、その境地に至れば我が色心（物と心）の全体が事の一念三千の本尊に当たるといふことを知るようになり、それは赤ん坊が乳を含むに、その味を知らないが、自然にその体を養うようなものである。先述では本尊とは如何なるものかをお話ししたが、本尊のもう一面を論じてみよう。本尊の名義とは如何なるかを考えてみると、

大聖人は、「一切衆生の尊敬すべきもの三つあり所謂の主師親これなり」と言われておるが、如何なる宗旨でも主師親を根本としてこれを本尊としている。即ち儒家では三皇五帝を、俱舎、成実、律宗、禅宗は三蔵の小釈迦を本尊とし、法相、三論の二宗は、通教の大釈迦を本尊とし、浄土宗は阿弥陀仏を、華嚴宗はビルシヤナ法身、真言宗は大日如来を、天台大師は阿弥陀を本尊とし、別時には一念三千の時は、南岳所伝の十一面観音を本尊とし、法華三昧の中には法華経一部を以て本尊とする。伝教大師の迹門戒壇の本尊は迹門の釈尊であるが、根本中堂の本尊は薬師如来である。



さて斯くの如くいろいろの宗派は本尊にことなりがあつても、皆仏さまをもつて本尊としておるが、日蓮正宗の御本尊だけは、仏の中においても、本門の仏をもつて脇士とするところの妙法蓮華經の五字の本尊である。

これこそ世界に類のない所の本尊である。それ故、御本尊さまの讚に「一閻浮提之内未曾有の大曼荼羅也」とあるのは、印度支那否世界の中において、いまだ嘗てなかつた御本尊なるが故に、未曾有という讚文をつかわれたのである。

「爰を以つて中央に南無妙法蓮華經日蓮判と主しげ玉へり、脱仏の釈迦多宝別体の地涌等は脇士なり、万法総持の南無妙法蓮華經日蓮躰具の十界聖衆とみる処が觀心本尊也、下種と言はばいづくにありても久遠なり、過去に宗旨を立つるとは是れなり、出過三世の南無妙法蓮華經本因妙の本仏最初下種の導師なり」(要四―一三九ページ)

の我師の本尊鈔抜書も前文を味読する時に役立つと思ふのである。

さて再び日寛上人の御指南を仰ぐと、本尊問答抄に、

「問う末代惡世の凡夫は何物をもつて本尊と定むべきや、答えて云く法華經の題目を以て本尊とすべし、乃至上にあぐるところの本尊は、釈迦多宝十萬諸仏の御本尊法華經の行者の正意也」

(全集三六五ページ)

この本尊問答抄の文の心は、主師親を根本として之を尊敬する故に本尊と名のるなり。これに

人法あり。謂く人即久遠元初の自受用報身、法即事の一念三千の大曼荼羅なり。人に即して是れ法。事の一念三千の大曼荼羅を主師親となす。法に即して是れ人。久遠元初の自受用身蓮祖聖人を主師親となす。人法名ことなれども、その体一なり。これ即ち末法我等が下種の主師親の三徳なりと日寛上人は釈せられておる。

さて観心本尊抄の題号のよみ方だけでも、いくつかあるくらいであるから、この題号に多意あることは申す迄もないが、日寛上人はこの題号に三大秘法を含むと解釈せられておる。

如来滅後後五百歳に始むとは即ち是正法時代像法時代にまだ弘まらざるの義である。すると、観心の二字は正に是れ本門の題目である。その故は、三大秘法の中の本門の題目とは、ただ、本門の本尊を信じて南無妙法蓮華経と唱え奉るを本門の題目と名のるこれは今の観心に相当する。よく信じ、よく唱えるを観心と名づける。故に本門の題目に当るのである。本尊の二字は正しくこれ本門の本尊であり、所在の処は本門の戒壇である。故に如来滅後後五百歳始観心本尊抄とは、これ正像未弘の三大秘法抄と言ふことが出来るのである。

この観心本尊抄の題号のもとに本朝沙門日蓮撰とあるが、これについて日寛上人の釈文を要略してみると、章安大師（五六一—五六三）中国天台の四祖は、日の字に三義ありと言われて（一）に

は高く円明なるは主徳にたとえ、(二)に万物を生長するは親徳にたとえ、(三)に照らして闇をのぞくは師徳に譬うとある。蓮は泥土に染まずの徳種子を失わずの徳、因果同時の徳、その外十八円満等々の深義がある。故に「日蓮と名のる自解仏乘(註七)なるべし」又は「日蓮は閻浮第一の智人なり」「日蓮当世には日本第一の大人(仏さまのこと)なり」「日蓮は一閻浮提第一の聖人(仏さまのこと)なり」「南無日蓮聖人と唱えんとすれども、南無ばかりにしてあらん」「日蓮は日本国の一切衆生の主師親なり」等々聖言あぐるにいとまないので、日本国中の日蓮門下の諸門流は、(昭和御代になつても)この義を知らず、大聖人を僧の位におとし、又は大菩薩と号しておるのは、実は本尊に迷うが故である。

されば日蓮と名のることは、主師親の三徳を表わすことであつて、日蓮大聖人は、久遠にあつては、自受用報身と号し、法華経の靈山にあつては、上行菩薩と号し、今末法にあつては、日蓮聖人と号するのであつて名はことなつても一体の御利益である。血脈抄には「本地自受用報身垂迹上行菩薩の再誕本門の大師日蓮云々」又開山上人の弟子三位日順は「久遠元初の自受用身とは、蓮祖聖人の御事なりと取定め申すべき也」と申されておる。

さてこの観心本尊抄の註釈書は有名なもので約八十冊もあるが、富士系をのぞいては、大聖人のこの書の述作の意が解せられず、

(一) 「この時、地涌千界出現して、本門の釈尊の脇士となりて、一閻浮提第一の本尊を、この

国に立つべし」と読んでおる。

これを日蓮正宗では、

(二) 「この時地涌千界出現して、本門の釈尊を脇士となす一閻浮提第一の本尊この国に立つべし」(全集二五四ページ)

と読む。これこそ天地雲泥の相違であるが、先ず日蓮正宗の読み方を先にのべると、それは観心本尊抄のここの個処の前文に「塔中の妙法蓮華経の左右には釈迦牟尼仏、多宝仏」(全集二四七ページ)云々とあつて、妙法蓮華経は本尊の正体で、釈迦多宝は妙法蓮華経の脇士たること明らかである。大聖人さまも「妙法蓮華経こそ本仏にて候」(全集一三五ページ)と申されておる。

さて大聖人さまの書かれた、御本尊は種々あるが、弘安二年の本門戒壇の御本尊は、究竟中の究竟、本懐中の本懐で、三大秘法の随一、そして一閻浮提惣体の本尊である。

ここに天台大師と大聖人さまの不思議をのべるならば、天台大師は隋の開皇十四年御年五十七歳四月二十六日より、止観を始め四年後同十七年六十歳十一月の御入滅。大聖人さまは文永十年四月二十五日観心本尊抄を述作せられ、弘安二七御年五十八歳十月十二日に戒壇の本尊を顕わして後四年の弘安五年御年六十一歳十月の御入滅で、これに三事の不思議がある。

(一) は天台大師は五十七歳にて止観をとぎ、大聖人は五十八歳にして戒壇の本尊を顕す。天台大師は六十歳の御入滅、大聖人は六十一歳の御入滅、これは像法時代と末法時代の教主の順序、

不思議と申すべきであらう。

(二) には天台大師は四月二十六日に止観を始めたが、大聖人は四月二十五日に観心本尊抄を終つておる。天台大師は十一月の御入滅で大聖人は十月の御入滅である。大聖人さまは後に生まれられても下種の教主であられる。故に義は前にあるので、大聖人は二十五日に終り、十月の御入滅、天台大師は、前に生まれられても熟益の教主である故に後になる。是の故に二十六日に止観を始め十一月の御入滅である。これも不思議なことである。

(三) には天台大師も大聖人も入滅四年前に終窮究竟の極説を顕しておる。これも不思議と申してさしつかえない。

また、この脇土云々の前文に大聖人は、

「法華経ならびに本門は仏の滅後をもつて本となし、先づ地涌に之れを授与す、何ぞ正像に出現して此経を弘通せざるや。答えて曰くのべず。重ねて問て曰く如何。答うこれをのべず。又重ねて問う如何。答えて曰く之をのべれば(略)我が弟子の中にもほほこれをとかば、皆誹誇をなすべし、黙止せんのみ。求めて曰く、とかずんば汝賢けんどん貪に墮せん。答えて曰く進退これきわまれり、試みに粗ここれを説かん」(全集二五三ページ)

とある。「我が弟子の中にもほほこれをとかば、皆誹誇をなすべし」と文中にあるが、これはよく味読い

たすべき御文章と拝するものである。前述の

(一)の本門の積尊の脇士となり

(二)の本門の積尊を脇士とする

の(一)の読み方ならば、なんの変化もなく、我が弟子の中に皆誹誇をなすべしの文章は少しも意味のないものとなる。これに対して、

(二)の読み方をして信心を上げむ時こそ「我が弟子皆誹誇をなすべし」の文章が生き、「進退これきわまれり、試みに粗これをとかん」との大聖人が、三請三誠重請重誠せられて説くところの仏意がわかるのである。

七百年後の今日においても(二)の読みかたをして大聖人の正義を伝える日蓮正宗が、(一)のよみかたをする現に積尊を主としていて、しかも日蓮宗門下と称する諸派から、誹誇されておるのは、大聖人が、すでに観心本尊抄において予言をされておると申してさしつかえないのである。

以上で、日寛上人御指南の観心本尊抄文段の抜き書きを終わる。

開目抄において、大聖人が主師親であることを明かされ「我日本の柱とならん。我日本の眼目とならん。我日本の大船とならん」と三大誓願をたてられた大聖人が、この観心本尊抄において「先づ一念三千の出場所を明かし、それより経文に照合して観心の一念三千を示され、次いで一念三千の本尊を説きあそばされ、更にその建立の縁由をのべ、最後に、この御本尊を末代の衆生

にさづけると仰せられて結びとなされておる。

最後にこの観心本尊抄が、如何に重要な聖文かということは、その副状があることによつて、わかると思つので掲載する。

「観心の法門少しくこれを注し、太田殿、教信房等に奉つる。此のこと日蓮当身の大事なり。これを秘して無二の志をみば、これを開拓せらるべきか。此の書は難多く答少なし、未聞のことなれば、人の耳目これを驚動すべきか。設い他見に及ぶとも、三人四人座をならべてこれを読むことなかれ。仏滅後二千二百二十余年いまだ此書の心あらず。国難をかえりみず、五五百歳を期してこれを演説す。乞い願くば、一見をふるの末輩、師弟ともに靈山浄土に詣でて、三仏の顔貌を拝見し奉らん 恐々謹言

文永十年卯月二十六日

日蓮花押

(註一) 正法時代像法時代は釈尊滅後の教法の時代相で正法時代は一千年つづき、釈迦の法が

正しく行なわれる。像法時代これも一千年の間つづいて、その法は像とは似るの意味で、教をはなれて形式的なる故に一千年の間で前の五百年は読誦多聞時代で説教をしたり経はよむが、実行力がとぼしい。その次の時代は塔寺時代と言つて、寺とか堂宇をつ

くることが、仏教だと思ふ時代、この二千年がすぎると、末法万年の時代なり、末とは無の意味で積尊の仏教がなくなつてしまふ時代、この末法の時代に出る仏様がある。即ち日蓮大聖人である。

(註二)

煩惱とは我々の迷い、業とは我々のしたこと、安国論に「人の夜ものかくに火は滅すれども字は存するが如し、三界の果報も亦々かくの如くならん」とある。苦とは四苦のことをいう。

(註三)

法身とは理性に安住する常住の身。般若とは、法身の徳をとらず智慧。解脱とは前者二者の二徳によつて、ものごとにとらわれない自由な境地

(註四)

三観とは空、仮、中の三種類の観法、三諦、諦とは真理を意味し、すべての存在は実体なしとするのが空諦、縁によりて仮りにあるとするのが仮諦、すべての存在は空や仮で一面的に考えられるものではなくて、言語や思慮の対象をこえたものとするのが中諦  
(註五) マンダラとは大聖人によれば、功德のあつまりという印度の言葉で、ここでは本尊をさす。

(註六)

法華經の第十五から第二十二までを言う。

(註七)

仏乗とは法華經のことを言う。教法は一切衆生をのせて煩惱生死の苦界より、菩提涅槃の樂界に運ぶのりものなるが故に、自解とは他から教えられずして、自分から会得す



る、即ち仏の意味と考えてよい。



## 佐渡の四条金吾

一

文永十年の五月の或る日だった。

佐渡の五月は、暦の上では夏ではあるが、まだ金北山の山肌には一すじ二すじの残雪が残っていた。

ここはその金北山の登山道にあたる、石田の郷の一の谷さむと言う処であった。西と北が小山になつていて、冬の強い西風がふせげる、佐渡としては、比較的暖かい冬のむかえられる結構な所である。

大聖人は今この一の谷で鎌倉から遙々と尋ねてきた、四条金吾と対談されているのだった。

大聖人が、塚原の三昧堂から、なぜここにうつられたかと言うと次の如くであった。塚原三昧堂での俗に言う塚原問答が、大聖人の勝利に帰すると、塚原という所が国府に近いのにもかかわ

らず、塚原に多数の大聖人への信者ができたので、国府の役人は、これに驚いて、国府から二里程はなれた、この一の谷に移したのであった。

だが一番国府の役人が驚いたのは、問答の一月後に、天台宗叡山の学匠で、この佐渡の島に流罪の身となっていた、(註一)最蓮坊という僧侶が、自ら進んで大聖人さまの弟子となったことであつた。最蓮坊は大聖人さまより、日浄と名を賜わり、大聖人より御書を賜わること、生死一大事血脈抄外七の御真書が現存しておる程である。これをもつてしても、如何に強信であつたかが伺われる。最蓮坊の捨邪帰正は、佐渡島の念禪その他の僧侶に大打撃をあたえたことは十分に察せられる。その証拠には二月に最蓮坊が入信して、四月早々に塚原から一の谷に大聖人はうつされておるのである。

一の谷の大聖人のおすまいは、佐渡の代官本間六郎重連の一族の名主で、その屋敷に阿弥陀堂をたてて、唱名念仏にあげくれた人なので、一の谷入道と呼ばれる人の館であつた。

念仏無間地獄を唱える大聖人が、大の念仏屋の所に、あずかり人となつたのだから大変なことであつた。

この当時の島の流人は、前述したことであるが、一か年の生活費は官給であつたが、それがすぎると、自営自活せねばならなかつた。当時の掟として農耕に従がわねばならなかつた。

だから、一の谷入道の大聖人さまに対する待遇は最初はともひどいものであつたらしい。

「預りよりあがる食はすくなし、つける弟子は多くありしに、僅の飯の二口三口ありしを或はお盆（折敷）に分け、或は手に入れて食いしに」（全集二三九ページ）

と言う御手紙を拝すると、官給以外の食を大聖人に御供養しなかつたように、最初は思われる。日興上人は大聖人とともに、佐渡に渡っておつたのだから、「つける弟子は多くありしに」の中には、勿論日興上人もはいつていたことであろうが、一人の官給食をたまには、大勢で食したことを書かれたことと思う。

しかし、弟子達も、やがて農耕に従事して大聖人の食生活には、佐渡の信者の外護もあつて、ことかなくなつたであろうが、一の谷早々の御生活は苦るしかつたに相違がない。しかし、一の谷入道も、大聖人さまに接してゐる中に、いつしか感化されて、世間態を考へて表面には念仏をすてかねても、内心では大聖人に信服するようになった。それは、入道の妻や子供が、本気で大聖人さまに帰依した感化もあつたのであろう。

大聖人が一の谷に移られてから、子供を背かつて鎌倉から、態々大聖人をたずねた一女性があつた。暫らく滞在して、大聖人や弟子達の身の廻りを世話して帰つていったが、大聖人は、大変に感動せられて、この女性に「日妙聖人」と名を賜つた。女人の身として生前中に聖人号を賜つた人はたんとない。故に「日本第一の法華經の行者の女人なり」とこの女性に讚歎の言葉を、大聖人は賜られておる。

日本第一の法華經の行者の女人なりと、大聖人さまからおほめを頂戴した日妙聖人も、いよいよ佐渡から帰る時には、路用の金子がなくて、大聖人さまの紹介で、一の谷入道から、借金しておるのも、人間味あふれる話だと思う。入道も路用の金をやくだてるような人になつたのだから、内心では大聖人に帰依していたのであろう。大聖人に接しての間は、信心があつても、大聖人さまが佐渡から鎌倉に帰られるようになると、世間態を考えて、念仏をどうしてもすてかねるようであつたことは、大聖人さまが、四年後の建治元年に、一の谷入道の妻に与えた手紙に、入道の信仰の不徹底さを戒めた書状があるのでもわかる。

「吳子（註二）によれば戦争の起る原因を五つに分けています。第一に功名心から起るもの、第二は所有欲から起るもの、第三は憎みあうことから起るもの、第四に、内政の紊乱びらんから起るもの、第五は民の生活の窮迫から起るものであります。この原因によつて發生する戦争は、その挙兵の目的からみて、義兵、強兵、剛兵、暴兵、逆兵の五兵に分けることができるが、義兵は礼を厚くして和を講ずれば、彼は義の名を失うので戦いをやめる。強兵にはあえて抗争せず、貢物を贈つて一たんは屈し、好機をまつべきである。俗に負けるが勝ちとはこれを言うのだが、剛兵に対しては外交辞令をたくみにして、その怒りをやわらげ、激突をさける。暴兵に

は戦わずしていつわり逃げ、その掠奪りやくだつに酔えるとき、逆襲してこれをほろぼす、逆兵に対しては術作をもつてこれをおさえる等々あるが、金吾殿、蒙古の来襲はこの戦争の五田、五兵の中いずれに当たると思われますか」

四条金吾は大聖人の顔を見上げると、

「さあ私の如きものは……」  
と言葉を謹んだ。

「貴公、それでも、鎌倉武士と言われるか、自分なりの所存を、国難を前にして言えぬとは申させぬぞ、どうじやなあ」

言葉とは反対に、大聖人は微笑えみを顔にたたえておられた。

「では申し上げます。今度の蒙古来は孫呉の兵書などには、のせることのできない、未曾有の戦いと存じます。支那四百余州と申しますが、如何に大なりといへど、やはりそれは支那一国内のみの戦い、一国内の戦いを論じたのが、孫呉の兵書であつて、遠く海をこえて、この日本の国に押しよせるという蒙古国の野望は、孫呉の兵書では、その意図が、はかりかねると存じます」

「そう私も思う、呉子の言う所の、戦争の五田、五兵の意味も分かるが、これを全部含めたものが蒙古の拳兵ということが出来よう。しかし、わが国が、この蒙古をどううけとるか、呉の兵法にもない。昔神宮皇后が、三韓を攻めたと言う話は聞いておるが、わが国が他国から攻められ

ると言うことは、未曾有の事で、この日蓮が九か年前に、立正安国論に予言したが、幕府は天下を騒がす大逆人として日蓮を遇し、伊豆の伊東に三か年の流罪を申しつけ、いよいよ蒙古来確實となつて、天下、国家の論を統一して、これに当たるべしとして、十一か処に蒙古来を告げて、その対策の問答をとげようとしたが、却つて、このことが、竜の口の首の座となつた。金吾殿、あの時は、貴殿は本当に鎌倉武士であつたなあ」

「いや、めめしい鎌倉武士でありました。ただ、泣くより外にてだてを知らなかつた」

「これ程の喜びを笑えよかしか……」

「聖人さま、それを言われると恥かしくて、この金吾、竜の口では本当に聖人さまの後を追つて、腹かつさばく覚悟でございました。あの時も今とてもその覚悟に変わりはありません」

「ありがたいことです。日蓮も心から今改めて御礼を申し上げます」

「蒙古が支那四百余州を攻めおとして、わが日本国に攻めこむと言うことは、一体どういふつもりなのでしようか」

「蒙古の意図する所は一応国書に現われておるが、日蓮はそうはとらない」

「ではどういふふうにお考えですか」

「それは、一閻浮提第一の本尊が、この国に立つ証明のために元軍数十万の来寇という事実が、是非とも必要なのだ」



四条金吾は、思わず大聖人の顔をみつめるのだった。大聖人は先程と変らぬえみをたたえたお顔であった。金吾は思った。

常に大聖人は「仏とは末法においてわれ等凡夫のことなり」と我々に教えて下さっていたが、「一閻浮提第一の本尊が、この日本の国に建立されるために、元軍の来襲が必要なのだ」と断言せられた時、「ああ、この御方こそ末法の、生ける仏様なのだ」と確信した。

(註一) 文永元年三月に比叡山の僧侶が自分の寺即ち延暦寺を焼き、五月には三井の園城寺の戒壇をやくとという大事件があった。この災厄の罪をおつたものか。

(註二) 呉子、約二千四百年前河北省に生まれた兵法家

一一

大聖人が開目抄をあらわされて、人開顯(註一)をいたし、次の年、御年五十二歳の時、本尊抄を著されて、末法の衆生のたよるべき本尊を明かにされたのは(註二)文永十年の四月二十六日であった。四条金吾は法門ふれ頭からその御法門を伺うと、じっとしておることが出来ずに、五月下旬、佐渡一の谷さわにおられる、大聖人をおたずねしたのである。

五月といつても佐渡はまだ寒い。大佐渡の金北山には一すじ二すじの残雪が、陽光をうけて、青ぐろい山肌に、きらきらと光っていた。

一の谷は、名の示すとおり、谷間にあるので、佐渡としては、暖かい場所といつてよからう。西の崖下には、つばなの白い穂が風にゆれていた。

四条金吾は、大聖人さまの一言に肅然しゆくぜんとして、膝を正すと、思わずききかえした。

「一閭浮提第一の本尊が、この日本の国にたつためには、蒙古の襲来が必要と言われるのですか」

「さよう……」

大聖人は静かに返答されて、観心本尊抄の一節を、口にされた。

「今の自界叛逆、西海侵逼しんひつの二難を指すなり、此の時地涌千界出現して、本門の積尊を脇士となす、一閭浮提第一の本尊此の国に立つべし、月支震旦に未だ此の本尊ましまさず……」（全集二五四ページ）

四条金吾はただただ、その御金言を拝聴していた。

「既に自界叛逆の難は、去年の二月鎌倉と京におきて、（註三）日蓮の予言のむなしからざるを示した。そして私は、去年の十月二十四日に、弟子の日興が丹精こめて筆写した、立正安国論の裏に、文永九年本歳十月二十四日の夜の夢想に曰く、来年正月九日蒙古治罰のため相国より大小向

う等云々(註四)

と書いたが、本当に、日本国の国状が、そうなたたではないか金吾殿……」

ここで、蒙古のことについてのべるのが順序と思うので話をかえてみよう。

大聖人の竜の口法難は九月十二日と思いいこむ人もあるうが、正確に言ううと九月十三日の午前十二時から三時迄の出来ごとと言うことが出来る。

その文永八年九月十三日づけをもつて、肥後の玉名郡野原庄(現在の荒尾市)の地頭、武蔵の国の御家人小代右衛門、又鎌倉在住の二階堂氏、薩摩の阿多庄(現在の加世田市内)の地頭に、

蒙古人襲来すべきの由、そのきこえあるの間、御家人等を鎮西にさしつかわす所なり。早速に自身、肥後の国の所領に下向し、守護人に相伴い、且つは異国の防禦を致さしめ、且つは領内の悪党をしずむべきもの。仰せによつて執達件のごとし。

文永八年九月十三日

相模守時宗

連署 政村

と御教書が出ておる。これは、高麗の国使の書状が、文永六年の八月の初めに太宰府に達し、太

宰府から、鎌倉に到着していたからである。高麗の国使が、何故蒙古が日本を攻めるといふことを、日本に伝えたかと言うと、蒙古の圧力にもよったが、そうしなければならぬ実には国内の事情があつたのである。それはすでに蒙古軍が高麗の首府の開城に到着したのが、文化八年の正月十五日であつて、三月三日には、忻都將軍の率いる蒙古軍の増援隊が到着した。そして蒙古軍が高麗で軍事行動を起こした。それは当時高麗に抵抗していた叛乱の徒軍を珍島（朝鮮半島の南端の島）で、三万の蒙古軍が、男女合わせて一万人をほろぼし、その残党は済州島（朝鮮木浦の南百四十軒）に逃亡したので、完全にこれを亡ぼしたのは至元十年——我が国の文永十年の四月——であつた。

叛乱徒軍の滅亡によつて、高麗国内も安定したので、いよいよ蒙古軍の日本襲来のお手伝いを、高麗国がしなければならぬ時がきたのである。

ところが蒙古の日本襲来となると、高麗が、出発の基地となることは当然なことである。

軍兵の提供四万人、船艦の建造一千艘を高麗は蒙古から要求されたが、一万人の徴兵がやつとである、こまる、こまるの冗談なぞいつておられない時であつた。

蒙古の日本遠征となれば数十万の蒙古軍が高麗にくる。その食糧は高麗がまかなわなければな

らないことが条約中に規定されていた。これは大変なことである。筆者も第二次大戦の時、二等兵で支那におったが、最前戦線に百俵の米をおくるためには千俵の米を送らなければ、とどかないと言われたが、なぜ、そうなるかをつぶさに体験した。

船はつくれ、徴兵を出せ、食糧はそっちもちときたんでは、蒙古が攻めるのではなくて、高麗が、日本を攻めてるようなものである。それでいて高麗国の存在などは蒙古はみとめておらないのも同然だからたまらない。

そうならないためにはどうしたらよいか、蒙古が日本を攻めなければよいのだ。そのためには蒙古のこわさを、日本国に知らしめて、日本が蒙古の命令をきいてくれればよいのである。そうすれば、高麗は、船もつくらなくてよし、数十万の兵隊に田畑を食いあらされることもないのである。

そこで日本に高麗からの第五回目の使者をたてたのである。前述したとおり、それは至元八年（文永八年）の正月十五日に、高麗国の首都に、蒙古の日本への使者、趙良弼（ちょうりょうびつ）が蒙古軍を率いてきておったので、趙良弼が日本にゆく前に、高麗の使者が日本にきたのである。（富士巻の三）の一七九ページ参照

なにしろこの趙良弼というのは、蒙古国王からお前は使者としては年をとりすぎているからやめたがよいと言われた時に「絶域に死すとも、うらみなし」と自ら進んで使者を希望したという

程の人間である。時に良弼は五十三歳であった。この良弼が日本にゆかない以前に、高麗の使者が日本に到着して、蒙古のおそろしさを、日本に知らせなければ、自分の国にも不利と考えたので、良弼より一か月早く日本に到着した。それが文永八年の八月であった。だから文永八年九月十二日の夜には、時宗は良弼の蒙古使節が九月六日に高麗の金州を発したことを知っていたのである。

高麗の使節は第五回の日本説得に失敗して帰っていったが、良弼の一行はそれとは関係なく、文永八年九月十九日博多湾の西、今津の浜に百余人の多数で上陸し、直ちに太宰府に至り、国書の持参をつげた。

良弼は太宰府の守護所において「国書は王宮に持参して、帝王にたてまつるべし、それがかなわぬなら、時の將軍に伝えて参らすべし、その儀なければ、持つて帰るべし」と強く言つて又文書を以つて、この議がいれられなければ、自分は死んでも郷国に返らないと、当まさに自ら首を切るから、伏して照覧を願うと書いて、至元（文永）八年九月二十五日、使西四州宣撫使小中太夫秘書監国信使趙良弼（註五）としたため、決意の程を示しておる。太宰府では先例にしたがい、一行の上京を許さなかつた。

国書は辛櫃かうびつに納めて、金の鎖くさりでしばつてある程の嚴重さであるが、国書も使節も太宰府が受けつけないというのでは、いくら威張つてみても反応がないので、仕方なく国書のかきうつしを

出して、十一月迄に返答ありたい、さもなければ、一戦あるべしと断乎と言わしたのであつた。

国書の写しは次の如きものであつた。

蓋し聞く、王者は外なしと。高麗と朕とは、すでに一家たり。王の国は（日本を指す）実に鄰境たり。ゆえに、かつて信使をして好を修めしも、疆場の史（太宰府の役人を言う）のために抑えられて通ぜず。うるところの二人（註六）は有使に勅して慰撫し、牒をもたらしめてもつて還らしめしも、ついにまた寂としきくところなし。ついで通問せんと欲せしも、たまたま高麗権臣林衍、乱をかまえ、これに坐して果たさず。あに王もまた、これによりて、やめて使をつかわざりしか、あるいは已につかわせしも、中路にて梗塞（ふさがること）せしか、みな知るべからず、しからずんば、日本はもとより礼を知るの国と号す。王の君臣も、いづくんぞあえてみだりに思わざるの事をなさんや。近くは已に林衍をほろぼし王位を（高麗の国をさす）復旧し、その民を安集せり、とくに少中大夫秘書監趙良弼に命じて、国信使にあて、書をもつて往かしむ。もし即ち使を發し、これとともにきたらば、親は善隣にして、国の美事なり、それ、あるいは猶予をし、もつて兵を用うるに至りては、誰か樂しみてなす所ならんや。王、それ審かにこれを図れ。

文永八年の九月二十五日に、良弼は自刎の決意でこの国書の写しをさし出しているのであるが、蒙古襲来を九か年も叫びつづけて、遂にそのために首の座に登った大聖人の九月十三日から丁度十三日目の二十五日であるのも不思議でないか。さればこそ、大聖人が竜の口法難後約二十八日間も、依智にとめおかれたのは、大聖人の予言の通り日本の国状が動いて、一寸幕府もその決断に迷った証拠である。前出の国書を読めば最早蒙古襲来が動かすことの出来ぬ現実となったことがわかるのである。

我が日本国は神国にして古来より みつぎもの 貢を異国に致したことがないという国是に少しも変わることはなく、良弼はむなしく日本を去らねばならなかったが、この時に来朝にあたって対島あたりからつれてきた弥四郎という男の外に、十二人の日本人をつれ去ったのであった。

良弼の一行は、至元九年（文永九年）の正月十八日に、高麗の国についておる。

良弼の伝によれば、良弼の日本に対する態度が強硬だったので、太宰府が十二人の日本人を使節としておくつたように書いておる。

しかしながら我が国の反牒をもっていないのだから、この十二人は使節でないことはわかっておる。だが、良弼が太宰府で拒絶に合うと、「大將軍兵十方を以ってきたり書（日本の国書）を求む。良弼曰く汝の国王をみず、むしろ我が首をもつてされ」の威圧にあつて、太宰府官のはから



いで黙認という形で日本人十二人を渡したのであろう。その証拠には日本人十二人とあつて、一行の姓名すら弥四郎以下十二人だけとしか分らないのである。

高麗についた良弼は高麗にとどまつて、日本遠征の準備にあつた。この年の八月に高麗国は、蒙古軍の屯用軍に対する供給の痛苦を蒙古に訴えておるなぞのことがあつたので、その督戦をかねて彼は蒙古に帰らず、書記官張鐸ちやうたくというのが、随行の使者二十六名と弥四郎以下十二人をつれて燕京（現在の北京）に到着して、国王忽必烈ふびらいに謁見を願つた。

「去年の九月、日本国人の弥四郎らと共に、太宰府の西守護所にまいりました。ところが太宰府の役人は、前から高麗にあざむかれ、しばしば蒙古国の来征が伝えられたと申しました。しかし皇帝が生を好み、殺をにくんでまず使人をよこして国書を下示されようとはどうしても考えられません。しかしながら王京は、ここ太宰府を去ること。なお遠くにあります。よつて、まず人をつかわし、奉使にしたがつて回報いたさせたいと思います。こう申してここに十二名の者を伴つてまいりました」

と報告したのだが、蒙古国皇は十二名が反牒をもつてないのだから、高麗がなんと言おうと張鐸の口車にはのらず、十二名の日本人を正式の使者とみとめず、臣家たちも、

「まことに聖算の（皇帝の考え）の通りです。日本は、われらが兵を加えることを恐れているに

違いありません。よって、この連中を出して、蒙古の強弱をうかがおうとしたのでありましよう。まずは、これに寛仁を示すべきであります。ただし入見をゆるすべきではありません」と意見を申し上げた。

張鐸の願いは却下され、三月七日、蒙古国王は中書省に下して、弥四郎以下十二名の日本送還を命じ、張鐸は四月七日十二名の日本人をつれて、高麗の使者と共に日本に向かった。五月太宰府に達した。関東評定伝に「五月張鐸帰り来たり高麗の状を又持ちきたる」とあるのがこれを書している。

しかし、決意をすでに固めていた日本政府の出先機関たる太宰府はこれらを一向意にせず、十二名を受けとると、早々に張鐸の一行を追い返してしまった。

この張鐸来朝の時に趙良弼は再び高麗から一緒に日本にきた。張鐸は追いかえされたが、良弼は断乎として太宰府にとどまって、蒙古国の強大さを誇り、これに屈伏することを説き、すでに高麗国には蒙古軍が二万人高麗軍が八千人、船は千料船（千石を積むことのできる大船）三百艘、快速船三百艘、汲水小舟三百艘合計九百艘の用意が出来ておると、軍事上の秘密まで打ちあけて、太宰府の役人をおどしたが、太宰府の役人は一寸も驚ろかず、良弼は京にも登ることも出来ず、翌年の文永十四年の三月空しく高麗に帰っていったのである。

五月都に達した趙良弼は、蒙古王フビライに拝謁を賜ったが、国皇は良弼が、日本にとどまる

こと一か年有余をほめて、「汝は君命をはぶかしめずというべし」という褒賞の言葉を賜わり、また良弼も、このとき、日本君臣の称号、州郡の名数、風俗、産物などに関する覚え書きを献上し、最後に次の言葉をつけ加えた。

「臣は日本に居ること一年有余、その民俗をみるに狼勇（こじゆう）（心ねじてあらつばい）にして殺をたしなみ、父子上下の礼を知らず、その地は山水多くして、耕桑（田畑）の利なし、その人を得ても役すべからず、その地を得ても富を加えず、いわんや舟師にて海を渡るは、海風も期なく、禍害も測ることなし、これ有用の民力をもつて、無窮の巨谷をうづむるがごとし、臣おもえらく、うつことなかれ」と答えたのである。

良弼が日本に一年有余滞在して、つぶさに日本の国状を視察して、今度くる時は、十万の大軍をもつて日本に襲来すると断言して帰ったのが、文永十年の三月であり、「一閭浮提第一の本尊この国にたつべし」（全集二五四ページ）と断言された観心本尊抄が著述されたのは、その年の四月の二十六日である。世界の殆どどの国を征服し、世界未曾有の一大帝国を建設した元軍が日本に來襲することは、最早時期の問題となつたのである。世界最強の物質力をもつて、日本の国を攻めてくるのである。これに對抗し、この物質力を打ち破るものはなんであろうか。これを大聖人は六万巻の法蔵にもとめたのである。その結果が、

「其の後九箇年を経て今年大蒙古国より牒状之れ有る由・風聞す等云々。経文の如くんば彼の国

よりこの国を責めんこと必定也、而るに日本国の中には日蓮一人当に彼の西戎さいじゆ（蒙古をさす）を調伏するの人たる可しと兼て之れを知つて論文に之を勸う、君のため国のため神のため仏のため内奏をへらるべきか、委細の旨は見參を遂げて申す可く候、恐々謹言。

文永五年八月二十一日

日蓮判

宿屋左衛門入道殿

（全集一六九ページ）

の決意となり北条時宗に書を送つては、

今日本国既に蒙古国にうばわれんとす。豈歎かざらんや豈驚かざらんや、日蓮が申すことお用いなくんば定めて後悔之あるべし、日蓮は法華經の御使い也、經に曰く「則ち如来の使如来の所遣しよけんとして如来の事を行ず」と、三世諸仏の事とは法華經也（全集一七〇ページ）の言葉となつたのである。如何に蒙古退治を自負せられたかが察せられる。

それは何故か、

「汝なんぞ釈迦を以て本尊とせずして法華經の題目を本尊とするや、答う上にあぐる所の經釈を見給え私の儀にはあらず、釈尊と天台とは法華經を本尊と定め給えり、末代今の日蓮も仏と天台との如く法華經を以て本尊とするなり、その故は法華經は釈尊の父母諸仏の眼目なり、乃至今能

生を以て本尊とするなり」(全集三六六ページ)

大聖人自身が生ける法華経なのである。この自覚におかれて、我れ日本の柱であり我れ日本の大船であり、我れ日本の眼目なのである。そしてまた日蓮が慈悲広大なれば南無妙法蓮華経は万年の外未来迄もながるべしの仏の慈悲となるのである。

この末法下種仏法の仏さまは、南無妙法蓮華経——日蓮であるが故に、この時地涌千界出現して、本門の釈尊を脇士となし、一閻浮提第一の本尊この国に立つべしとの実現となるのである。

この本尊所立の国が、なんで単なる人間のあくなき野望の権化たる蒙古国なんぞによって亡びようか。世界未曾有の本尊所在国の威光を示すためには蒙古襲来という兵革の災が必要なのである。しからずんば、日本人の眼をひらくことができないのである。末法万年の衆生もかかる厳粛な事実をみて、はじめて、その大聖人の下種仏たる由縁を知ることができるのである。大聖人は自ら書かれている。

「仏法の邪正乱れしかば王法も漸くつきぬ。結句は此国他国にやぶられて亡国となるべきなり、此事日蓮独り勘え知れる故に仏法のため、王法のため諸経の要文をあつめて一巻の書を造る。よつて故最明寺入道殿に奉つる。立正安国論と名づけき、其書にくわしく申したれども愚人は知り

難し」(全集二七一ページ)

大聖人が立正安国論を著述された文応元年こそ日本に來襲の総大将たる蒙古国王フビライが即位をした年であることも、またさかのぼって建長五年四月二十八日は大聖人の宗旨建立の日であるが、その建長五年に蒙古国が二十三か年費して古高麗を亡ぼして、高麗国の親政をにぎり、高麗国の諸処に蒙古の代官をおいて、日本襲來の態勢を整えたのが、実に宗旨建立の年であった。また大聖人が、蒙古來襲を予言した書、立正安国論を著述されるために駿河の国の岩本の実相寺に一切経を閲覽された、正嘉二年の年は、宋国への攻撃を蒙古が始めた年であった。彼我对照して話をすすめたら、意外な一致が沢山あるが、既にのべたことであるから之を略そう。

「この故に蒙古の襲來は既に決定せるところであるが、金吾殿、安心せられよ、この日本国は日蓮がひかうればこそ必らず安泰ですぞ、それは、未曾有の本尊がこの国にたつからです」

金吾は大聖人にたずねた。

「……それは何時でございましょうか」

「時機か……左様、日蓮がこの佐渡の島におる間は、我が心中はともかくとして、世間から見れば、いまだ流人の身である。流人の身では、それをあらわしてみても、世間の眼からみれば、

笑いものである。金吾殿」

金吾は大聖人から声をかけられても返答に迷った。

「……………」

「金吾殿、今にこの越後の国司が、家来あまたつれて、この私に鎌倉にお帰り下さいといってくる日がききまずぞ、それからのこと」

「それはつ何時でございましょう。この佐渡の島に流されては、おそれ多くも、一天万乗の君にまします順徳天皇すら佐渡の土とられました。いまだ帰ってきた人のないこの流人の島、佐渡でございしますが、鎌倉にお帰りの国がくるのでしょうかお聖人さま」

「必らずその日がききまずぞ、頭の白い鳥がとんできたらなあ」

「御冗談を申される、頭の白い鳥なぞはおりません」

「そうかなあ、昔丹<sup>たん</sup>太子という人が秦の始皇帝の人質となっていた時に、鳥の頭が白くなったらかえしてやろうと言われたが、本当に白い鳥がとんできて、赦るされて国に帰ったと言う話があるから、とんでこないことでもないぞ、一年ぐらいまつたら、どうじや、四条金吾殿……」

呵々一笑せられる大聖人、この人が流人の身かと、その笑い声に、四条金吾は思わず我が耳を疑った。

(註一) 開目抄を人開頭という、大聖人が末法における我等の主師親たることを示す書なるが故に。

(註二) 本尊抄を法開頭という、末法における我等がたのむべき法即ち本尊を示された。

(註三) 北条時宗が兄時輔と甥の時章教時を殺した事件

(註四) 静岡県玉沢妙法華寺に現存、大小向うべしとは軍隊が出るの意味

(註五) 「元寇の新研究」竹内宏著

(註六) 対島の人二人を捕えていったことをさす



## 鎌倉帰還

「日蓮法師の一行は本当に五、六人の同勢か、そんな馬鹿なことがあるか」

「牟礼街道からの報告でございますから、間違いはありません。しかも峠の上ではつきりみたと申します。見通しのきく所ですから、人数のかくしようがありません」

「それが本当ならば、こんな大騒ぎは、一寸みぐるしいではないか」

「そうもいくまい、みな自分の宗旨を守るために集まったのだから……」

時は文永十一年の三月二十日、処は長野盆地の一大名利たる善光寺の書院である。真言宗、禅宗、念仏宗の宗徒が書院一杯にあふれていた。

「阿弥陀仏を誹謗する日蓮に、善光寺の門前を通させてなるものか。念仏を唱えれば、地獄におちるなどと、経文にもないことを説く、破仏の僧、日蓮に、どうして生身の弥陀仏を安置する、この善光寺平に足をふみこませて、なるものか」

「そうだそうだ」

二、三十の人々が一斉に声をあげた。

「まった!!」

と喊声かんせいをしずめる一声が、かかった。

「私は鎌倉極楽寺の良観上人とゆかりのある道観房と言うものです。只今どなたかが、この善光寺平だいらの土地を日蓮法師にふませてはならぬと言われた、なる程結構な考えだと思っておりますが、よく考えてみると、明日は三月の二十一日、彼岸の中日です。弥陀の名号をとなえて、弥陀の彼岸きしに達すべき彼岸の中日です。どうです。みなさん、その弥陀の名号を唱えれば地獄に落ちると、叫んで、自分こそ、自分の言葉の通り、佐渡の島で、地獄の生活をしてきた、日蓮法師を、生身の弥陀仏おわします、光明遍照門、定額山善光寺の門前で、地獄ならぬ、極楽に送つてやろうではありませんか」

暫らく、座中から返答がなかった。道観房は坊主頭の汗を手でふきとばすと、にっこり笑つて、後をつづけた。

「昔から佐渡の島にながされて、帰つてきた者は一人もおりません。佐渡の念仏門徒がふがいなかったのです、日蓮が明日ここを通るといふ事態じたいになったのです。佐渡在島中に日蓮を殺しておけばよかったです。だが、まだ遅すぎはしないのです。念仏の悪口を言った、日蓮を「身はここに心は信濃の善光寺」と日本国中の人々が、参詣できぬ人もふかく心に托しておる、この善光寺

の門前で、一つ往生して貰いたいと思うのです。鎌倉の幕府の方は私が引きうけます。どうです。善光寺平に引きよせて、しかも善光寺の門前で命を貰う、正々堂々とやるうではありませんか」

拍手が書院一杯になった。

「何故、念、禅、真言の宗徒が、斯くも大勢あつまったか、それは、生身の弥陀みだの門前を破仏の僧が通れる筈がない、その証拠をみるためにあつまりましたと申せば、同勢僅か七人に対し、二、三百人あつまったも決して不思議ではない、またおかしくもない、言いひらきがしやすいと申すものだ、どうだ、道観の善光寺平、日蓮ひきこみ戦術は……」

「うまい、うまい」

「賛成、賛成」

書院一杯に声が、うずまいた。

書院の庭の松は、白い砂に自慢の姿をうつして、この坊主共の騒ぎの外にあつた。

「長野市にある善光寺は信濃の善光寺にあらずして日本の善光寺である」と照会書に書きだすくらいだから有名なことは勿論である。本尊阿弥陀如来については、善光寺縁起には昔、印度ビシヤリ国の月蓋長者が、悪病流行の時、釈尊の命をうけて阿弥陀如来を祈って悪病がやんだので閻えん浮提金ぶだいじん（金の中で最高の金）で阿弥陀仏の像をつくった。其後一千余年後、この像は支那に伝わ

り、更に三百年後に百済に伝わり、その国にあること百余年にして欽明天皇十三年冬十月、百済王聖明、經卷仏具と共に我国に貢献したのが、如上の像で、我国仏法渡來の初の靈像であるとする。この後仔細あつて信濃の入善光が、この阿弥陀仏の像を難波の国から負つて帰り、信濃水内郡芋井の里にまつたのが、今の善光寺の起りである。併し歴史家は欽明天皇の朝、我国に伝えられたのは釈迦像であつて、弥陀像ではない。今の善光寺の本尊は、欽明帝の時ではなく、後に敏達天皇の時に、百済の仏工がつくつたものであるとする。但し、善光寺では「日本紀に釈迦なりといへり、これ恐らく世の人の暗記せし誤なるべし」という。又善光なる人の存在についても否定の説もある。治承三年一一七九年に善光寺がはじめて焼失したので源の頼朝が信濃の一国に命じて再興させ、建久二年に落成して以来、北条氏代々の保護があつたので、善光寺は鎌倉時代が最も隆盛であつた。だから聖人を要撃しようという各宗の僧侶があつたのも無理がない。善光寺は、元來善光の子孫が之に奉仕して十一代に及び敢て僧侶をもたなかつた。故に中頃迄は、一宗一派に属しなかつたので、皇室を始め庶民に至る迄も信仰した。現在では、一ツの寺が、天台宗と浄土宗とに属し、宗教法人法からみても不思議な存在になつてゐる。

一 一の谷の大聖人は既述の通り、開觀兩抄を始め、諸法実相抄、如説修行抄、顕仏未來記、当体

義抄、法華行者値難事、授職濯頂国伝抄、等々の著述をなされておるが、決してこれらの著述を平穩のうちになされておったのではなく、劍の林の中での著述であつた。

大聖人が一谷入道の阿弥陀堂の廊下にて、命をたびたび助けられたり（千日尼抄）とあるのをみてもわかることである。大聖人の身辺には常に刺客が徘徊していたことがわかる。一の谷に移つてからの方が、大聖人に対する庄迫は益々きびしくなっていた。それは塚原問答後、念仏の数珠をきる者がふえて、佐渡一国が、大聖人に帰依する状態となつたので、念禅真言の僧侶が騒ぎたてたのである。

日蓮房が佐渡にいたのでは、念禅真言律の寺は一軒もなくなつてしまふ。それを大聖人は種々御振舞御書にかかれておるから拝読してみよう。

「念仏者集まりて僉議す。かうてあらんには我等かつえ、死ぬべ。いかにもして此の法師（大聖人をさす）を失わばや、既に国のもも大体つきぬ（大聖人に帰依したことをさす）いかんがせん。念仏者の長者の唯阿弥陀仏、持斉の長者の性論房、良観が弟子の道観等、鎌倉に走り登りて武蔵守殿に申す。此の御房（大聖人の意）島に候ものならば堂塔一字も候べからず、僧一人も候まじ」（全集九二〇ページ）とある。

我等かつえ死ぬべし、念仏等の僧侶も一人もなくなつてしまふ、寺もなくなつてしまふぞ、折伏された念禅真言の僧侶の心中は、昔も今も人情には変りがないことが、大聖人さまの手で書か

れている。

かくて、道観等は工作こうさくして偽の御教書を手にいれると、大聖人御住所の前を通ったという理由だけで、法華宗の人を牢にいれたり、また大聖人さまに食料を御供養しただけで、謀叛にかたんしたとこじつけて国を追ったり、家屋敷をとりあげたり、ひどいのは妻子が牢にいられると言う事態迄ひき起して、大聖人を圧迫したのであった。

だが、大聖人さまもこれを黙してみておったのではなかった。

河野辺殿等中

大和阿闍梨御坊御中

一切弟子等中

三郎左衛門尉殿

謹上

日蓮

富木殿

という従来にない形で御手紙をかいて富木殿にあたえた。

「追って申す、竜樹、天親は共に千部の論師なり、但権大乘をのべて法華経をば心に存して口に吐きたまわず、此に口伝くでんあり、天台伝教は之れをのべて、本門の本尊と四菩薩と戒壇と南無妙法蓮華経の五字と之を残したまう……（略）各々我が弟子たらん者は深く、此の由を存ぜよ、設

い、身命に及ぶとも退転することなかれ。富木、三郎左衛門の尉、河野辺、大和阿闍梨、殿原、御房たち、各々互いに読みきけまいらせさせ給え」

と強い御指南があつて、最後に、

「文永十一年四月十四日

日蓮花押

一切の諸人これを見聞し、志あらん人々は互しに之を語れ」（全集九六五ページ）と書かれておる。

偽の御教書まで出して、良観達一派が、大聖人が悪行をたくらんでおると、佐渡で言いふらしておるから、法華宗徒はこの手紙をみたならば、大いに奮起して、互いにこれを語れとは、鎌倉中に評判して、幕府にも達するようにせよとの意味である。鎌倉では、この手紙をみて、大聖人の弟子を始め、門下一同が、大聖人さまの赦面運動に狂奔したことが察せられる。

さて、人法の開頭を佐渡でなされた、大聖人さまに、最早佐渡には用がなくなつて帰るべき時期がきていたのである。また、鎌倉の門徒だもの運動も効をそうした。

「いよいよ強盛に天に申せしかば、頭の白き鳥とびきたりぬ。彼の燕の丹太子の鳥の例、日蔵上人（註一）の山がらす、かしらもしろく、なりにけり、我がかへるべき時やきぬらん、とながめしこれなりと申しもあえず、文永十一年二月十四日の御赦免状、同三月八日に佐渡の国につきぬ。同十三日に国を立ちて網羅もうらという津にをりて、十四日はかのつにとどまり、同十五日に越後

の寺泊のつに、つくべきが大風にはなたれ、幸に二日程をすぎて柏崎につきて、次の日は国府につく」（全集九二七ページ）

と大聖人は光旦房御書に自ら書かれておる。

「そこを通られる法師をば、日蓮法師とみたが、あやまりはあるまい」

大聖人の一行が、善光寺の門前をよこぎろうとした時である。

侍が二、三人の家来をつれて、大聖人のゆくてをはばんだのである。

「いかにも、私は日蓮であるが……」大聖人は足をとめて、侍をみつめた。

門前といつても、善光寺の山門ははるかかなたにあつて、山門がこの街道をのぞんでおるといった方がよい距離である。善光寺の坂下といった方がよい場所である。今大聖人のたつておられる街道は、牟礼から豊野、吉田を経て善光寺を右にみて川中島に至る街道であつた。

「法師、あの門が目につかぬか、ここを何処と心得て通られるか」

「僧道をゆくものが、そのような御質問に、真面目で答えてたまるものではない、それ一同、こんな侍に構ってはおられぬ、行け、行け」

大聖人が叱咤されて、歩を運ほうとされた時である。



わあっという喊声が、坂の上にあがった。念仏禪真言の宗徒二、三百人が、手に手に武器をもつての喊声であった。

それは今にも、坂をかけおりて、大聖人にせまろうとしたのである。

侍はその勢を両手をひろげて、制止すると、大聖人に言ったのである。

「御房もみられる通りの勢いである、逃がれる道はないと思うが、どうじゃ」

「そうは思わぬぞ。何故のふるまいか知らぬが、誰か、話のわかるものを一人出して下さらぬか」

「日蓮法師が、末期に一言ひとこといいたいと申しておる、ききとどけてやるか、どうじゃ」

坂の上に向つて、侍が声をかけた。

「おう、ききとどけてやろう、儂わしがそこ迄ゆくから、殺さずにおけよ」

それは道観房の声であった。

道観房は勝ち誇った態度で、坂を一人悠々とおりてきた。

大聖人の前にたつた道観房は、じろりと一行七人の顔を、なめまわすようにして、ながめ終ると、

「いかに、日蓮、汝は、理由もなく、かかる乱暴に逢うと思うと、よい往生もしかねようから、みせてやるものがある、しかと拝めよ」

と言つて、道観房が、大聖人の前にさし出したものがあつた。それは次の如く書いてあつた。

「佐渡国ノ流人ノ僧日蓮、弟子等を引率シ悪行ヲ巧ムノ由ソノ聞エアリ、所行ノ企甚ダ奇怪也、今ヨリ以後、彼ノ僧ニ相隨ハンノ輩ニ於テハ、炳誠ヲ加ヘシム可シ、尚ホ以テ違犯セシメバ、キヨウミョウ交名（註）コヲ注進セラルベキノ由候フ所也。仍テ執達件ノ如シ

文永十年十二月七日

沙門觀患上

依智六郎左衛門尉殿

「どうだ、この御教書をなんとみるか」

道観は、大聖人の両眼をみたが、大聖人がぐつとにらむと、二、三步後ずさりをしたが、口だけはまだ達者であつた。

大聖人は背後うしろをふりむくと、

「日興此の者に、こちらにも拝ませてやるものがあるう、しかとみせてやれ」

声に応じて、日興は懐中からとり出すと、黙然として、道観房の眼前に、両手をもつてひろげた一通の状文、それは次の如くあつた。

「日蓮法師御勘氣ノ事免許セラレ候也

文永十一年二月十四日

藤左衛門入道殿

行兼 在判  
消長 在判  
行平 在判  
光綱 在判

「どうだ、この状をなんとみる」

「そんなものは偽せもんだ」

と道観房が叫んだ。

大聖人はその声をきくと思わず失笑せられた。道観房は冷汗をかきながら、

「なぜ笑う、なぜ笑う」

とみえをはりながら叫んだ。

「この状文を国府に示して、この街道まできた日蓮である。そしてその方がもつ状文の沙門観恵とは、武蔵守宣時の家人（秘書役の）入道であることも当方は承知だ。それは宣時が、こしらえた真赤な偽物だからである」

「そんなことはない。だいそれたことを申す坊主だ」

「貴様も坊主ではないか……」

大聖人が答えたので、大聖人の一行の中から嘲い声わらがどうつと起つた。

道観房は、

「もはや問答無用じゃ、日蓮坊主、生身の弥陀の門前で、見事な往生をとげたがよい」

それつと、坂の上の同勢に合図の手をあげた。大聖人の一行中、日興と日頂は思わず、笈を肩からおろすと、その中に手をいれた。

「兩人ともなにをする。あの人数に手向えば火に油をそそぐようなものである。静かにせられい」

大聖人の御言葉であった。笈の中には、刀がひそまれていた。その刀は今年の正月に北条弥源太（註三）より佐渡の国にあった、大聖人に贈られた太刀が、一振りづつかくされてあったのである。

わあつと喊声をあげて、念仏、真言禪の宗徒たちが、阿弥陀仏の仇を殺してしまえと、殺気だつて、坂をおりようとした。

この時、街道の前方から侍をのせた一頭の馬が蹄の音たかく飛んできた。

「どけどけ、当国の領主、村田大隅守、手勢三百人を率いて、只今、到着……」

その声が終るか終らないかの中に、四、五頭の馬にのつた侍達が、またまた到着した。

「日蓮法師に、手を出すものは、我等、村田大隅守の家人が引受けた、さあ、かかつてこい……」

坂の途中までおりてこようとしたり、念禪真言等の善光寺にたてこもった宗徒に向つて、勢もよく大隅守の家人達は、馬をのりいれたのである。忽ち前にもました喊声が、善光寺の門前に上つたが、それは不甲斐なくも善光寺の門をめがけて逃げてゆく、念禪真言の宗徒勢の情けない声であつた。

大聖人は、何事もなかつた如く次のように書かれておる。

「最後の国府、信濃の善光寺の念仏者、持斎真言等は雲集して僉議す。島の法師原は、今までいけてかへすは人かつたい也。我等はいかにも生身の阿弥陀仏の御前をば通すまじと僉議せしかども、又越後のこようより兵者どもあまた日蓮にそいて、善光寺をとをりしかば力及ばず、三月十三日に島をたちて、同二十六日に鎌倉に打ち入りぬ」(全集九二〇ページ)

(註一) 「後拾遺和歌集」に歌はあり。但しこれは増基法師なり「御正本ニハ仮名ヲ以テゾウ上人ナド之レアルガ、後人私ニ日藏トカケルカ」本化聖典下二五七八ページ。

(註二) 上進書に数多の人の名を記した書付

(註三) 北条氏の一族であつて、北条時宗大叔父と言われる。大聖人に文永十一年正月、刀二口を贈る。その返事が弥源太殿御返事



## 殿 中 問 答

### 一

「日蓮法師は明日、殿中に参上するとの返事であるか」

「さようでございます」

家司の平左衛門尉頼綱が答えた。

時宗は言葉をつづけた。

「あの、日蓮法師が、父時頼入道殿に、南条左衛門の手をへて面会申したのが、今を去る十四、五年前（註一）ときいておるが、その時より、他国侵逼の難ということを申しておったとか、それが蒙古襲来ということになるうとは……」

左衛門尉頼綱は、時宗の言葉をうけると、返事のような、また独りごとのような言葉をつづけた。

「私も念仏の一門徒、文応元年より、彼を目の仇として、まず手始めは、日蓮法師が立正安国論を故最明寺入道殿（時頼のこと）に献上した日より忘れもしない四十一日目の八月二十七日に、手勢三千人をもつて、夜打ちをかけましたが、火遁の術でも、心得ておったか、彼の法師は無事に逃がれてしまいました。不思議な法師でございます。殿にはまだその時は僅か十歳の御時ですから、御記憶はうすいと存じますが如何でございましょうか……」

「……………」

子供扱いにされても、時宗はいかんともすることが出来ない、だから時宗は子供の時分から、此の家司の言うことは一応は、だまつてきくことにしていた。この頼綱は前にもふれたことがあるが、時宗の父時頼、時宗の長男貞時と、三代三十余年家司の職をさらず、遂には我が子を將軍に立てようとの野望を抱き、その陰謀露顕して、父子もろとも殺されたのが、宗祖滅後十二年の永仁元年四月二十二日のことであつた。

さて、北条一門において、危うくは執権職をもしのぐ頼綱の言葉に、彼がなにを言い出すか時宗にとつては、だまつてきいておる方が得であつた。

文永十一年の三月七日、処はたそがれどきの、時宗の書院である。

雨を催すのか、落花した桜の花びらをしきつめた池の面に、時々、鯉のとびあがる音が、静かな宵の沈黙しじまを破るのだった。



頼綱にしてみれば、今年二十四歳の時宗は、執権職には違いないが、十五年も家司をつとめて  
いる自分からみれば、まだまだの感があつたのはやむを得なかつた。

「伊豆の伊東に三か年の流罪を申しつけられて、もはや、幕政に口を閉じるかと思ひました彼の  
法師は、却つて逆となり、愈々蒙古襲来を唱えて人心を攪乱いたしますので、遂に竜の口に斬  
首しようとしたのに……」

「頼綱、この時宗はいつも十歳ではおらんぞ、十八歳にして執権職となり、本年は二十四歳じゃ、  
政道の曲非ぐらひは心得ておるぞ」

頼綱が如何に年齢を重ねたことを誇つてみても家司は家司即ち執事であつて、最後の決定は執  
権職にあることを時宗は十分にわきまえていたのである。但し時宗にも弱点はあつた。それは自  
分の母であつた。母は極楽寺を建てた北条重時の娘であつたので、極楽寺の良観がその辺のこつ  
をよく心得ていて、こと日蓮法師に關しては、決して幕府を通さずに、じきじきに母親に訴えて  
いた。今鎌倉の生き仏と言われる良観に、涙をみせて訴えられると時宗の母親は理性を全く失つ  
て、時宗が、出した命令さえ、とり消しをせまるのであつた。

時宗が、文永八年九月十三日、大聖人に対して、直々に「この人はとがなき人なり、追つて許  
るさるべき人である。特に叮重にせよ」との直筆を、大聖人滞在の、依智の里に送つたことがあ  
るが、これも、良観の運動が、時宗の母親や、直接その役にあつた、武蔵守宣時（佐渡の領

主)等の心を動かして、大聖人は、佐渡の島の流罪に、約二十日間後にとうとう決定したのである。母親には、頼綱以上に、時宗が子供にみえ、自分の意のままに時宗は動く、また動かさねば、念仏がつぶれるとも思っていたのである。

然しながら、今時宗と対談をしている、頼綱はその胸中文永八年の竜の口の時とは、天地雲泥の相違があった。

というのが、頼綱も亦竜の口の経験者であった。太刀とり依智の三郎が倒れ臥すのも、この眼でみたのであった。不甲斐なくも、自分自身も、あの大変動に驚ろいて、四、五丁ばかり、馬もろとも思わず逃げだったのであった。それに呼応するが如く、殿中より首きるなどの命令に接したのである、実に不思議と言わざるを得ないのが、日蓮法師である。

日蓮法師の不思議はまだそれだけではなかった。自界叛逆の難は、日蓮法師を佐渡に流がして目百五十余日目で、鎌倉と京都に起きた。また、頼綱は、佐渡の領主宣時が、良観に泣きつかれて、私の御教書を三度も下して日蓮法師の命をうばおうとしたことも知っていた。だが、三度目の偽の御教書は、不思議な法師日蓮にその写しが何処をどう通ったのかその手に入ってしまった、最後は日蓮法師の鎌倉の檀徒にその偽御教書の写が到着したからたまらない。以前から、大聖人の赦免運動は鎌倉にもあったのであるが、それは大聖人からさしとめられていたのである。それが、今度は当然となった。立正安国論を文応元年に献上した時の寺社奉行であった宿屋左衛門も

この時分には最早強信者となっていた。また北条時宗の大叔父にあたるという北条弥源太も佐渡の大聖人に文永十一年に立派な刀二振をおくつて、「殿のおもちの時は悪の刀、今仏前へまいりぬれば善の刀なるべし」（註二）との御返事をいただいておる程の信者である。そのほか、富木、太田、曾谷、四条、池上、南条等の幕府に相当の位置をしめる武士の信者達がいた。この人たちが、大聖人の激励によつて、偽御教書を示されて奮起したのが、功を奏して、文永十一年二月十六日の佐渡の赦免状となつたのである。だが、このことは、頼綱にとつてまだまだ驚ろくべきことではなかつた。実はもつと恐ろしいことが頼綱の胸をうつたのであつた。

ものごとは突然起こるように見えるが、実はそうではない。遠因、近因があり、一つのことも起こるべくして起こるので、さぐつてゆけば根深いものである。浜辺に松の樹を植えて十年たつても一向にのびぬので、研究してみたたら、松の木はけつして砂に根をはるのではなくて、砂の層を通り越して地層に到して、その地層にしっかりと根をはつて、それからようやく砂上の木が伸びるといふことで、砂の層をつきぬける迄は二十年もかかつたと言ふ例もあるくらいである。地上だけの松の木をみておれば二十年間のびもしなければ太くもならない貧弱な松の木であるが、実はどうして、みえないところでは必死の苦勞をしておる松の木である。

余談はさておき、頼綱の大聖人に対して一番の恐怖を感じたことは、聽ては自分が北条の天下を狙うと心中ひそかに期することがあったからである。文永十一年から丁度二十年後の永仁元年頼綱はその野望のために殺害されて相果てたが、今はその結果は眼にみえずただ野望に身をこがす時代であつた。

その頼綱が、明日は大聖人を殿中にむかえて、厚遇をもつて接し、頼綱が不思議な法師とする大聖人から、きいてみたいことがあるのである。だが、四年前には、その大聖人を裸馬にのせて、鎌倉中を引き廻わしたのは、この自分であつた。なんとという変り方であろう。ききたい前に、頼綱が氣になつてしようのないことがある。

それは大聖人が、文永十一年正月二十三日の申（午前四―五時）の時に、西の方に二の日出たことを佐渡の国の人が大聖人に伝え、また、二月五日には東方に明星二つならび出て、その中間三寸ばかりであつたと言ふことをきいて、これは、二つの並び出るとは、一国に二人の国王がならぶ相である。王と王との鬭諍である。星の月日をおかすのは臣が王を犯かす相である。日と日と競出づるは、四天下一同の諍論である。

明星ならびに出づるは太子と太子との争いであると予言されたことであつた。（註三）

この大聖人の予言は、脛すねに傷もつ頼綱にとつては、驚天動地の言葉であつた。家司の役目を務めて、二十年になんなんとしている。蒙古襲来をよいことにして、九州、四国、中国等々の守護

地頭は、殆ど頼綱の手で首をすげかえて、既に天下の大勢を、二十四歳の執権職時宗などの手の及ばぬところにおいておる頼綱であった。だから、天下を動かす予言をするような妖僧と正式に逢つてみたかったのである。

時宗自身は頼綱とは全く逆であつた。大聖人を偉徳のある傑僧として遇し、まずそのよつてきたる法華經の法話を伺い、そして十四、五年も蒙古襲来を唱えつづけその為に、一生を台なしにした僧侶、然し蒙古は現に使を四、五度もよこしておる。蒙古襲来は事実となつたのだ。始めは蒙古襲来を言つただけで、人心攪乱罪で伊豆の伊東に流がされた。その生活も苦にせず、今もつて叫びつづけておる。これは、我が身のために、或いは栄達のためにのみ蒙古襲来を唱えておるのではないことがわかつたのである。

それに引きかえて、何故、念禪真言律等にも世の尊敬をうける僧侶大徳が、鎌倉中に沢山いるのに、蒙古襲来を口にしないのだろうか。同じく仏法を学びながら蒙古については使が何度もきておるのに、蒙古襲来をなぜ日蓮法師のように叫ばないのだろうか。不思議だ。念禪真言律等の宗旨の僧侶に、こぞつて日蓮法師を仇敵とするが、蒙古襲来を一言も口に出さない。こんなこの世の中の大事な出来ごとに、わざと眼をそむけて、念仏さえ唱えておればよいというような宗教が、国民全部が国難来におびえておる今の世にあつてよいものだろうか……

時宗は思わず膝を叩いた。

頼綱は自分の心中をみぬかれたかと思つて、びつくりすると、

「殿、なんでございますか……」

と問うたが、時宗はその声を無視して沈黙を守つていた。何時の間にやら、部屋には灯がはいつて、みがかれた床ゆかの上に、一畳の台座に正座した、青年宰相の姿をうつしていた。

時宗は、かすかな微笑を面に浮かべていた。頼綱は自分の心中を顧りみて、言葉をかけるのをやめた。

時宗の膝を叩いたのは頼綱の心中を押しはかつてのことではなかつた。自分の政治に関する批判をやつて苦笑をしたのであつた。時宗が執権職となつたのが、文永五年の三月五日であつたが、四月には日本中の社寺に蒙古調伏を祈らせた。そういうと簡単だが、神社でも寺でも、けつして只で祈禱をしてくれるものではない。大きな神社には大きな寄進を大きな寺には過分な御布施をつつまなければならぬ、仏家では布施なき経よむべからずの掟さえあると云うではないか。蒙古襲来の声が強くなると何時でも、全国の社寺に御寄進申すのは、時宗自身であつた。すると、この不安定な世の中で、一番安心して飯を食つておる人間と言へば、蒙古襲来の祈禱をたのまれてお経をよみ、祝詞のりとを上げておる人々ではないか、鎌倉を例にしてみても、はつきりとわ

かることである。道端に埃ほこりにまみれてふだんは誰も気にしない祠ほくらでさえ、蒙古調伏の祈禱令が發布されると、ちゃんときれいに花が供えられ、供物が上げられている。そして御祈禱料が当然のように催促されているのである。

大きな寺ではその御祈禱料がたまって、利子をとって金貸しさえしておるのがあり、妻子をかまくまうなどは当然のこととなっていた。かくすは上人という言葉すらあるくらいである。僧侶の墮落はなにも鎌倉時代に始まったことではない。

遠く神龜天平の時代からである。天平六年には太政官符をもつて、諸寺佛像経巻を穢きたないところ所に置き、風雨にさらすを禁じておる。俗に信は莊嚴より起こると言うから、これは僧侶に信心のないことを示した太政官である。僧侶で布施の二重どりをする者が多く、ひどいになると寺の住職をしないだけで、毎年正月の官供をうけとるもの、空名を二か寺にあげて、官供を食るものがあった。

また平安時代というと叡山や奈良の僧兵を思い出されるが、実は僧兵の兇暴は平安末期よりも、鎌倉時代に入って更に甚しかったのである。正倉院文書には月借錢の証文があるが、これは質をいれて銭を借りる、今で言えば質札のはしりというところである。貸主は寺院で、借主は写経生が多い。月百文につき十三文乃至十五文、一年に十五割六分或は十八割という高利で、その質物は布綿、衣服、家地、田或いは人身までもあった。それがついには在家にまで金を貸すよう

になった。

また俗人に、錢を貸して、妻子を養っていた奈良の僧某が、その娘の聶に錢を貸したが、その聶が、数年後、元金だけ返却して利子を支払わなかったので舅の僧某が利子の返却をせまった処が、聶はそれを怒って、舅の僧某を、海になげいれてこれを殺そうとしたことなどがある。(註四)

大安寺では修多羅分錢しゅたらかんせん、成実論分錢じやうじつろんぶんせんというのがあつて、これを貸してその利を計りまた菓王寺くわじやう(勢多寺)には菓分酒くわぶんしゆというものがあつて、それを貸して利子をとつていた。このような寺の経営法は鎌倉時代にもうけつがれていたことは当然で、鎌倉時代になつて、ふえたものに寺のばくちというものがあつた程である。

鎌倉でも、嘉禎元年(一一三三)鎌倉中僧侶の兵杖へいじやうを帯ぶることを禁じ(註四)、延応元年(一一三九)四月、僧侶が頭巾づきんをして鎌倉の街を歩くことを禁じ、仁治三年(一一四二)三月にも、鎌倉中の僧徒の帯劍を禁じ、刀劍を帯ぶるものは、見つけ次第にこれを抜きとつて長谷の大仏殿におさめさせてしまった。以上のように、度々命令が出たということは、その法令が、いく度、処々の貫主や別当に出しても行なわれなかつたことを証明するものである。

以上のように僧侶の墮落した時代である正嘉年中(正嘉は二年迄。大聖人は正嘉二年岩本実相寺にこもり、立正安国論執筆の年)に親鸞が門徒に示した二十一個条を善性が集録したと言われ、るものの中に、念仏門において十悪五惡に生きるを信知して小罪を犯さざること、人倫を売買し



て並に牛馬の口入を留むべきこと、他人の妻女懐抱をとどむべきこと、諸々の博奕、雙六をとどむべきこと、念仏勤行の日男女同座すべからざること、同じく勤行の日、魚鳥ならびに五辛食すべからざること、等々を戒めておるが、これは即ち念仏にかこつけて以上のようなことが、当然として行なわれていたことを示すものである。

時宗は当時の僧侶の墮落を考えたが、樹下石上をこととする僧侶に墮落はないだろうが、錦衣玉食に身をかためた僧にはそれがある。考えてみれば時宗がその墮落に片棒かついでいたのである。それは民の膏をしばりあつめて、仏前にともし、蒙古退散の御祈禱を願つたものは時宗自身ではないか、民の膏を半分だけ仏前にともし、いや三分の一をともし、懷中をこやしているのは鎌倉の僧侶であつた。鎌倉の僧侶を否な全国の神社の神官僧侶を墮落させたのは、蒙古退散の御祈禱をたのむ、この時宗ではないか。

青年宰相時宗の額には脂汗がにじみ出ていた。結び灯台の灯りが、それを木彫のように浮び出していた。

日蓮法師は蒙古襲来を文応元年より叫びつづけて、伊東に、竜ノ口に、佐渡にと、苦難の道を歩みつづけて十五年。念禪真言律等、鎌倉に瓦をならべて、その大伽監を誇こる僧達はこの十五年間、国を患えている。言葉は一言ものべず、蒙古退散の祈禱料をたんまりためて、たらふくと食つておる。しかもそれは民の膏血ではないか、どちらが本当の僧侶であろうか。生き仏と人か

らあがめられる極楽寺の良観すら、時宗の母親になきついで種々と策を弄うし、遂には、武蔵守宣時の了解のもとに、偽の御教書を三度も出している。それもただだ佐渡の国に流されたものは昔から帰ってきた例がない。よって日蓮を殺してしまえ、弥陀の仏敵を殺せよという合言葉にすぎなかった。

どちらが本当の僧侶であろうか、時宗は本当に迷った。念禅真言律宗の僧侶が真剣にものを考えるのならば、日蓮法師は立正安国論という論文を幕府にささげて、それより四箇の格言を唱え、蒙古襲来の国難を告げておるのである。単なる思いつきで唱えておるのではない。しかるに念禅真言律の諸宗の僧侶は、蒙古退治の祈禱料こそ懐中にたんまりいれることはしても、立正安国論を破するところの論文一卷すら書いてはいない（註五）。日蓮が論文をもつてするならば、諸宗もすべからくまず論文を幕府にささげてこれを堂々論破すべきではないか。ところが、金のはいる蒙古退散の御祈禱はわんさと引き受けても、学問をもつて立正安国論を破す論文は一向に幕府に提出されていない。なんと諸宗の僧侶のずるさがこれでもつてわかるではないか。

しかも、日蓮法師が正式に公場での問答を申込みば、そろってこれをうまく逃げて、竜ノ口という未曾有の事件に追いこんだのである。

幕府は大聖人を伊豆の伊東に流罪したが、公文書にはなんにもものせていない。竜ノ口の処刑も、佐渡の国への流罪ものせていない。文応元年の安国論献上も、伊豆伊東流罪の弘長元年（一二

六一）も吾妻鏡の存する時代であるが、何処にもおせていない。だがこの事実を疑う官学派の人もない。官学文献尊重の人なら、立正安国論提出、伊豆伊東を消抹するかも知れないが、これは大聖人が御自身で書したものが残っておるので何人も否定ができないのである。

吾妻鏡は従来信用すべきと絶対視されていたが、現在では幕府の手で書かれたから信用が出来ない。むしろ今迄信用されていなかった北条九代記が信用されている。北条九代記には日蓮上人宗門を開くとしてその生涯を記録している。

だが、幕府としては小松原の法難も、伊豆の伊東の配流も、しかも伊東の配流には取調べは一回もなかった。竜ノ口では取調べがあったが、それも大聖人の御自筆の書面によって知ることが出来るので、幕府の公文書には何等の記録もないのである。

幕府は大聖人を見遇すること、市井の無頼の徒の如くあつたのである。竜ノ口の処刑も、佐渡配流ということも、幕府の記録にのっていない。記録しないということはその人格を全くみとめないということである。

時宗はこれ等のことを考えると、明日なんのくればせあつて大聖人に逢うというのであろうか。口をきくことさえ恥しい話である。蒙古襲来を叫んで国を患うるものが、首の座にすわり、佐渡雪中の生活三か年を送った。蒙古襲来の怨敵退散を祈禱する僧侶は、時宗から莫大な祈禱料をせしめている。この矛盾、これが政治というものだろうか。政治というものは、人民を救うという

仮面を被つて、人民の膏血を吸つておる奴輩の群をいうのだろうか。自分の勢力ののびることを追求めて、正しいことを言う人間を徹底的にいじめぬいて喜んでおる人の群れを政治家といふのだろうか。青年宰相はそれ程腹わたはくさつていかなかった。明日日蓮法師に逢うことが出来るならば、腹の底から話がしてみたいと思つた。

頼綱の考えは時宗とは全く反対であつた。それは、日蓮法師の不思議な予言に対する自分の思惑をそれとなく打診してみたかつたのである。それは前にもふれた、王と王との争い、太子と太子の争いであつた。これは自分の心中をみぬかれたような予言であつた。平の左衛門頼綱の名は、大聖人の法難の度毎に出てくる姓名であるが、大聖人と殿中で対面以後は、回想の人物として御書には出てくるが、現実の人物としては、この以後はでてこない人物である。事実、頼綱も、大聖人に対しては、徹底的な圧迫者として名を大聖人の伝記中に残したが、殿中においては、今迄のことはすっかり忘れたかの如く、大聖人に対して好意をもつて接しておるのである。

鎌倉の大臣山に夜鳥の啼く声きがきこえて時宗の書院は、ただ灯の油を吸う音のみがきこえておつた。時宗は明日の天下を患れえる思いで、頼綱は天下を伺う下心でもつて大聖人に接しようといふ四月七日の夜だつた。

因みに、法華取要抄における、二つ日の並び出づるは一国に二の国王ならぶる相世、王と王との闘争なり、星の日月を犯すは臣の王を犯すの相なり、明星ならび出づるは太子と太子との諍

論なりとは、大聖人滅後五十七年にして起つた南北朝の斗いの予言、臣の王を犯すは、足利尊氏の後醍醐天皇を攻めて大塔宮を害せしことを指し、太子と太子との争いとは南北両統の争いをさすといわれる。

それは、皇統の中に大覚、持明の二流を生じはじめた端緒は、宛も文永九年に開け、後嵯峨上皇崩御の際、両統更立の遺詔があつたことによる。

そしてこの文永十一年正月には龜山天皇の御隠居に際して、更立の約の如くに持明系たる後深草系を立てずして、大覚系たる自分の皇子に讓位があつたのである。太子と太子と相争う先兆が既にあらわれておつたのを大聖人が看破されていたのであると申上げねばならない。(註六)

(註一) 御伝土代 聖五七八ページ

(註二) 富士年表 上三三二ページ

(註三) 法華取要抄。全集三三三六ページ

(註四) 辻善之助著「日本仏教史」

(註五) 立正安国論を破した論文は今尚出ていない。

(註六) 姉崎博士の「法華経の行者日蓮」

「天下国家を祈るは法華經にあると、即ち天照大神御托宣に曰く、毎日法華四句の文を誦して、百王の皇胤を守るとか、言われて、いずれの宗においても、法華經は尊い經文とされ、拙者も法華經を誦誦しておるが、いずれの個処をさがしても、禪天魔という文字はのせておらぬが、日蓮法師、それを伺いたい」

質問の第一声が放たれた。

文永十一年四月八日、仏生日である（註一）所は鎌倉の殿中、

日蓮大聖人は、佐渡四か年の流罪の生活が赦免となり、しかも、佐渡からの帰途は、行きとは打って變つて、国府国府の役人が三、四百人の同勢をかり出して、危険と思われる場所を嚴重に守護申し上げての鎌倉入りであつた。

今朝、比企谷の大聖人の新しい草庵をでる時、鎌倉中の信徒全部が早朝からつめかけて、大聖人にお祝いの言葉を申し上げたのである。柳営（將軍の営所、幕府、支那漢の將軍細柳陣營の故事より出す）対面ということは、一宗が公許になる前ぶれとみてよい。今日以後、大聖人の門下は晴れて、鎌倉の街中で、南無妙法蓮華經と唱えて、朝夕の勤行をつとめてよいのである。大

聖人門下にとつて、こんな嬉しいことがあるうが、しかも今日は四月八日の仏生日である。お釈迦さまの生れた日であることは勿論だが、大聖人さまの内証を知る弟子及び四条金吾等々は、違つた意味で、胸をふるわし、南無妙法蓮華經と唱えていたのである。

日蓮一人南無妙法蓮華經と唱えたりと、大聖人は言われたではないか、お釈迦さまは南無妙法蓮華經と唱えてはいない。釈尊は法華經誇法の者を治し給わずと言われ、末法の始に妙法蓮華經の五字を流布して、日本国の一切衆生が仏の下種を懷妊かんにんすべき時なりと言われておる。即ち下種仏法の新しい仏さまが本日生れて、將軍家にゆくのである。仏さまの教が公許されない筈がない。常日頃から大聖人さまは「日蓮は日本国の人の為には賢父なり、聖親なり、導師なり」と言われておる。これこそ下種仏の宣言ではないか。釈尊の仏法がなくなった時という、今がその時代である。鎌倉中をみても街には南無阿弥陀仏の称名の声のみきこえ、寺には阿弥陀仏が飾られ、観音が、薬師が、不動明王が、大日如来が、祭られて、釈迦仏を祭る寺とは一つもない。正しく釈尊の仏法が滅失した証拠である。

白法隱没とはこのことを言うのである。末法は下種の時代で、神力品には、斯人行世間能滅衆生闍とある。斯の人とあつて仏とはない。この人が、衆生の苦悩を救つて下されること、あたかも、日月の如しというのである。大聖人は自ら日蓮と名のられた。明らかなること日月の如し、清きこと蓮華の汚泥に染まざるが如し、日蓮と名のることあに自解仏乘にあらざやと言われ

ておる。

末法における下種の仏とは、日蓮大聖人のことなのである。

されば、四月八日、早朝大聖人の庵室に群集した信徒に向つて大聖人の御言葉があつたのである。

「私は貞応元年の二月十六日に生まれて本年五十三歳であるが、佐渡に流されては、皆さまも、もはやこの日蓮が、鎌倉に帰るとは思わなかつたであろうが、今こうやって、皆様方と話をしておる。まことに今日の存命不思議と思ほしめせとは、このことである。しかも佐渡の赦免状の日付は、文永十一年二月十六日で（註二）あることも不思議である。竜ノ口に命をすてたかと思つたがさはなくて、佐渡においては法門上重大な仕事をしてのけてきた。伊豆、佐渡の配流の生活を思う時、文永十一年の二月十六日、私の生れた二月十六日が私の赦免状の日付である。三度この日蓮は生れ変つたと言っても差しつかえがない。だからその精神をもつてここではつきり申し上げるが、日蓮の法門は佐渡以前と佐渡以後とは、仏の爾前教と実教との相違のように心得ていただきたい。」

この言葉をきいた時、庵室の門下一同、感嘆の声でどよめいた。群集の中の四条金吾などは、この言葉に接すると思わず、合掌して大聖人さまこそ下種の仏さまと心にきめて、ひそかに南無妙法蓮華經と唱えるのであつた。



「時宗殿、頼綱殿に面談するのは、この日蓮一人ですから殿中への御見送りは絶対にお断りいたします。勝ち誇った顔で、日蓮が鎌倉の街をゆくと念仏徒に思われては心外です。見送りはなりませんぞ……」

大聖人はめだたぬ従者をつれて、幕府にむかわれた。

幕府は東西の門口は二町半南北は二町、その内には寢殿、対屋たいのや、大御所、小御所、常の御所があり、東西南北に各々の門があり、今日でも東御門みかど、西御門の地名が残っておる程の壮大さで、鎌倉幕府を象徴するにふさわしい質実で豪快ごうかいな建物であった。大聖人はおそれることなくその門に入つていったのである。時に文永十一年の四月の八日であった。

「法華経のいずれのところにも、禪天魔の文字はないと言われますか」

「左様である。ここに拙者法華経の経巻を持参した。禪天魔とあるところをはつきりと示していただく」

なる程、列座の侍の前には、それぞれ机が置かれてあつたが、その侍だけは机の上に経巻らしきものが置かれてあつた。余程の熱心者ともみえ、またことと次第によつては、大聖人をやりこめてやろうという気概がみえた。

「その前におききたいことがあるが、禪の起こりは如何」

「今更、そのようなこと答えるも馬鹿々々しいが、法師が尋ぬるから、これも問答の仕方と心得て答えよう。そもそも禪の起こりは、釈尊滅度の時、金棺より御手みてを出して、迦葉に、教の外に伝える法ありとして、拈華微笑し、迦葉これを見て会得してまた微笑すと……」

「わかり申した。では、御貴殿の机上にある法華経の中の卷の六の第十六、如来寿量品を開けてみられよ、その經典にはなんとあるか、私か読誦してみよう、一切世間の天人及び阿修羅は、皆、今の釈迦牟尼仏、釈氏の宮を出でて伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提あむくさんぼだい（註三）を得たりと謂へり。然るに善男子、我れ実に成仏してよりこのかた、無量無辺百千万億那由佉劫なり……」

大聖人の経文を誦する声は、音吐朗々おんととして、殿中一杯に響き渡った。

「この経文をなんと読まれるか、仏自ら仏を得ること無量百千万劫といわれ、方便して涅槃を現じ、常に此の娑婆世界に住して法を説く、我れ常にここに住すれども、諸々の神通力をもつて、顛倒の衆生をして、近かしと雖もしかもみえざらしむと、寿量品の偈にとかれておるではないか、かくの如く法華経の仏は寿命無量常住不滅の仏である。然かるに禪宗の仏とは、先き程、御貴殿が申された如く、釈尊金棺より拈華微笑とは、禪宗の仏とは滅度する仏をみる、これは外道の無の見解の仏である。しかも、御貴殿卷の第七の第二十三品、葉王菩薩本事品というのを開い

てとくと御覧じろ、ひらきましたか、ひらいたら一、二、三、四、一十、十一とめくつて一番最初の行をよく読んで御覧じなさい。「一切の如来の所説、もしくは菩薩の所説、もしくは声聞の所説、諸々の経法の中にもっともこれ第一なり、能く是の經典を受持することあらん者も亦復かくの如し、一切衆生の中において、またこれ第一なり。一切の声聞、辟支仏の中に菩薩これ第一なり。此の経も亦かくの如し、一切の諸々の経法の中において、最もこれ第一なり。仏はこれ諸法の王なるが如く、此の経も亦復是の如し、諸経の中の王なり」と書かれているではないか、これを御貴殿は文字通りによんだらよいのである。仏の金言である。我等は仰いで信じたらよいだろう。法華経は「於一切諸経法中、最為第一」と、これ程わかりやすいことはない。しかるに禪家においては、法華経は吐いたるつばき、月をさす指なぞと下しておるではないか、祖師は無用と言いながら、達磨大師をなんで本尊とするか、経文は指月なりと言つて経の無用を言いながら、何故に朝夕の所作に真言陀羅尼をよむか、首楞嚴経金剛経円覚経を誦誦するか、しかも眞の禪の法門を悟る機とは、祖師よりも伝えず、仏よりも伝えず、我として禪の法門を悟るを最もよしとする、法華経には禪天魔の文字なしと雖もこれこそ天魔の所説と言わざるを得ない、御返答いかが……」

四辺を圧する大聖人の言葉に、件の侍は顔を赤くして今迄みていた法華経の経巻を机の上に閉じるだけであつた。

「伝法記という書物にはこうのせてある。達磨大師が唐土にきたって、梁の国に至り、武帝は、朕は広く寺を造り僧侶を養成し、経を写し、仏像をつくる、その功德はどのくらいであろうかと問うた時、達磨は功德なしと答えたという。今鎌倉には建長寺円覚寺寿福寺等があつて、その寄進者の功をたたえておるが、達磨の口をかりてこれを言えは無功德と言ふことであろう……」

この言葉には、殿中の侍一人として表情を加えないものはなかった。佐渡四か年の配流の生活もこの法師にはなんらの影響も感化も与えないで、今叫んでおる言葉の調子は、小町の辻の説法の口調と少しも変ることなく、獅子の吠えるが如きおもかげがあつた。

「なお且つ、只今蒙古襲来はもはや日時の問題となつておるが、何故宋国が亡びたのか、禪宗が興隆して以後宋国は蒙古のために亡びたというこの厳肅な事実を、各々方は忘れておられるのか」

殿中森閑として、咳一つきこえなかった。

「では伺いたい」

これは入道姿の侍が、落ちついた口調で大聖人に尋ねた。

「念仏を唱えると地獄にゆくと、あんたは言うておるそうだが、本当ですか」

「本当です」

「今でも、本当だと本当に思っておるのですか」

静かだが、場内に失笑の聲が起った。

「南無妙法蓮華經をすてて、南無阿弥陀仏と唱えれば、身をもつて命ごいを致しましょうと、竜ノ口の刀の下で言われても、南無妙法蓮華經と唱えたこの日蓮です。今でも、念仏無間と心得ております」

「南無阿弥陀仏と唱える人の方が、日本中殆どですが、それでも、念仏は地獄行きと申されますか」

「今は日本中の殆どの人が、弥陀念仏をこととしておりますが、仏教を習うものは時と言うことを知らねばなりません。今はともかく今後は称名念仏の愚を悟つて、日本国一同に南無妙法蓮華經と唱える時がまいります。今大勢の人々がそうだからといって、是とすることは出来ません。南無妙法蓮華經はこの日蓮が、ただ一人唱え始めたものであります」

「では、お手前の発明だなあ」

入道姿の侍は、あざ笑うように大聖人を眺めるのであった。

「発明のお宗旨も自讃毀他しなければ、お上からお咎めもないのだが、念仏無間はどうも合点がゆかない、私も御覽の通り入道姿、家には立派な仏壇をこしらえ、隙さえあれば弥陀の名号を唱

えてあけておる老いの身だが、これが、地獄行きと言われたのでは、往生がしかねるとい  
もの……」

「焙烙千枚ならべましても、金槌一丁あればこっぱ微塵であるように、南無阿弥陀仏と妙法蓮華  
経とはことなります」

「どちらが、金槌で、どつちが焙烙じゃ」

「南無妙法蓮華経が、金槌でございます」

「無礼もの！」

入道はみるみる頭のとつぺんまで真赤になって、思わず小刀の柄に手をかけたが、背後の者か  
らその腕を抑えられ、大聖人を睨みつけるだけだったが、やがて真赤な頭のとつぺんから湯気が  
ほかほか登り始めたので、ゆで章魚だこ一丁あがりといった光景に、殿中の侍は思わず笑いを抑えね  
ばならなかった。

みるにみかねて、若い侍が、老人に代つての質問だった。

「年老りの心中も察せず、よくも申した、では念仏無間という世に七不思議な御法話を拝聴した  
いものだ」

「されば、耳をすませて、とくときかれない。念仏は無間地獄、阿弥陀経は読むべからずと申す  
ことも、日蓮の言葉ではございませぬぞ。それは阿弥陀仏という仏様が如何なる仏さまかを知

れば分かること、阿弥陀仏とは、釈迦如来五十余年の説法の内、さき四十余年の内の阿弥陀経等の三部経の中に説かれておる仏であります。この我々のすんでおる世界に生れてきた仏さまでないことを忘れてはなりませんぞ。処が、釈尊は法華経を説く時に、その序分である無量義経という経典において「善男子、我れ先に道場菩提樹下に端坐すること六年にして、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり。仏眼をもつて一切の諸法を觀ずるに宣説すべからず、所以はいかん。諸の衆生の性欲しょうよく不同なることを知り、性欲不同なれば種々に法を説き、種々の法を説くこと方便力をもつてす。四十余年には、未だ真実を顯わさず、是の故に衆生の得度差別して、すみやかに無上菩提を成ずることを得ず」と言われて、四十余年に渡つてとかれた、一切の経々を唯の一言で否定されてしまい、正宗たる法華経の第一巻において、「世尊法久後要當説真実、正直捨方便但説無上道」（註四）と言われたことは闇夜に大月輪の出現し、大塔をたてて後足代を切り捨てたるが如きものであります。しかるに、この法華経の文、顯然なるにもかかわらず、浄土宗の法然は、念仏に対して法華経を捨しゃ閉へい闍かく掘ほう（註五）とよみ、善導は（註六）法華経を雜行と名づけ、あまつさへ千中無一といつて、法華経を千人信ずるとも一人の得度者もないと書物に書いておる。処が、法華経第二に、もし人信ぜずしてこの法華経を毀誇せばその人、命終して阿鼻獄に入らん。また同第七の卷不輕品に、千劫阿鼻地獄に於いて大苦惱を受くとある。これをもつてみると、念仏を唱えることは法華経を謗することであるから念仏は墮地獄の根源と云うになんの不

思議があるのか……」

殿中にはうめくような声がして返答するものは一人もおらなかった。

「往生をするには、なにをもつて往生するかと言えば、法華経の力がなくて往生はできないのである。往生と言えば阿弥陀仏の極楽浄土しか、各々方は御存知ないと思うが、実は、阿闍あしやく仏の妙楽浄土、大日如来の密厳浄土、弥勒の兜率天、香積仏の香積浄土、文珠の離塵垢心浄土、薬師如来の淨瑠璃世界、舍利弗の離垢、迦葉の光徳、日蓮の意樂、須菩提の宝生等々浄土はいくらでもあるが、これらの浄土の考え方は、法華経にとくところの釈迦仏が、仮りに説いたところの浄土であつて、我等にとつて、直接の浄土とは、法華経の寿命品に明かされている、我れ常にこの娑婆世界にあつて説法教化すというのであつて、娑婆即寂光土の教義が打ちたてられるのである。各々方の坐わられておる、この土地こそ、各々方が、今日殿中にこられるためにふんできた大地こそ実は浄土であつて、東西南北いずれのところにも浄土はないのである」

「律国賊とは、天子將軍をも恐れぬ方言と心得るがどうじや、即ち今鎌倉中において諸民が、生き仏と仰ぎ奉る良觀上人は、そのなすことが、日蓮法師、貴僧の如く、口さばきばかりの空理空論ではないぞ、即ち飯島の津にて、六浦むつらの関米せまがをとつては諸国の道を作り、七道に木戸をかまえ



ては人別の錢をとり、その錢にて、諸河に橋を渡す、橋をかけること百八十九所、道路の修理七十一所、さらに井戸をほること三十三所（註七）と、またその良観上人の師匠たる叡尊上人は、弘長二年の二月二十七日、鎌倉にきたり、お上の御母君（時宗の母のこと）もまた故最明寺入道殿（時頼將軍時宗の父）も、ともども授戒をされた戒師である。その叡尊上人は、文永元年には、異国襲来の噂をきいて、八月六日に天王寺の金堂に於いて百座の仁王会（註八）を行い、五年正月には蒙古の牒状が到来したのでその難をはらわんがために再び天王寺に於いて修法し、昨年（文永十年のこと）の二月には後宇多天皇の勅を奉じて、大神宮に参籠して大般若経を転読しておるではないか、日蓮法師、蒙古退治は貴僧の専売特許ではないぞ、少しは遠慮し口をつつしんで貰いたい」

一 氣にまくしたてたのは中年の侍である。

「……これらの尊い上人がたの御祈禱もなんら利谷がないと申すのか、勅命を奉じて蒙古退散の修法をなす尊い上人の御祈禱がきかないと申すのか、叡尊律師は国師と呼ばれる尊いお方を国賊と言われるのか、返答を承け給わりたい」

一 膝のり出している質問であった。大聖人は思わずにつこりされて返答をした。併し御簾内の執権職時宗を始め、頼綱以下の同座の武士たちは、この大聖人の莞爾たる微笑に万感の畏敬を感じたことは勿論であった。

「御貴殿は、只今、良観上人、叡尊上人のことを申されたが、仏教の比較は人を規準として話をなされてはならない。即ち人が敬うから尊いというのではなく、その御方が如何なる法に帰依しておるかを標準にして、即ちその依る所の經典をもつて、比較対照せねばなりません。これを依法不依人、法によつて、人によらざれと言うのであります。先ず修法された仁王経や大般若経という経は如何なる経かを考えねばなりません。法華経の寿量品に、樂於小法徳薄垢重者と申す句があります、天台大師は、この小法と言うのは、華嚴経般若経、仁王経等々の法華経以前の経を指し、これらの小乗の経々を依経とする宗旨の人は、徳もうすく、垢というのは煩惱というところとでございますから、垢重、即ち煩惱欲も強いということをおるのです。きく所によりますと、昔の戒律を守られた聖者は殺といつて草木をきるという言葉や、収と言つて金錢をたくわえるという言葉すらいみきらい、行雲廻雪（美人の形容詞）には死屍の想いをなしたと申します、只今の律僧達の振舞をみますと。御祈禱料をたくわえて、利錢借請（金融業）を業とし、布絹財宝に執着しております。次に道をつくり、橋を渡すことは、逆に諸人の歎きになっておることを知らないのですか。六浦の関を飯島の津でとる、国々に構えた関所も旅人の煩いとなつておることはまだこの座中の方々のお耳に達しておらぬとでも申すのですか」

大聖人のあたりをはばからぬ強言に座中は嵐を呼ぶように、急にざわざわとさわぎたった。

(註一) 积尊の誕生日

(註二) 赦免状二通あり、前号のは二月十四日

日蓮法師御勘気ノ事御免許アルノ由仰セ下サルル所也、早赦セラルベキ由二候也。仍テ  
執達件ノ如シ

文永十一年二月十六日 兵部丞行兼

山城兵衛入道殿

(註三) 仏智のこと。

(註四) 方便品

(註五) 法華経を雑行の中にいれて否定する。

(註六) 善導(六一三—六八一)支那の僧で、浄土五祖の第三、真宗七祖の第五とされる。

(註七) 富士卷の(三)の七三ページ詳説す。

(註八) 天下泰平鎮護国家を祈願するため仁王般若経を講讚する法会

二二

騒然たる殿中をしずめる声がした。

それは平左衛門尉頼綱が、口をきつたからである。

「御坊は法華経以外の仏説はみとめぬというのが本当であるか……」

「それが、釈尊の御言葉ですから、日蓮も従わざるを得ません……」

「そんな馬鹿なことがあるものか……」

頼綱はにがにがしく言い放った。

大聖人は静かに話をつづけた。

頼綱がどう思うとかまわわぬといった様子である。

「釈尊がこの世に出でて、説法をなさった目的は法華経を説くのが、出世の本懐であられたが、聞く所の衆生の機縁（註一）万差であるが故に、三十七日間いろいろと考えられ、四十余年の間、機縁をととのえて、最後にこの妙法を説き給うたのであります。即ち経文には始めよりこの妙法を説かんとおぼしめしたが、仏法の気分もない衆生は、信じないで却って、妙法を誇るであろう。故に機をば、ととのえようと思われて、初めに華嚴、阿含、方等、般若等の経を四十余年の間と、最後に法華経を説き給うた。法華経の始めに無量義経という経文があるが、その経で、釈尊は、四十余年にはいまだ真実を顕わさず、とはつきり断言せられた。これは譬えば、大王の行幸の御時、將軍が前進して狼籍者を取りしむるようなものであり、將軍が大王に敵する者を大弓を以て射はらい、また太刀をもって切りすてるが如きもので華嚴経をよむ、華嚴宗、阿含経の律

僧、觀經の念仏者、大日經の真言師等々の者どもが、法華經にしたがわぬを、やめなびかす利劍の勅宣であります。即ち釈尊自身が、法華經以外を仏説とはみとめず、權教（註二）だといわれておるのであって、日蓮が自作ではありません」

一座はしんとして、誰亀口をひらくものがいなかった。平左衛門尉頼綱も、もはや、大聖人にたいして、質問をする氣力もうせてしまった。頼綱は御簾内みすうちに、眼をやるとなんらかの合図を内示されたらしく、今度は威儀を正して大聖人に向つて問いを發した。

「御坊、蒙古国の襲来は何時頃であろうか」

殿中は、大聖人の言葉いかにと、全く静まり返つた。

「されば、經文には、何時の何日とはしるされてはおりませんが、……」

大聖人は、ここで言葉をきると、

「今年は一定でありますよう」

この言葉に、静肅たつた場内が、再び大波の動くが如く騒然としたのである。誰かがしゃべる、ひそひそ話が、つきかさなつて、大きな形容の出来ない話し声になつて殿中の空氣を動かすのであつた。

「蒙古国の我が国に国書いたすこと、既に四度におよんでおりますが、御承知の通りわれからは、正式の返答は一切しておりません。さぞかし、蒙古はその間に、我が国状を国書にことよせ

て充分にさぐり、この五か年間に万全の軍備をなし、今年こそは、我が日本に攻めきたるのが、当然と考えます」

「蒙古国の来襲は必然と言かかるか……」

嘆声のこもった頼綱の声であった。

「日蓮はすでに文永五年の八月二十一日、申状を以つて、蒙古国の我国を攻めんこと必定なりと申し上げております。文応元年に、立正安国論を献上して本年は、正しく十五年になります。立正安国論を御採用にならなかつた結果が、今日の蒙古襲来という経文の如くなつたのであります。日蓮が智慧をもつて之れを予言したのではなく、法華経の神文が、日蓮をして言わしめたのであります」

「御坊は、念仏宗や禅宗に我々が帰依しておるから、蒙古襲来と言われたが、今もつて、その考えに変わりはないのか」

頼綱の質問である。

「変りようのありよう筈がございません。日本の国状が、日蓮が十五年前に予言した立正安国論の論旨と符合しておるの時に、所信をますます深くかためることはあつても、変改するなぞ毛頭ございません」

「だが、御坊、国難の来たることを必然と言われる今日だ。念仏宗も禅宗も律宗も、各々その立

場立場をことにするが、国を思い国を患うるの情においては誰人も変わりが無いと思う。じゃに  
よって、各宗各派が、力を合せて、敵国降伏を祈るのが本当ではなからうか、どう、御返答は：  
…」

「日蓮一人彼の蒙古国を調伏すべきの人たるべしと兼て知って、立正安国論を勸え申して之れを  
献策し、そのため却って、佐渡配流四か年の生活をすごし、今は立正安国論の予冒の通り、国状  
が変化したので、赦るされて、この殿中に召された日蓮であります。御貴殿の御言葉に従ったの  
では、立正安国論の主旨にも反し、今日、この殿中にきた、日蓮の所信にも反することになりま  
す」

大聖人は頼綱の質問を待たず、更に言葉をつづけた。

「立正安国論は、汝早く信仰の寸心を改めて、速かに実乗の一善に帰せよ、然れば則ち三界は皆  
仏国なり仏国それおとろえんや、十方は悉く宝土なり、宝土なんぞやぶれんや、国に衰微なく土  
に破壊なくんば、身はこれ安全にして、心は是れ禪定ならん。この詞この言信すべく崇むべし、  
と結んでおるが、実乗の一善とは、二もなく三もない、ただ一の法華経に帰せよと言うことであ  
ります。国難を前にして人心を一の所に、あつめてこそ、この日本国は安泰となり、祈りも適う

ものと思うものであります」

「然かし御坊、御説ごもつともなれば、幕府においては、上は伊勢大廟から下は辺土の末社ならびに、念仏、禪、律宗の各々に莫大な祈禱料を投じて、敵国降伏の御祈禱を依頼しておるのが現実だ、それをさしとどめて、御坊、日蓮法師一人のみに祈禱をたのむということは、政治をとるものとしては、どうしても無理なことだ。どうじやろう、諸宗と共に、国難の前には一身のことを考えず、敵国降伏の祈禱をして下さらないか、如何なもんか御坊、実は執権職におかれても、西の御門（幕府は東西南北に門があつた）の東郷入道の屋形の跡に、坊宇を建立して御坊に寄進し、自らも帰依せられたいとの内意があるのだが……如何なものであろうか……」（註三）

執権職時宗帰依との頼綱の声に、満場啞然たるものがあつた。流罪になつた者が赦るされて、殿中に招かれることが未曾有のことなのに、今また意外も意外、時の執権職が堂宇を建立して自らも帰依しようとのことが、北条家の執事たる頼綱の口から出たのであるから、満場啞然としたのも無理はない。このことが、先きに知れていたら、誰れも、大聖人に対して、念仏はどうじや、禪はどうじやと、責めるのは無駄なことであつたのだ。そんなことを責めた四、五人の人は、今は顔色もなくただうなだれて、皆の影にかくれるように身を低くするのみであつた。

大聖人は、時宗帰依の言葉をきいても喜びの色は少しもみせなかつた。

「王地に生れたれば、身を随えたとまつるようなれど、心は随えたとまつることは出来ません。



この日蓮は仏法を以つて本となす覚悟は建長五年四月二十八日の朝より変りはございませんが、王法には常に従いました。伊豆の伊東にゆけとの御命を頂けば、伊東に参りました。竜ノ口の首の座に坐われと言われれば坐りました。佐渡の御流罪右謹んでお受けいたして、雪中に四か年の生活を送りました。だが然し、今日は違います。佐渡の流罪が御赦免になったことは、日蓮の常日頃の折伏が、少しはみとめられたものと考えて、今日、この殿中に参上したのであります」

「…だからこそ、先刻申したように、東郷入道の屋形の跡に一字を建立して……」  
頼綱が口をはさんだ。

「諸宗の僧侶と共々に御祈禱せよとのことでございませうが、それは断じてなりません。これは王法のことではなく、仏法のことであるからであります。蒙古襲来を防ぐには、日本国の念仏者と禅と律僧等が、頸をきつて、由比の浜にかくべしと先年いっせや申上げた心持にはいささかも変りはありません。日蓮は常に念仏師と禅と律を攻撃すると、各位はお思いかも知れませんが、これらの宗旨は物のかずではございません。真言宗と申す宗旨が、日本国の大なる呪咀の悪法であります。大蒙古国を調伏することは、絶対に真言師に仰せつけてはなりません」

頼綱は皮肉な色を現わして口をはさんだ。

「御坊はたしか、真言宗の干光山清澄寺で出家したのではなかったか、その御坊が真言宗の悪口をなさるとは、ちと解しかねるが、如何がなものであろう」

「恩をすてて無為に入る、真実の報恩と申すなりと經典にあります。比干は王に随わずして忠臣孝人となり、悉多太子は浄飯王にそむいて三界第一の孝となり給うがこれであります。人王八十一代の安徳天皇は、源の頼朝にせめられて海中のいろくづ（魚族）の食となり給う、八十二代隱岐の法皇八十三代阿波の院、八十四代佐渡の院は、鎌倉の右大将の家人、義時にせめさせられ給う。何故に、安徳と隱岐と、阿波佐渡の王は、相伝の所従にせめられて、或いは殺され、或いは島に放たれ、或いは鬼となり、或いは大地獄に墜ちたのでありましょうか。殿中の各々の方とくつと御聞き下さい。隱岐の法皇は天子ですぞ。義時殿は民ですぞ。子の親をあだむことを天照大神が御受納ありましょうか。所従（家来）が主君を敵とすることを正八幡が、御用いあるでしようか。何故公卿が負けたのでありましょうか、只事ではありません。これは弘法大師の邪義、慈覺大師智証大師の僻見をまことと思つて、叡山、東寺、円城寺の人々の鎌倉をにくみ、真言により御祈禱を修したが故に、「還著於本人」とてその失がかえつて公家は負けたのであり、武家はそのことを知らない故、調伏をしなかつた故に勝つたのであります。（註四）日蓮は幼少の頃より、これに疑問をもつたが故に、顕密二道ならびに諸宗の一切の經を習つて十四か年ついに、南無妙法蓮華經と誰も唱えぬ妙法を、日蓮一人唱え始めたのであります。南無妙法蓮華經と唱えぬものと同席せよとは、どうしても承知しかねるお話しであります……」

殿中に權威も富貴もみとめぬ大聖人の断言であつた。

(註一) 機縁―衆生の根性や因縁のことを指す。

(註二) 衆生の機縁をととのえるかりの教

(註三) 日蓮正宗の三代の御法主日道上人の御伝土代による。最古の大聖人の伝記

(註四) 承久の乱をさす。



## 大聖人鎌倉を去る

### 一

大聖人が四月八日、鎌倉の殿中において、最後に一番強調したことは、真言宗に蒙古退治を仰せつけてはならぬと言ったことであつた。ところが、殿中間答の評判が、鎌倉の街の人々の口から口に、語られて、なんと、日蓮という坊さんは頑固な人だろう。これでは、佐渡に四か年流しておいたのが無駄だつた。まだまだ流しておけば、その強情がなおつたかも知れないと、評判をしてゐる最中の四月八日から、二日目の四月十日に、幕府が、祈雨の祈禱きとうを、真言宗の加賀法印定清という僧侶に命令をしたのであつた。真言宗の祈禱は、国家に害毒を流すものだ、大聖人が殿中において断言したのに、二日目に、真言宗の僧侶に祈雨せよとの命令が下つたのだから、鎌倉中では、大評判になつた。加賀法印が勝つか、大聖人が負けるか。法門の上の争いでは、素人にはさっぱりわからないが、雨がふるかふらないかは、誰れにでもわかる。しかもその雨は、自分

の家の屋根の上にも、自分の家の庭にもふるのだから、一步も出ずして勝負がわかるわけで、鎌倉の街の人々は、大聖人をへこます絶好の機会とこおどりして喜ぶものもいた。

真言修法の靈験あらたかと言われる、加賀法印（註一）という人は、どういふ僧侶かと言うと「此の法印は、東寺第一の智人、御室等の御師、弘法大師、慈覚大師、智証大師の真言の秘法を鏡にかけ」（全集九二二ページ）と言われる真言宗ではえらい人であった。

文永十一年は春からの早魃かんぼつで農作物は、殆どかれんばかりであったが、四月十日に加賀法印に雨の祈りの幕命が下ると、四月十一日から大雨がふつたのである。しかも風もふかず一日中しとしと慈雨がふつたのである。

雨がふつた。

雨がふつたぞ。

真言の祈りはかなわぬと、日蓮法師が、殿中で高慢げにいったが、どうだ、雨がふつたではな  
いか。

わざわざ大聖人のお住居すまいになつている小町（註二）まできて、雨にぬれながら、

「どうだ、日蓮坊、これでも真言の御祈禱が、駄目だと言うのか、今お前の屋根にふつている雨は、真言宗の加賀法印さまが、ふらした雨だぞ」

「外に出て、この雨にあたれ……」

「くやしかったら、この雨をとめてみせる」

口々にどなつて、大聖人にきこえるように騒ぎたてる人々で、大聖人のお住居の周囲は一杯であった。外で他宗の人々が騒ぎたてるのは、当然の話だが、大聖人の弟子の中でも、この雨のふるのを見て、がっかりするものが出てきて、うつぶんばらしに、大聖人にむかつて、

「真言の祈りが、かなわないぞと断言なさらなかった方が、よかつたのではないのでしょうか」と、庭にふる雨をみてくやしげに言うものがいたのである。

その言葉が、終わらぬうちに。庭の垣根ごしに、

「日蓮坊、くやしいだろう。今きいた話だが、時宗さまが、この雨に感心されて、金三十両と馬一匹を引物として、加賀法印に下さつたそうだ。それでも、真言の祈りはかなわないと言うのか、かなわないのはお前の方だ。鎌倉中の人々が手をこんな風にたたいて、喜んでおるのだ、お前のことは、こんな風に笑つておるのだ」

住居の周囲の群集は、音頭をとつて、手をただ今、大きな声をたててわらいたるのであった。

「これからあんまり、人をそしるのは、やめてもらいたいのものだ」

またもやどつと笑い声をたてて群集は立ちさつてゆくのであった。

このはやし声に、道理のわからぬ僧侶は興奮して、大聖人につめよつて、

「どうして、真言宗の祈りが、かなつたのでしょうか、訳をきかせて下さい。くやしくてたまり

ません。鎌倉中の人々の嘲笑わらいごえ声がきこえるような気がいたします」  
と叫ぶものさえいた。

大聖人は、道理のわからぬ、自分の弟子を不愍ふびんに思うような顔をされて言われた。

「日蓮が、常に言っておられることを忘れたと見えるなあ、法華経をば戯論けろんとそしつた弘法大師の悪義が本当であつたならば、承久の乱に後鳥羽帝が負けよう筈がない。三院は三国に流罪、公卿七人は忽ちに頸をきられたのは真言の祈りがかなわなかつたからである。弘法は十住心論に、法華経は華嚴経におとつていと書き、寿量品の釈迦仏をば凡夫だと秘蔵宝鑰にしるしており、二教論には天台大師をぬす人とけなしておる。法華経をといた仏をば真言師のはきものとりにも及ばずと正覚坊は舍利講の砌りにかいておる。このような、まがつたことを申す人の弟子加賀法印が、日蓮に勝つならば、竜王は（註三）法華経のかたきとなり、梵天帝釈に竜王はせめられるであらう」

「でも、大聖人さま、今現にこの庭に、加賀法印のふらせた雨がふつておるではないですか、五十年前も前の承久の乱をもちだされても古いことで、鎌倉の大半の人々が知らないことだと思いません。何故雨がふるのでしょうか」



「だからこれには仔細しさいのあることだと申すのだ」

「仔細がある、どんなしさいですか」

大聖人の直筆である、種々御振舞御書によるとどんな仔細があるのですかと、この弟子は嘲笑あざわらつたと書かれておる程だから、大聖人の御心中もわからない弟子であり、また余程興奮性のつよいやからであったと考えられる。

「善無畏も不空（註四）も雨を祈って雨はふつたが、大風がふいて却って世人に迷惑をかけたと伝えられ、弘法は雨を祈つたが、三七日すぎて、雨がふつたと言う。日蓮からみればこの弘法の祈雨はふらなかつたと申してよい。三七、二十一日もたてば雨がふるのが当然で、たとえ、ふつたとしてもなんの不思議なことがあるうか、天台の如く干観（註五）の如く、一座でふらなければ……」

「ですから、加賀法印は一座で雨をふらしたではありませんか、それなのに仔細が……」

と、頑固に言いはる、弟子の口に外からどうつとという音がして、突風がふつこんで、思わず口をとじた。やがてその大風は燭台をぶつとばすと、しきみがばたばたと風にあおられて下に落ち、部屋はまつくらになつてしまったのである。弟子一同は、大聖人さまの前に思わず、ひれ臥すと、

「南無妙法蓮華経」

「南無妙法蓮華經」

「南無妙法蓮華經」

と唱題するのみであった。

加賀法印の雨は、大聖人が、弟子を戒める言葉の終わらぬうちに大風に変ったのである。この大風の模様を大聖人の御自筆を以つて示そう。

「大風吹ききたる。大小の舍宅堂塔古木御所等を或いは天にふきのぼせ、或は地に吹き入れ、そちらには大なる光り物とび、地には棟梁みだれり。人々をも吹きころし、牛馬おおくたをれぬ。悪風なれども、秋は時なればなおゆるすかたもあり。此は夏四月なり、その上、日本国にはふかず但関東八箇国なり八箇国にも武蔵相模の両国なり、両国の中には、相州につよくふく、相州にも鎌倉、鎌倉にも御所、若宮、建長寺、極楽寺等につよくふけり、ただ事ともみえず、ひとえにこの祈り（加賀法印）の祈雨のゆえにやとおぼへて、わらい口すくめせし人々も興さめてありし上、我が弟子どもあらず不思議やと舌をふるう」（全集九二二ページ）

鎌倉中の人々も、この突風にふかれて、思わず大聖人の偉大さを知ったことであろう。人々をも吹き殺すとあるから、真言宗の祈りの雨がふるぞと、鎌倉の街々をこおどりして歩いていた連中が、吹き殺されたるうことは察してもあまりがある。

弟子達も大聖人を疑ったことを恥じたであろうし、殿中にて大言壮語した大聖人をへこまして

やろうと、たくらんだ幕府の面目もまるつぶれであり、鎌倉七大寺の和尚連中はこれでは、本当に由比ヶ浜に首を斬られるかも知れないと、坊主頭をひやひやさせたに違いない。

大聖人の真言宗の祈りはかなわないということが、誰れにもわかることで実証せられたのである。鎌倉の街に大聖人のかげ口をきく者はいなくなつた。

礼記の下に「人臣は三たび諫めてきかなければその君をさり、人子は三たび諫めてきかなければ泣いて親の意に従う」ということがある。

主君を三度諫めるに用いずば山林に交われという言葉がある。大聖人は文応元年七月十六日に立正安国論を献上して第一の国諫をなし、ついで立正安国論の予言が的中して、蒙古の来牒となつた。文永五年十月十一日、宿屋左衛門入道を通じて、国諫の書を幕府に呈して第二の国諫をなし、その故に佐渡の島にながされたが、赦るされて鎌倉に帰えると文永十一年四月八日、今度は殿中において、時宗を前にして、堂々たる第三の国諫をしたのである。堂宇をたてて帰依しようとなすまでだったが、本当の帰依ではない。

主君をいましめて山林に入ったものは、殷代の太公望は幡溪に、周代の伯夷はくいしゆくせい叔斉しゆくせいは首陽山に、秦の綺里季きりきは商洛山に等々の例がある。大聖人も、もはやこの例にならう以外なかつた。

(註一) 法印大和尚の位で僧正の位で僧綱の最上位である。

(註二) 小町字小町の本覚寺、吾妻鏡にみえる夷堂の地であるという。佐渡から帰えられるとここにすまわれたという。比企大学三郎の屋敷にすまわれたという説もあるが、妙本寺史にはのせていない。

(註三) 竜王は雨をふらせる神という。

(註四) 善無畏、印度の人で中央アジアをへて長安に、唐の玄宗に信任され密教々典を漢訳した。不空、北インドか中央アジア出身、唐の洛陽にきて出家す。密教付法六祖といわれ弘法に法を伝えた惠果は不空の弟子である。

(註五) 天台宗の僧、空也にしたがい大阪府箕面に金竜寺を建立した。

一一

古川柳に

日蓮や鎌倉さつて初鯉

とこのうがある。

大聖人が鎌倉を去ったのが、文永十一年の五月十二日だから、その頃が鯉のたべ頃なので、鎌倉はいせいのよい大聖人がいなくなつてからは、いせいのよいものは初鯉の売り声だけだと言う

意味の川柳である。

古川柳の祖といわれる柄井川柳は享保三年（一七一八年）の生れだというから、文永十一年は一二七四年で、聖滅四百三十七年後の人がえらんだ句だから、大聖人を追慕鑽仰してよんだ句であったことで、現実とは少しことなっていたと思う。風俗史家の研究によると、「鎌倉近海に産する鰹は古よりその地方の産物として有名なれども、猶鎌倉時代の中頃までは、鰹節の外は、はかばかしき人の前にだすことなしさるものながら、その季には天皇の供膳にすうることとなりたり」とあるところをよむと、初鰹の珍重されたのは、特に江戸時代であり、鎌倉の街に四箇の格言を唱える威勢のよい、大聖人さまがいなくなったことを、さびしがって、江戸の古川柳がよんだものと思える。

五月十二日という日は大聖人さまにとって、一生涯において、三度の事件がある。大聖人が御出家されたのが、天福元年の五月十二日、御年十二歳であった。次に弘長元年の五月十二日、御年四十歳で伊豆に御配流になった。今また、文永十一年の五月十二日、建長五年より文永十一年に至る二十二年間、大聖人は、鎌倉を本拠とせられていたが、今のこの地をすてて、山深い身延の谷に入ろうというのである。大聖人の胸中において万感せまるものがあつたらうと推測するのは凡智の者で、大聖人は「日蓮が慈悲廣大ならば、南無妙法蓮華経は万年の外未來迄もながるべし」（全集三二九ページ）と言われたこの予言のために身延入山となり、法華経の広宣流布のた

めに深山に入山を決せられたとみるべきであり、末法の我等衆生のために入山せられたのである。文永十一年五月二十四日の「法華取要抄」を始めとして、二百三十余編の著述御消息があり、大聖人の御一代の著作の大半は、身延においてなつたことを思えば、大聖人の身延隠棲は単なる隠棲ではなく、末法万年にそなえての大聖人の大慈悲心の現われとみるべきである。

「十二日酒匂、十三日竹の下、十四日車がえし、十五日大宮、十六日南部、十七日このところ（身延の意）」と大聖人は自らのべられておる（全集九六四ページ）

この中で竹の下というのは静岡県駿東郡足柄村にある、御殿場の東北をさる一里、小山駅の西南一里の処で、酒匂川の上流の溪谷に臨み東に足柄峠がある。聖滅後のことであるが竹の下は新田義貞対足利尊氏の合戦場として名がある。竹の下では京都軍ふるわず、その中に、大友、塩谷が、尊氏の軍に内通したので敗戦し、官軍は京都に帰つた。ここにおいて東国の将士は尊氏に応じ、ついで尊氏西上するに及んで南北朝の大乱となるに至つた。

車返しは、静岡県沼津市旧城の東、黄瀬川西北辺の地名、ことの起りは山路などの嶮岨げんそな処の称、それよりは車を通じないので、返してやるの意味、即ち、大聖人の旅程からいえば、竹のより車返しの間は、車を通じない嶮岨な山路であつた訳である。沼津市旧城とは、北条早雲が、相、豆、甲信のおさえに三枚橋（現在も三枚橋町あり）の平城をつくつたことをさす。

仁治三年（聖歳二十一歳）の東関紀行に「車返しという里あり、ある家にやどり、たれ網釣、

なんどいとなむ賤しき者のすみかになや、夜のやどりありかことにして、床のさむしろもかけるばかりなり。かの縛人戒人の夜半の旅寝もかくやありけんとおぼゆ」とあるが、東関紀行の著者は不明だが京都の住人であることには間違いないから、右のような描写になったのは仕方がないが、もし、このような描写に間違いなしとすれば、これより、甲斐の山奥に入る大聖人としては、最後にかぐ磯の香の匂いに、一夜をなつかしく感ぜられ、最早古郷房州には帰ることなしと定められた大聖人にとっては、一しお感慨無量の一夜であつたと思われる。

曾我物語に「人生れて三国に果つるは習いなり」とある。

生れた処修業の処、そして死ぬ処が違うというのが、人間の習いというのだが、偉い人はみなそうなつておる。大聖人さまも当然そうであるが、身延入りの旅程においての一夜としては、車返しの一夜は中々に意味ある一夜であつたらう。十五日、大宮とは、現在の富士宮市である。いずれの場所に宿泊されたか断定はむずかしいが、浅間神社の別当の処に宿られたと推測する。それは、「此の経を持つ人をば、いかでか、天照太神、八幡大菩薩富士千眼大菩薩すてさせ給うべきとたのもしきことなり」（全集一五七二ページ）とあることから察せられる。

それよりも「五月十二日に鎌倉を出でて、同十七日甲州飯野の御牧、波木井の郷身延山にこもる。時機不相応のため摂受の行たりと雖も、日夜朝夕に法華経を転読す。日本無隻の名山富士山にいんろう隠籠せんと欲すと雖も檀那の請によつて今此の山に籠居す。我が弟子中にもし本門寺之戒壇の

勅を申し請て、戒壇をたてんと欲せば、すべからく富士山にきづくべし」(法華本門取要抄)とあるを考えると、この大宮の一泊も大聖人にとって大いなる意義がある。二十二年も富士のみえる鎌倉におられた大聖人さまが、明日からは山にかかって富士のみえぬ道程となるのである。富士のみおさめと申してもさしつかえがない。

日興、日向、日持、日頂等々の諸弟子がお伴を申ししたが、特に大聖人さまの日興をみる眼がことなつておつたに違いない。なぜなれば、日興上人一人が「富士は大聖人が本願を祈る所なり」と書いておるからである。

「甲州飯野、御牧、波木井の三箇郷の内、波木井と申す、此の郷の内、戊亥の方に入りて、二十余里の深山あり、北は身延山(一一四七・九米)南は鷹取山(一〇三六米)西は七面山(一九八二・四米)東は天子山(一四〇〇米)なり板を四枚ついたてたるが如し、此の外をめぐりて四つの河あり、北より南へ富士河、西より東へ早河、此れはうしろなり、前に西より東へ波木井河の中に一の滝あり、身延河と名づけたり、中天竺の鷲峰山を此の処へ移せるか将又漢土の天台山の来れるかと覚ゆ、此の四山四河の中に手の広さ程の平かなる処あり。此処に庵室を結んで」(全集一〇七七ページ)と大聖人さまは自らのべられておる。また「去る文永十一年六月十七日にこの山のなかに木をうちきりて、かりそめにあじち(庵室)をつくりて候」(全集一五四二ページ)



とあるので行学日朝（身延十一代）は「その六月十七日に此の山を開闢し玉う」と身延御書抄に書いておる。

さて大聖人を招じた檀那である波木井氏については、堀日亨上人著、「日興上人祥伝」より文章を拝借する。（日興上人祥伝七八七ページ）

「実長入道法寂日円は甲斐源氏にして、南部三郎光行の六男で、南巨摩郡の波木井に住していたから、波木井殿と称せられた。一族は甚だ広くして日興上人に化せられておる。

日円は性剛腹にしてまた直截ちよくさいであり、時流にもれずして念仏を行ぜしが、鎌倉上下の際その沿道である富士河西の四十九院において興尊と相知るに至った。初老と青年と俗と僧との異なるも、ともに甲南の出身で、意気相投じてしだいに宗議にも進み、一族とともに念仏をすてて法華に帰し、みな興尊の門にはいり、播磨公越前公の僧侶をも出すに至った。

文永のはじめ、興尊にみちびかれて、鎌倉にて大聖人に謁して信仰を増進したるのみならず、その聖威にうたれてますます意気をつよくす。大聖人の強折大いに為政者にいれられず、また一般道俗の怨嫉するところとなり、流離やむことなければ、ついに中央政府を去られんとする時、各地の有縁より懇請ありしを退けて、身延の幽境に移らる、これは、一つには中央政府に遠ざかるの意なりしも、まったく興尊の特縁ある波木井峽に導きしものである」と簡潔にのべられておる。



## 蒙古襲来

### 一

蒙古の襲来は、文永四年の九月の国書が、翌五年の正月一日に、九州の太宰府に到着したことにことが始まるのである。

さて、最近蒙古襲来のことに関して、いま私の手許にあるものでも「蒙古襲来」昭和四十年中央公論社著者黒田俊雄、「蒙古襲来の研究」昭和三十三年吉川弘文館著者相田二郎、「蒙古襲来」昭和三十九年桃源社著者山口修、古いものだが大冊で二巻ものの「元寇の新研究」昭和六年東洋文庫著者池内宏、これらの書物は、一ように文永五年の蒙古の国書を無礼なりとしておる。

これは、元禄年間に出た、浅井了意作と言われる、北条九代記も「今蒙古の状書にも、またこれ無礼の文章あり、返状に及ばざる誠に現ことわりとぞ聞えける」と蒙古の国書を批評して無礼なりとは、戦前の我々の常識だったが、ここに戦後の本になるとあながち、そうとはきめきれないのが

あらわれた。

それは、昭和四十年、富山房、著者、文学博士大戸頃重基の「日蓮の思想と鎌倉仏教」の中の、第四章蒙古襲来と日蓮の予言で、

「牒状の文面はそれほど不穏なものでなく、自製の意も書面に溢れ、シナでは、前例のないことだといわれる。ことに牒状が「不宣<sup>ふせん</sup>」という言葉で結ばれているのは、臣としない意味である。フビライは日本との円満な朝貢を希望していただけとも考えられた。フビライの欲したのは、朝貢でさえもなく、名を天下に高めるためにすぎなかったことがわかる。フビライはただ形式的な服従だけを日本に要求したにすぎない。」これは、昭和三十四年に読売新聞社から出版された、「日本の歴史」鎌倉武士の二五八ページに、その体裁について、モンゴルは、中国としては前例のないほど、ていちょうなものとして注目され、書き出しに「大蒙古国皇帝、書を日本国王に奉ず」とあり、とりわけ、結びを「不宣」としてあるのは、臣としない意味だといわれた。フビライが、いかに、日本の円満をのぞんでいたかが察しられる。

これを比較すると前の文章はこの文章とそっくりであるから驚ろく。前書は非常によく参考書をあげて、読者に対して親切だが、この部分は、参考書を明示してない。「不宣」の文字の解釈をよんで、おやおやそんな意味があったのか、意をつくさずぐらいの意味だと解釈していた己れの無学を恥じたが、だが、どうも変だと、諸橋の漢和大辞典を引いてみたら「不宣Ⅱ友人間の書

簡の末尾に記す語、十分のべつくしていない、不宣備をみよとある。不宣備Ⅱ書翰文用語、十分の意をつくさないこと」とあつた。

書を悉く信ずれば書なきにしかずという言葉があるが、どうも驚ろいたことだ。しかも、「日蓮の思想と鎌倉仏教」という書物は、昭和三十九年二月に、東京教育大学文学部に提出した、学位論文というのだからびつくりしたのである。平凡社の世界大百科全書でも、元寇の項目に「その使が蒙古、高麗の両国書をたづさえて、はじめて、北九州にきたのは、文永五年のことである。すでにこれよりさき一二二七年（安貞一年）と六三年（弘長三年）に、日本の武士の来寇の禁止を求める高麗の使がきたことがあり、そのことが、フビライ・カンの日本征戦の一つの理由になつたといわれているが、明らかに服属を要求したこの国書の到着」とはつきり書いておる。これが常識だと思ふが、戦後の博士の意見とは、斯くの如きものかと深く考えさせられた。これは蒙古の記録（経世大典）にも末尾に不宣と言つたのは臣としないの意を示したものと明記してあるところからきたのだから、それはうかつで文永四年の国書をよく読みまたその次に来た国書を読めばそんなのんきなものでないことがわかる筈だ。後日この書に対して批判することがあると思ふので、これはこの辺でやめておきたい。

山口修著の蒙古襲来は面白いことがのせてあつたので、一寸引用させて貰う（同書二五ページ）  
「蒙古人は遊牧民である。財産として家畜を考え、土地としては草原を考える。馬も羊も養えぬ

耕地はいかに広いものであつても大きな価値は認められない。家畜のための牧草を求めて季節ごとに移動する生活が本体であるから、田や畑の收穫を待つて定着する生活は考えられない。したがつて、蒙古人にとつて、中国の沃野には魅力を感じられなかった。すべてを焼き払つて、牧地に化してしまおうと考へたものすらあつた。蒙古帝国の王族たち、また貴族となつた將軍たちは、中国に領地を与えられても、その支配は代官にまかせ、ひたすら農民から税をまきあげることしか考へなかつた。重税のために生活の出来なくなつた農民は土地をすてて流亡する。農地は荒廢する。蒙古人からみれば、自分の支配が悪いためではなく、中国人、というより農耕の民が頼りにならぬ者なる故としか考へなかつた」

「ジンギスカンが華北に侵入したとき「人民を全部追いだして広い草原にしたら、さぞよい草地在りであるであろう」と語つたといわれるが、かれらは征服民を住ませておけば、毎年ひとりで收穫が手もとに入つてくることを知らなかつた。かれらは征服によつて、略奪するか、せいぜい財宝を貢物みつぎものとしてとりあげることしか考へず、手工業者だけは品物をつくらせる為に本国につれていった」

「蒙古襲来」日本の歴史二〇ページ

これらを読むと、蒙古国の成立については前述にくわしいのでここでは省略するが（註一）蒙古軍がアジアのみならず、欧州にまで遠征したその意図はただ掠奪にあつたことがうなづける。

蒙古軍の得意とする軽装騎兵戦術がこれを可能にさせたのである。欧州にまで国家の領土を求めようとはしなかった。

ジンギスカン一代の間に国を亡ぼすこと四十、朽木をぬくがごとく人間を殺すこと数百万といわれ、黒海からインダス海にいたる数千里の地は前後五年間ふみあらされ、その旧態に回復するには、優に五百年にわたる大努力を要すとあるが、これは詳述した所であるからここでは略す。

さてジンギスカン（王中の王の意）の第五代目が、フビライで、北京に都を定めて国を元と称した。日本の年号だと、文応元年の三月である。大聖人はこの年の七月十六日に立正安国論を献上されたのも不思議である。このフビライを元の世祖と称し、これが日本国に国書を発した人である。フビライの時代になると、人間の生活には遊牧生活とは別の生活のあることを知り、従つて別の政治の方法を知ったのである。今日で言えば植民政策を理解したということである。領土というより、支配下において、朝貢させるということにより、元の威力を天下に誇るということであろう。

このフビライが支配した領域は蒙古の本土および中国の外、中央アジアから、ヨーロッパの東部オゴタイ国（車国の新疆省の北部）チャガタイ国（ソ連領のキルギス共和国からカザーク共和

国東半) キプチャク国 (カザーク共和国の西半から、ロシアウクライナの地域) ルイ国 (イランを中心にして西南アジア) これらの国は、ジンギスカンの子孫をいただいた蒙古人の国家である。蒙古国の外に四つの国家に分れていても、領域の全体を統轄するのはフビライであり、帝国の領内のすべての者が服従すべき人はフビライであった。このことは実に世界歴史上で空前絶後(いままでないこと) (大学の入社試験で、これは午前中に飯を喰はないので午後ぶつたおれたという意味だ) という答案があつたそうだから、あえてルビをつけた) の領域であつた。

フビライの中国における勢力は、二代目のオゴタイが金国一二三四年 (文歴四年聖寿十三) に亡ぼしたが、まだ揚子江を越えることは出来なかつた。そこには宋 (南宋) 国があつたからである。

フビライは王位につく以前の一二五八年 (正嘉二年聖寿三十七) に宋国を攻撃したのだが、その征戦の最中に四代目の王たるムングが死亡したので、一度は揚子江を越えた軍勢であつたが、戦をやめて燕京の (今の北京) にひきかえして、やがてえらばれて、王位につき、世祖と号し国号を元とし年号も中統と改めた。

フビライはここで南宋を亡ぼすならば、本当のアジアの主人たることが出来た。そのためにはすでに朝鮮半島を征服し、チベットもインドシナ半島も征服してしたので、南宋はいわば袋の鼠というところであつた。



ところが南宋が亡ぶ迄には二十年もかかっているのだがどういふ訳であろうか。それはフビライが南宋以上の敵をもっていたからである。四代目のムングは前述の通り金を亡ぼした人であるが、蒙古の風習では末子が相続することになっておるので、自分が出陣した時に蒙古の都カラコルム（モンゴル人民共和国外蒙古のオルホン川右岸エルデニジャオにその遺跡がある）に、末弟のアリクブカを留守居役にして、父祖の遺産の管理をまかせたのであった。ところが征戦の途中で死亡したので、ムングの後をついでフビライが王位についたが、末弟のアリクブカにしてみればだまっておられないところであった。当時のカラコルムは、アジアにおける世界的大帝国の首都であり、遠くイスラム世界や、ヨーロッパ諸国からも往来した。一二五三年（延長五年）にカラコルムにきたフランス王の使節僧ルブルックが詳細な記述をしており、それによると、諸宗教の寺院がたちならぶ中に、イスラム教寺院二、ネストリユウス派キリスト教寺院一とあるから驚くべき宮殿であった。ここの留守居役をあずかっていた、アリクブカだからおいそれとフビライの命令をきく筈がない。彼はいろいろとフビライをてこずらせること五か年間ついに中統五年の七月にアリクブカは兄であるフビライに降参したのである。

フビライは、反乱が平定したので、これを祝って、大赦を布告し、年号亀至元元年と新しくした。これは日本の文永元年にあたるのである。

さてアリクブカを亡ぼしたからフビライは安泰であったかというところ、そうでもなかった。ジン

ギスカンの二代目をついだオゴタイ家から出たグユクというのが王位をついたのだが、これを心にくく思っておったのが、ジンギスカンの末子であるツルイであつた。そこで、グユクが死ぬと、末子相続の正当性を主張して、ツルイの子ムンゲが第四代の王となつた。五代目はムンゲの次の弟であるフビライが王となつた。そこでムンゲの末子である、アリクブカとフビライとの間に五か年もの争がおきたのは前述の通りである。フビライとアリクブカとが争つておる間に、二代目、三代目と王をついだオゴタイ家のハイズというのが勢力を養つて、フビライに対抗しようとしていたのである。

だから、フビライが中統の年号を廃して至元という年号を採用した時に、イル国、チャガタイ国、キプチャク国も、フビライの大王たることを承認し朝貢を約束したが、オゴタイ国だけは反抗の態度をとり、朝貢をせぬと断言した。フビライは即位をし年号をかえても直ちに南宋をうつことが出来ず、至元三年（文永四年）にはトルキスタンに兵をすすめて、オゴタイ国のハイズを討つたが、この戦争にはフビライが負けたのである。

ハイズはこの後チャガタイ国を勢力下におき、キプチャク国と同盟した。やがてイル国もその勢力に圧倒されてしまった。ハイズの反乱はその後二十年もつづき最後にはハイズの軍が蒙古迄もせまるようになったのである。このような内憂をかかえながらも、何故、フビライは、日本をせめねばならなかつたのであろうか。

現在世界の焦点となつておるベトナムは、大聖人の時代には、安南と称していたが文永年間に、すでに元の支配下にはいつていた。従つて南宋は元に包囲された状態にあつた。この南宋を亡ぼすために、フビライは日本を利用しようとしたのであつた。宋国は南に移つてからは(元により揚子江以南に追い出されてしまつてからの後)財政上の理由から、貿易を重要視して、南遷後の国庫の収入の減少をこれによつて補おうとしていたのである。この相手になつたのが日本であつた。

宋国からの輸入品は、紙、硯、墨、書籍、青磁、白磁、唐の織物類、また修法儀式につかう香類そして宋銭、大聖人の二十一歳の時即ち仁治三年には、西園寺公経の船が、宋から銭十萬貫をもちかへつたという。銅貨ならば一億枚を輸入したことになる。

日本から輸出したものは、金が筆頭で、つぎに真珠、水銀、硫黄、松、桧、杉などの木材、刀劍、弓矢、甲冑なぞであつた。

当時乗組員百人に達する日本船が、毎年四、五十隻も往復していたというから驚く。

航路は主に、上海に近い、明州（ニンポー）を出航する。これは遣唐使船の時代からの港で、東支那海を横断して、直接九州の博多、今津、平戸などにつく、この航路だと普通で五昼夜、うまくいけば三昼夜だから、我々が思ったより早いのである。

このような状態で、南宋と貿易をしていた当時の日本が、南宋を包囲してこれを亡ぼそうとする、元からみればシャクにさわるのは当然なことで、その日本が何度使をやっても、断乎ことわるのだから、元の日本遠征となったことは当然で、日本を亡して、南宋を孤立させ、そして滅亡にみちびこうというのが、フビライの作戦であった。

南宋は元の領土内にはいったと前述したが、これは元のフビライの全き臣下となった朝鮮（当時の高麗）とは大変事情がことなっていた。

それは当時の安南は元に貢物をささげる程度の服従であったらしい。というのは、当時の安南は国勢が最も盛んな時で、一二五七年（正嘉元年）の元の襲来をくいとめ、其後も二回に渡って元が攻めたが、これもくいとめて失敗させておるからである。

安南がこのような事情であったので、朝鮮を極度に利用して、日本を征服し、そして南宋を討ちたいのが、フビライの目的であった。

全くの臣下の礼を元にとった朝鮮は、どれ程、元に利用されたか、実に語るも涙といったてい

である。

文永十一年の正月、元は高麗にたいして日本遠征のために造船を命じ、高麗は十五日から着工した。

「造船所には、木材が豊富で船の進水に便な辺山及び天冠山（朝鮮半島の南端）の海辺の山が選定された。役夫としては工匠および、人夫三万五千名（一説三万五百名）が徴集され、その三か月の糧食三万四千三百十二石余もまた高麗の負担であった。建造の船数は大船三百、軽疾舟三百、給水用の小舟三百、計九百艘。船の型は南中国様式では工費がかさみ、期日に間に合わないので、高麗様式の簡略なものと指定された」（註一）

高麗様式を採用したということは、人民を強制して突貫工事でつくらせた船であったことが、元軍の敗因だと、この著者はしているが、卓見というべきだと思う。

これは高麗政府が任命した金万慶將軍の伝記に、

「造船を蛮様（南支那風の意）によれば工費多くして期に及ばず（略）本国（高麗）の船の様式を用いて建造す」より推理した結論と思う。

船の大きさ大船というのは日本の千石船に相当する大きさであった。

さて日本を討つべき兵員はどのくらいであったろうか。

フビライは日本遠征を期してすでに文永七年の閏の十一月、朝鮮半島の南端金州に屯田を設置

し、日本征討の軍隊を農耕に従事させながら駐屯させた。次の年の文永八年の三月になると、この屯田は忻都きんとという屯田経略使が蒙古よりきて屯田は、開城、平壤、等の十か所におかれ、その兵数は六千といわれた。

高麗はこれに対して、耕地を提供するのは勿論だが、農牛三千頭、農具、種子、糧秣の全部、屯田兵六千の食糧を負担しなければならなかったから、全羅道の農民は草の実や、木の葉をたべて露命をつなぐありさまであった。

文永十一年の三月に、高麗に屯田兵長の將軍忻都洪茶丘に、日本征伐の命を下して、七月を出征の月と定めた。五月には元の日本征伐の兵一万五千が高麗に到着し、六月十六日、高麗は九百隻の工事を終了して、出航進発港の合浦がっほ（朝鮮南海の要港で今の馬山浦）に廻送を終ったと元に奏上した。

準備が完了したのに、日本遠征が十月迄のびたのは、六月十八日に、高麗の国王がなくなつたからである。

高麗国王のあとつぎは、人質の形で元の大都（現在の北京）にあつて、フビライの娘クツルガミンの降家をこの年の五月に受けたばかりであつた。父が死んだので新しい高麗王、諱しんは八月に高麗に帰り即位した。このために七月征東を定められたのがおかれて十月三日に、合浦を出発した。

総司令官は忻都（モンゴル人）副は洪茶丘（高麗人だが、祖父の代からモンゴル朝に仕えていた）リュウフクコウ（これは中国山東省の人）都督使に金方慶（高麗人）で軍勢の総数は、高麗史によると「蒙漢軍二万五千我軍八千、船員および船中の雑役夫漕手は高麗が負担しその数六千七百」とある。但し元兵の実数、蒙漢軍二万五千は多きに失する。洪茶丘伝の総数二万が本当だという説もある。文永十一年十月三日、元軍は朝鮮を出発した。

蒙古襲来についての確実な文献としては、八幡愚童訓、日蓮註画讃、竹崎季長蒙古襲来絵詞となっておる。今鎌倉妙法寺開基日澄（一五一〇年寂）の著による、註画讃を引用して元軍の壱岐対島九州への襲来をのべよう。

「文永十一年十月五日午前五時に対島の国府の八幡宮の仮殿から火焰が出たので、対島の人々は八幡宮が焼けうせたかと思つたがそれは幻でめつた。これは何事かが起こると思つていた処が、その日の午後四時頃に対馬の西の佐<sup>さ</sup>寸<sup>す</sup>の浦に異国の兵船四百五十艘、三万余人を乗せてよせきたつた。六日の朝八時に合戦して、守護代資国等及びその子息も悉く討死をした。十四日には壱岐の島に押しよせ守護代、平内左衛門景隆城廓を構え防ぎ戦つたが、蒙古軍の乱入により景隆は自殺してはてた。二嶋の百姓等は、男は殺し或いは捕らわれた。女は一か所にあつめて、手をと

おして船ばたに結びつけ、一人として害められないものはなかった。ついで肥前の国の松浦党数百人もうたれいけどられ、百姓の男女は壱岐対馬と同じ運命をたどった。ついで十九日午前八時に筑前の博多、箱崎、今津、佐原によせきたる」(取意)とある。

元軍の主力たる二万の軍勢は、太宰府攻撃を目的として、堂々と博多、箱崎を占領すべく二十日の日博多百道原ももしばらに上陸を開始し、一部は今津の方面にも上陸した。これらは忻都、洪茶丘の指揮する軍勢である。

これに対して、高麗人、金方慶の指揮する五千の高麗軍は百道原に上陸すると、それより鹿原そばらに至り、軍を二つに分けて、鳥飼と別府の松原に進撃した。

蒙古高麗の軍勢は午前十時より、夕方まで戦いをつづけた。

さてこれに対して日本軍はどうであったか、蒙古が対馬を襲ったことは十月十七日に京都に達し、直ちに鎌倉に伝えられた。

九州では蒙古の襲来がつけられると、太宰府守護所は、配下の武將に命令を下した。総大将としては、筑前、豊前、肥前、壱岐、対馬の守護職をかねた少式経資つねすけ当時二十九歳であった。副は豊後の守護職の大夫頼綜よりむねであり、前線には経資の弟景資かげすけが採配をふるった。

八幡愚童訓によると九州の軍勢は、

「少式、大友、紀伊の一類、白木へツキ松浦党、菊地、原田、小玉党以下神社、仏寺の司まで我



も我もとち立つて大将ばかり（？）十萬二千余騎、都合何萬騎と言う数を知らず、馬の氣天にあらがりて風をなし、蹄足地にひびいて雷をなす、日本兵共は、高麗唐人をあなどつて、面々分捕を考へると、日本兵は多く敵兵はすくない。どうして一人当てに分捕りしようか、敵兵十人に味方一人こそよいところなのに、味方は多くて敵兵一人あてにならぬことこそ残念至極」（取意）なぞと記されておつて、合戦前の勢はまことに天にちうするのていであつたが、愈々合戦が始まると、これが惨敗をきつしたのだから日本兵の残念さがわかる。

（註一） 「蒙古襲来」 黒田俊雄 中央公論社

## 二

紀元前四〜六世紀に成立した世界最古の兵法書である孫子の第七軍争篇古来の軍法に、

「多数の兵士を統率するには口で言うてきこえないから合図の鳴物をつかい、見てもよく見えないから目印の旗を用うる。合図の鐘や太鼓、目印の旗というものは大衆の耳目を一つにするためのもので、これによつて大衆が統一される結果、勇氣のある者でもひとりで抜け駆けはできず、臆病者でも、勝手に逃げだすことはできない。これが大勢の人間を管理する秘訣である。こ

れは敵に対しても活用できる。すなわち夜戦には大いにかがりびをたき鼓をうち、昼戦には旗を多くたてる。こうすれば実際以上に味方は多く見え、敵の耳目をまどわすのである。こうすれば敵の士気をくじき、とくに敵将の心理をかくらんすることができる。士気というものにも原則がある。たとえば、人の気分は朝は精気がみちみちており、昼はつかれ、夕方は帰ってやすみたいものである。戦さ上手は、状況に応じて士気の変化をみ定め、精気のみちた敵はさけ、つかれたり士気のおとろえたりしているところを撃つのである。味方の内部を治めておいて敵の乱れに乗り、味方は静かに準備しておいて敵が騒々しくやつてくるのをまつ」(註二)

二千年近く七集団的戦闘になれた大陸の軍勢に対して、源平盛衰記を一寸みても、

「相模国の住人鎌倉権五郎景政が末葉梶原平三景時なり、彼の景政は奥州合戦の時、右の眼を射られながら其の矢をぬかずし当の矢を射矢をいかへして敵を討ち、名を後代に留めし末葉なれば、一人当千の兵ぞ、我れと思はん大将も侍もくめやくめやと名乗りをあげて攻め入りたり」(註二)

この方式で、蒙古勢にたちむかつたのだから蒙古勢が、どつと声をあげて笑ったというのもうなずける。

日本流の合戦の開始には、両方から鏑矢かぶらをいって、矢合せの合図を交わすことになっていた。鏑矢とは矢の先きに、木または骨製の球形をつけて、それに小さな孔をあけて、飛行のさいに音

響を起こすものをいう。

蒙古軍を前にして、総指揮官の少式三郎左衛門景資の子十三歳の資時が鏑矢を射て、合戦開始の合図としたが、奇妙な音を発する矢が空高くとぶと、蒙古軍は一度にどつと笑った。

「矢合せの為とて、鏑矢を射出したりに、蒙古一度にどつと笑い、大鼓をたたきどらを打って、時をつくっておびただしきに、日本の馬共は驚ろいてはね狂うので、馬をあつかうことだけがやつとで、敵に向うことを忘れた」(註三)

蒙古軍の笑いなどを気にせず、狂う馬を制して日本側からは一騎がすすみ出て、

「やあやあ遠からんものは音にもきけ、近かくばよつて眼にもみよ、我こそは清和源氏の末孫にして……」とやりおる中に、大勢どやどやと出てきて、あつと之間にとりかこんで、よつてたかつて、この誇り高き勇士を殺してしまった。それが最初の一騎だけではなく、いたる処の戦線であんなことが起り、これでは武士の合戦ではないと、くやしがつても仕方がない。集団的戦術になれないかなしき、功名のしるしは敵の首をとろうなぞという個人的名誉が念頭に一杯では、この蒙古軍を相手にすることが出来なかつたのは当然のことであつた。

その上に武器が違つていた。蒙古軍の矢の射程が断然長かつた。そしてその矢には毒がぬつてあつたので、浅し傷でもひどい苦痛をあたえた。その上に蒙古軍には鉄砲さえあつた。鉄砲の起源は、蒙古軍がヨーロッパを遠征した時につかつたのが、起源と百科辞典にも出ておる。

「これはかなり大きな鉄丸に火薬をつめたものらしく、火繩に点火して飛ばすと空中でごう音と閃光を發して爆發し、人馬の耳目をくらました。手でなけるのではなく金属製の筒から發射した一種の大砲だという説もある」(註三)

火薬の威力を始めて、蒙古軍によつて知つた日本人の軍勢は驚いたに違いない。

これを読んで、日本軍を笑うことは出来ない。二十年前には、B二十九にはたきと竹やりで応戦出来ると思つていたのである。私も支那大陸にやられて、毎日訓練をうけておつたが、どんなことをやらされたかという、二人の兵隊が荷車を一台ひいてやつてくる、すると火焰びんと想定したサイダーのあきびんを片手にもつた一人の兵隊が荷車がごろの距離にきた時に、「ヤッ」とかけ声もいさましく荷車の下にかけこむのである。荷車はタンクの想定である。タンクを破壊する方法のもつとも確実な戦法だということである。兵隊は火焰瓶をもつて戦車にひかれる。そして火焰瓶の爆發と共に一命をすてる。一人の兵士の命で一台の戦車を破壊する方法である。真面目にこの訓練をやつていた。そしてつけ加えておくが、本物の戦車は一度もみたことがなかったのだから皮肉である。

戦争というものは武器がすぐれておる方が、勝つのは、昔も今も心變りがない。

以上のような不利の状態であつても、日本軍はよく戦つた。

八幡愚童訓によると、松浦党多く打たれぬと名前をあげておる。原田の一族には深田に蒙古軍に追いこまれて敗戦した。日田青屋あしが乗った馬は元氣な馬だったので、自然に敵の陣に入つてしまつた。主人が敵陣にはいつたので、家来も、つづいて敵陣にはいり、ひしひしとまきこまれて殆どが打ち死をしてしまつた。馬だけが帰つてきたので青屋の戦死が分つた。この青屋の馬が帰つてきたのは幸運であつた。何故なぜなれば牛馬を美食とする蒙古軍は、射殺ろした馬をくつてしまふので、日本軍を驚かせたのである。山田の家来五人が赤坂を逃げてるところに蒙古勢三人が追いかけてきた。一町程も追いかけてきたが、追いつかないので、口惜しまぎれに蒙古勢が、尻をからげて日本軍に向つて、踊つてからかつた。これをみた山田の家来は、あの奴等に追いかけて残念だ、あれを遠矢にかけるものはいないかという、一人の兵が、引きうけて、「南無八幡大菩薩、願わくばこの矢を敵に当てさせ給え」と念願して矢を射たところが、あやまたず敵を射殺ろしたのだ。日本人はどつと笑い声を出して、はやしたてたが、蒙古勢は返答もなく、負傷者をせおつて逃げていった。

然しながら、蒙古勢は次第に強くなつてせめてきて赤坂の松原の中に陣をしいた。日本軍勢は、ひきさがつてしまつて戦うものといなかつた。

以上八幡愚童訓から引用したのだが、不振の日本軍の中にいて、竹崎五郎季長すえながとその手勢五

騎は、この文永のまけ戦の中で高名をたてた一人であった。

十月二十日の朝、竹崎季長は箱崎方面の陣地に配下としていたが、元軍が博多の方面に上陸してその先鋒は赤坂に対したのでその方面の戦闘に従った。

この時の竹崎季長が戦ったことを絵師に命じて絵巻にかかせ神社に奉納した。これが、八幡愚童訓と並び称される。当時の文献「蒙古襲来絵詞」である。

博多から、住居神社の鳥居の前をすぎて、赤坂に向かう途中で、菊地武房という武士が太刀と薙刀に首を二つさし、勇ましい姿で帰陣する姿に接したので、天晴れの勇士よ、自分もそれに負けるものかと竹崎季長は勇氣百倍するのだった。

但し季長は自分の軍功のみをあせるのに急だった。この文永の役では誰しもそうであったのは勿論だが、弘安の役では多少ことなつて、集団的な戦術を日本軍もとつて、大いに元軍をなやませたが、これは後日にゆずる。

従つて竹崎季長は、一門の長たる総領の指揮にも従わず、合戦にさいしては家来は五人というのだから珍しい。その代り季長の戦いは、一人の勇者が、如何に集団的戦闘に戦かつたかという最後の日本武士の見本ということが言える。

元軍は鹿原そはらに陣をとり、大將は高い所におつて、攻撃の時には銅鑼鐘どらかねをたたいてわめきたて、逃げる時には太鼓をたたきたくという。中には死んだ人間の腹をあけて、肝を取つてのむ、蒙古軍に

は日本軍もおどろいたらしい。もとより牛馬をうまいものとする軍勢だから、驚く方がおろかだと、八幡愚童訓は書いておる。

このような戦いの中にかげこんだ竹崎季長こそ哀れであった。家来が誰か先きがけしたと証言する人をたててから、合戦してはといさめたが、

「弓箭きゅうせんの道は先を以つて賞とす、ただ駆けいれ駆けいれ」

五人の家来に号令して、元軍の真只中にかけていったが、家来は忽ち負傷し、自分の馬はいられて、はね廻わるのみであったが、幸にして肥前の白石六郎の家来が、大勢かけつけてくれたので、からくも一命は助かった。

何故この竹崎季長は、蒙古軍勢の、銅鑼や太鼓でじゃんじゃん騒ぎをする軍勢の中に、ただ一騎ともいふべき格好でとびいったのであろうか。それは季長は従来の戦闘方法が先入感となつて、急に戦術に対する頭の切りかえが出来ていなかったからである。

軍功の種類には四種類あつた。

(一) 先がけ。他人よりさきき、敵陣に打ちいることで、名誉一番である。先述の竹崎はこれを目的としていた。

(二) 手負。自分のうけた傷のこと。討死、分捕より軍功は軽いが、戦功の一つで、竹崎季長は自分の手負いを大将景資に注進しておる。

(三) 分捕。これは敵の首を分捕ることで尋常の勝負で生けどった首のこと。死んだ敵の首を死骸からとるのは、拾い首といって武士の恥辱とした。

(四) 討死。重大な戦功の一つである。

これらの中で、分捕りと討死が最も重要な軍功であった。

(註一) 「孫子」訳者村山孚

(註二) 源平盛衰記

(註三) 蒙古襲来 中央公論社

#### 四

八幡愚童訓は竹崎季長の戦功の外に、菊地次郎のいくさぶりをかかげておる。

蒙古の軍勢は、赤坂の松原に陣をしいてしまったが、日本軍は、いくさのやり方が違うので、茫然としてこれをみているだけであった。これを残念至極也と思ったのであるう、菊地次郎は、百騎ばかりを二つに分けて、押しよせて、散々に奮斗した。家子郎党は、多数うたれてしまったが、菊地次郎だけはどうしたことか、死人の中より馳け出して、敵の頸を沢山とって帰ってきて功名



をあげた。

この時、菊地次郎は、もし褒賞にあずかったら、一番最初に頂いたものを八幡神宮に奉納しようと思心した。後鎌倉に上つて甲冑を賜つて、自分の面目を伝えるため、子孫に残したいと思つたが、神恩の深きを思つて甲冑を八幡神宮に献納した。

この外少式入道の子息、三郎佐衛門尉景資と平四郎入道、手光太郎左衛門等が奮戦したが、いくさの仕方が違つたので、てんで問題にならず、蒙古勢は赤坂から、鹿原そはる、百道原ちもじばるを占領してしまつた。

可哀想なのは、異国合戦など、何事ならんと、のんきにかまえていて、避難しなかつた非戦闘員であつた。八幡愚童訓によると「家々に打入つて、数万人の妻子共を奪い取りける」とある。

この日の合戦は午前十一時頃より始まつて日のくれ方迄つづいたが、日本軍は夕方になると、水木城に仕方なく兵をあつめた。八幡愚童訓はこのところを「武力及び難ければ、水木城にひきこもりささえてみると、にげ支度をこそ構えけれ、之を聞き、我れ先きにとおちしかど、独りも戦う者なし」と書いておる。

しかしこのような戦況の中にあつて、前述の少式三郎左衛門景資は、思わぬ戦功をたてた。「蒙古の大將軍と思しき、長七尺ばかりの大男、ひげはへその下まで生い下がり、赤い鎧に、葦毛の馬にのつて、十四、五騎をうちつれ、兵率八、七十人を伴にしたのが戦場に出てきた。その時少

式三郎の旗の上を鳩がとび廻ったので、これこそ、八幡大菩薩の御陰なりとたのみまいらせた少式三郎は、馬乗り弓の上手の者であったから、名馬にのると一鞭をくれてはせまいって、よくひいて矢を放つと、先頭の大男の真中あたり、馬から逆さになって落ちた。あわてて従者の郎党共が大男を抱えて紛れて逃げてしまった。大将の乗っていた馬だけが、日本軍の方へかけてきたのでこれを捕えたが、葦毛の馬で金作りの鞍をおいてあった。後でこれを調査したら（蒙古の捕虜よりきいたのである）蒙古の「一方の大將流將公の馬」であった。

流將公とは、蒙古本軍の左副元師、劉復亨のことで、敵方の記録にも、劉復亨は流れ矢にあり、先きに船に登るとしてされたと言うから、これは少式三郎の手柄であった。

しかしこの手柄が戦局を左右するというものではなく、蒙古軍は博多の街を占領し、さらに箱崎方面へも進撃しようとしていたのである。

箱崎では八幡宮を守る人々は御神体を敵に汚がされたならば一大事と思っていたが、たのみにしていた軍兵共が、水木城をさして、逃げていってしまったので、朱塗の唐櫃に、御神体を移し、涙もろとも宮を出た。何分にも火急なことなので、輿こしにも御神体をのせることも出来なかつた。東南の山手の宇美うみの宮へといそいで逃がれたが、そこには、皆な逃げた後で誰れもおらず、仕方がなく、御神体を守る人々はさらに山の上の極楽寺へと避難をした。

極楽寺の山の上から下をみると、箱崎、博多の街は猛火に包まれて赤々と燃え、浜の波頭の

み白々とみえた。やがてそのうちに雨がふりだして、山の峰や谷にかくれておる人々の涙をそそるであつた。

さて日本軍が一時引き上げ穴水本の城というのは、

「水木城と申すは前深田にて路一つあり、後は野原広く続いて水木多豊なり。馬蹄飼場よく兵糧倉庫あり、左右の山あい三十余町をとうして、高ききびしくきずいてあつた。木戸口には磐石門をたてていた。今はその礎石ばかり残つておる。南は山近く梁川が流れておる。北の山のふもとには、深く広く堀をほつて、二、三里廻つていた。これは左から、異賊を防がんとための大城郭であつた。此のようなゆゆしき城であつても、博多、箱崎をうちすてて落ち入つたので、末はいかになりゆくかと、泣きまどい、悲しまざるぞなかりけり」と八幡愚童訓は示しておる。

「さる程に夜もあければ、二十一日の朝の海の面をみやるに蒙古の船一艘もなく、皆々馳せ帰りけり」と八幡愚童訓では、この箇処で神風が吹いたとか、台風がふいたとかの記述はない。

然し高麗史によると「夜大風雨にあい、戦艦岩崖にふれ多く敗る、金金侏（高麗の將軍）溺死す」とあるから台風は事実だつたに違いない。然かも、蒙古軍の戦歿または行方不明は一万三千五百人に上つて、全軍の約半数を失つたことになる。昨日の勢にもいらず、蒙古軍の敗戦だつたことは次ぎの八幡愚童訓の記述によつても証明が出来る。

「今日は九州全体の人々は、皆滅亡と昨夜からなげきつつ朝を迎えたのに、蒙古の軍船がみな帰

つてしまったのは不思議なことよと、泣き笑いの色を顔に出てやっと、人心地がついた。所が蒙古勢のにげおくれた兵船一艘が志賀嶋をさして逃げようとしていたが、誰もおそれて、日本軍からは手だしをしようとしなかった。船の蒙古軍はその中に手を合せて、日本軍を拝み始めたが、原因がわからないので、ためらっておると、日本軍が助け舟もよこさないのは、降参も許さぬ気持だと思つたらしく、かれこれする中に大将と思しき將軍は入水して相果ててしまった。残つた蒙古軍は水を渡つてきて、弓箭をなげすて、兜をぬいで降参の意をしめた。その時になつて、始めて蒙古軍の意志がわかつた日本軍は、我も我もおしよせて、高名顔に、蒙古軍を生捕りにしたが、残つた兵は、浜辺にならべて二百二十人ばかりを斬つてしまつた」

この頃になると、蒙古が退散したと、此処彼処より人々が博多箱崎の焼け跡に集まりはじめた。むろん箱崎八幡宮は敵の手で全焼してしまつていた。親は子をたずね、夫は婦をもとめた。家は焼け、資財は盗みとられて路頭にたたずむばかりであつた。折りしも、焼跡の灰が、無情な浜風にふきあげられて空をおおい、目もあてられぬ有様であつた。只々茫然として思うのは、一夜でもつて、かほど変りはてるものか、うめいてみると、昨夜難をのがれた人々が、街にかえつてきたのか、家も跡かたもなくなり、噫々あさましいと、同じ思いの人々が沢山いて、武力つきて、かかる大敗北では、国家のゆくすえが思いやられるとただなげくのみであつた。

後世、恐ろしいもののことを、「むくり、こくり」と言うようになったのは、むくりは蒙古の

こと、こくりは高麗のことであると云われておる。即ち、

「九州風俗記という物に、此の国の俗、物のおそろしき事を（むくり、こくり）と言う。古老伝えて曰く、文永のむかし高麗人の案内にて、蒙古の賊が襲いし来し時、北九州は皆のりとられ乱暴狼籍限りなく、人家は草木までも残さじとて、民屋を焼きはらい、逃げまどう妻子春属一人ものこさず、山谷にかくれたる者までさぐりもとめて、とりつくしにけり。近き頃まで、其処此の山間、谷底、洞穴のうちなどに其の時の跡あり。昔よりこのかた今に至るまで、此の国の女児どもは（むくり、こくり）と言つて恐れけり」

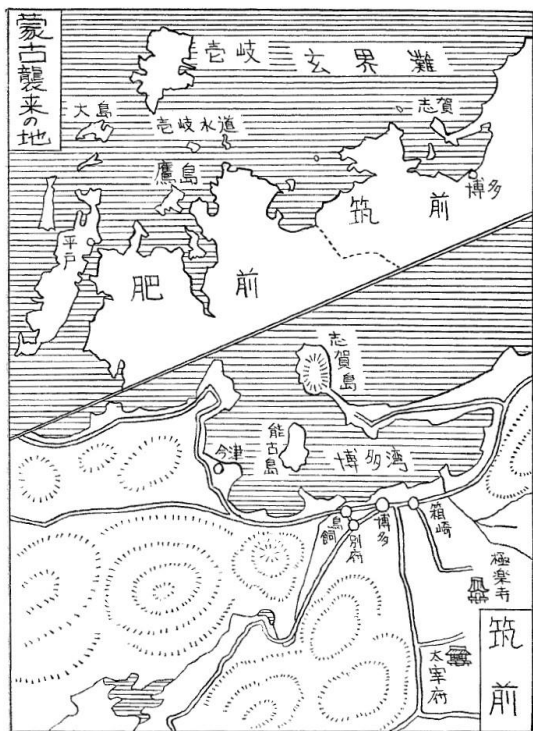
然かもこの「むくり、こくり」の言葉は、九州だけではなく、全国的に伝わった。

「蒙古人、高麗人、筑紫に進入して多く人を殺す。村民、野夫、妻子をたづさえて、にげて深山に入る、九州の騒動のこと、京師関東に達し、庶民大いにおそる、時の人此の乱を以て蒙古国を爾して、俚俗とよんで、むくり、こくりとて曰へり」

（註一） ムクリコクリ、（一）むくりは家古、こくりは高麗の義、後宇多天皇の御代に我国に襲来

したよりいうと。（二）恐ろしい物にたとえる、昔小児の啼くを止めさす時におどしてかく

言う、これは平凡社刊の大辞典二三—二四にのせるところである。









## 四 条 金 吾

一

「頼基なんとか、今日は言いたげな顔ではないか……」

名越光時は出仕した四条金吾頼基の顔を見ると早速に声をかけた。頼基は主人の言葉に、すぐと返事をせず、ためらって黙っていた。

「昨日、極楽寺が焼け落ちた」

名越光時はぼつんと言うと、金吾頼基の顔をじつとみた。

「誇法によって、良観上人の寺がやけたと申しにきたのではないか、どうじゃ……」

いちいち先をみこしての主人の言葉であった。

「殿、私めはまだなんとも申ししておりませんが……」

「そうかなあ、お前の顔は去年のいつだったかなあ、あの時の顔にそっくりだから言ってみたの

だ」

「あれは、去年の九月の事でございます。私に、何故お前みたいな忠臣が、主人の言うことをきけぬのかと申されましたので、失礼ながら……」

「わかった、わかった、汝の法華信仰のこと、その時の顔と、今日もそっくりなので、再び法華信仰のすすめめに、今日は参ったのであろう。昨日の極楽寺の焼失、法華宗徒にとつては喜ばしいことだろうな」

「どう致しまして」

金吾は殿に言葉を返しながら言った。

「これが昔ならば、法華宗徒が極楽寺に放火したなど、またまた世評されて、極楽寺とは、眼と鼻の近きにすむ金吾頼基、今頃は門註所におったかもわかりません。それを思いますと、有難いことと思っております」

「皮肉なことを申す奴め」

主人光時は一寸にがりきつて言葉をきつた。

四条金吾（註一）は主人光時の心中はわかつていた。

建長八年二十六歳で大聖人の辻説法によつて改宗し、それ迄禪をやつておつた時の友人である、進士善春、荏原義宗、池上宗仲、工藤吉隆、等々の入信の機をつくつたのは頼基であつた。

そして大聖人の法難に際しては殉死の覚悟を示したことは、大聖人門下の美談として今なお語りつたえられておる。また大聖人佐渡在島中は、使を送って供養をささげ、自分自らも文永十年の五月には、佐渡に大聖人さまを御見舞申しておる。しかも大聖人畢生の大作たる「開目抄」二巻は、この四条金吾頼基に与えられた御書であることを思えば、四条金吾の信心のありかたがわかると言うものである。

ところがこの四条金吾にも悩みがあった。それは主人と信仰を異にすることであつた。主人は名越光時といつて、北条時頼の父時氏とは従いとこ兄弟であり、鎌倉の名越にその屋敷があつたので、名越氏を名乗るようになったのである。極楽寺を建立した北条重時には、光時は甥になるのである。そのような関係から、金吾頼基の主人たる光時は、極楽寺の大信者であつた。その極楽寺が焼失した（文永十二年三月二十三日極楽寺焼失）次の日の出仕であるから、法華の強信者といわれた四条金吾の口から、何がとび出すか、主人光時にしても緊張の一瞬である訳だ。

「法華の強信者として我れも許し、主人たるこの光時も、やむを得ぬとほとほと観念しておるのだ。極楽寺の昨夜の焼失事件について法華宗からの御意見を、本日は先きにきくことに致そうか、なんとか申してみよ」

案に反して、主人光時からの催促である。言つてよいものか、どうかと一時迷つた。

韓非子の説難篇に「いったい君主を説得することがむずかしいというのは、自分の知恵によつ

て説得することがむずかしいというのではない。また自分の弁舌によつて自分の意志を明確にすることがむずかしいというのではない、また、自分が気おくれすることなく縦横に弁舌をふるうことがむずかしいのではない……それは相手の心を理解して、それに自分の意見を適合させるということにあるのだ。相手が名声を得たいと望んでおるのに、それに金儲けの方の話をしたら下品な人間と自分を思うだろう。逆に相手が金儲けに夢中なのに名声を得る法を説いたら気がきかなくて実情にうとい奴だと思われる。又相手が本心で金儲けを望んでいながら、名声を求めるふりをしてゐる場合に、名声を得る方法を説いたら、うわべはその人を用いるふりをしながら、実際にはうとんずるだろうし、反対に金儲けの方法を説いたならば、こつそりその意見を採用しながら、表向きはその人を排斥するだろう」(註二)

と云うことがあるが、今の金吾頼基の場合は、以上の名声という言葉を理想的な成仏論、そして金儲けということを俗習的な利益論とおきかえて考えてみると、同様なことと言えるのである。

主人名越光時は念仏を唱えて何を願つておるのであるのか。何故南無阿弥陀仏とは、ごろも違ひ、唱える気合もことなる南無妙法蓮華經が光時の口から出ないのか。

名越光時は南無妙法蓮華經というような氣勢のよい題目の出る人ではない。失意の人で実はあ

つたのだ。

光時は昔は鎌倉四代將軍頼経の近習として寵愛を受けておつたが、寛元二年頼経は執権経時のために將軍を廢された。頼経は將軍を廢された後は、鎌倉に住し、自ら持仏堂に入道の身としていたが、胸中に憤懣ふんまんは察せれるものがあつた、と同様にその近習だつた光時も楽しまないところがあつたに違いない。

執権経時は二十三歳を以つて寂したので、その弟時頼この時二十歳が執権職となり、政村は評定衆の筆頭となつた。光時よりみれば、時頼も政村も伯叔の間である。心たいらかざるものがあつたらう。そしてその光時は失意の前將軍頼経の邸をたずねることが度々であつたので、

「光時おごる心ありて、我は義時の孫なり、時頼は義時が彦なり、光時、將軍の権をとらんと企てけるほどに、將軍も光時に心をよせられけるにや」(註二)

「北条朝時の子光時、頼経に寵あり、おもへらく、時頼は義時に於いて曾孫なり、我は親しくその孫なり、我をこえて職を奸すべからずと、潜ひそに時頼を図り、頼経その謀にあづかる」(註四)

頼経は建長三年了行の乱(註五)にも関係があつたので、光時は時頼から嫌疑をうけて、剃髮して幕府の断罪をまつたが、幕府は光時の死一等を免じて、伊豆国の田方郡の西部その昔北条義時のおつた江馬という所へ配流の身となり、名越光時が江馬光時とも言われるようになったのである。

光時流罪という一家の危機にあたり家臣は殆ど心がわりをして主君光時から離れていったが、四条金吾の父頼員よりなずは、最後の一人として主君に従って伊豆に赴き、配所の月を主君とともに眺めて、鎌倉武士のために大いに感慨をみせたのだった。

其後光時は蟄居ちつきよを赦されて鎌倉に帰り、再び幕府に出仕するようになり、四条金吾頼基が、光時に父に代って仕えるようになったのはこの以後のことである。

しかるに光時は再び思いもかけぬ騒動の禍中にまきこまれる破目となった。それは、大聖人さまが予言をした自界叛逆の難の、北条時輔の乱である。即ち文永九年の二月、塚原問答の後で、佐渡の代官本間六郎佐衛門に大聖人が注意をした、時輔の乱であった。即ち北条時輔は京都六波羅の管領であったが、弟である時宗が執権となったのを不満として叛逆を京都に企て、これに鎌倉で呼応して応じたのが、光時の弟達であった。

未だ京都の変があらわれない二月の十一日に光時の弟は三人迄も、時宗によつて誅殺されてしまった。京都の時宗の兄時輔が討たれたのは二月の十五日であるが、鎌倉はこれより四日早い二月の十一日叛逆人時輔に味方したものととして光時の弟、時章、時幸、教時の三人が、殺された。時幸は自殺ということだが、光時の直弟時章が殺された後で、謀叛に加担しなかったことがわかったという、そそかしさであった。それ故、時章を殺した討手の五人の大將たる、大倉二郎左衛門、渋谷新左衛門、四方田滝口左衛門、石川神二左衛門、薩摩九郎右衛門三郎たちは、不都合な

りとして首をはねられてしまった。

「時章寛元三年四月八日尾張守に任じ、同四年二月二十二日守を去る。弘長三年十一月出家法名見西、文永九年二月十一日誤つて誅せらる。歳五十八、打手五人は斬刑に処せらる」(註六)

教時を討った方も、これも時輔謀叛の確証がなかったのか、「教時の討手は罰もなく賞もなし、人之を笑う」と当時評されていた。

自分の弟三人が、天下謀叛に座したのだから四条頼基の主人光時も安穩ではなかった。召捕のものがその屋敷をとりかこんでものものしいありさま、まさに風前の灯火というところであった。この時、四条金吾頼基は伊豆の江馬(前述)におったが十日の申の時(午後四時)にこのことをきくと六時間で、箱根山を馬越えして、その夜の中に鎌倉に到着して、光時が自害したならば、自分も追い腹をかく八人の中に加つてその忠誠を示したのである。

大聖人は佐渡より帰えられて、殿中の対面をとげて、身延に入山された。

大聖人の宗旨が、北条時宗より公許されるのも同然である。だから四条金吾頼基は、大聖人身延入山後の文永十一年の九月頃、或日意を決して、主人光時を法華経をもって折伏したのであった。

半年後の文永十二年の三月二十四日、極楽寺が焼失したので、四条金吾は再び御主君光時殿を折伏しようとしたのである。

「御主君にかく催促されて、黙しておつては、法華経の折伏の精神に反しますので申し上げます」

「なんとでも、言え、きこう」

「仏法は俗に道理文証も現証にはしかずと申します」

「現証とは証拠をさすのだなあ」

「昨夜の極楽寺の焼失は正しく念仏無間地獄のしるしと申してさしつかえがございません。大火のことは仁王経の七難の中の第三の火難、法華経の七難の中には第一の火難であります。火はものをやきつくすをもって性となすところありまして水をば焼くことが出来ません。聖人、賢人の家を焼くことは出来ません。その昔釈尊の時代に、王舎城と申す大城がございまして在家九億万家でございましたが、七度までも大火がありました、民のなげきとなり民百姓は逃亡しようとし、王様も大変になげかれましたが、その時に賢人あつて申しますには、七難の大火とは、聖人さり、王の福のつきる時に起るものである。ところが、この大火は民百姓の家をやいたが、王城に近づいておらない。故に、王のとがではなく、万民のとがである。故に万民の家を王舎と号したならば、火はおそらく神名におそれて焼けるようなことはありませんまいと言ったので、それより後、民百姓の家まで、王舎城と名づけたところがその後火事がなくなつたと言ふことでございます。今極楽寺の良観上人は殿自らも鎌倉の生き仏と崇められておりますが、聖人の家に大火な



しという言葉より考えますならば、良観上人は果たして如何なる御方でございましょうか。經文よりは証拠が大切とはこのことを申すのでございます」

「法華宗徒というものは料簡のせまいものじゃなあ……」

光時はにがりきつて、声を放った。

「金吾、よくきけ、我が国は古来から、焼けぶとりと言う言葉があつて、焼けた方が却つて、後から立派な物が出来ることにきまつておるのだ。極楽寺も、今では、て、ぜ、まで困つておつたが、叔父重時殿の建立では、どうすることも出来ずにいたが、今度は新しく立派に寺が建立されるだろ……」

「お寺は立派に出来るとなれば、それは結構でございましょうが、そんなことは末の末の話でございませう」

「殿、ようお考え下さい、殿は毎度、良観上人を釈迦仏のごとく、阿弥陀仏の如く信賴すると申されておりますが、その結果は如何でございませうか。御舎弟三人を六波羅さま御謀叛の件で一時に失つて、去年三回忌を内々にとりおこなつた仕末ではございませんか、念仏無間は我が大聖人さまの法門でございまして、この金吾の言葉ではありません。事實は……」

「言うな金吾、それは世の移りかおりで仕方のないこと、武士として生きるもの、時勢にのるものあり、時勢にはずされるものあり、武運つたなきものの定めと申すものだ」

「違いますぞ、殿、それは世法の話です」

金吾頼基は臆するところが微塵もない。

「世法……というか、では、如何に仏法では申す」

「武運つたなしなぞとは私の言葉ではありません、仏は殺されませんぞ」

「なにを馬鹿なことを申す」

「私達の大聖人さまをみて下さい、身に一介の寸鉄もおびずして、竜ノ口に命をすてなかつたでございませんか、聖人に横死なしと申しまして、聖人賢人は横死をしないことになっております。それでなければ仏と申すことが出来ません。その仏になる道は南無妙法蓮華経しかありません。殿は念仏を唱えていつもいつも、自分の思つたこととは反対の方向にいつております。只今より南無妙法蓮華経と唱えたまへ、それが横死せられた御舎弟御三方に対する真の供養にもなるのであります。では何故南無妙法蓮華経と唱えると言う道理は去年申し上げたことをくりかえすばかりでございませぬ、ようくお考えをいただきたいと存じます」

にがりきつた主人光時の顔が、四条金吾の前にあつた。

昨年九月の始めに、思いきつて、法華経の精神を主人光時の前に披露して失敗した。しかし成功せずとも、四条金吾にとつて嬉しいことがあつた。

それは、主人光時を折伏したことを、身延の大聖人さまに知らせたのである。すると間もな

く、その折伏をほめた御手紙を大聖人さまから頂戴した。

それには、法華經の折伏の精神をもつて、主人に諫言したので、誇法の与同罪をのがれることが出来たことは目出度いことだ。但しこれから口をつつしんだ方がよい。諸天善神の御加護はあるだろうが、光時の家来の中には、それを口実にして、四条金吾の敵にまわるものが出てくるであろうから、今後は大いに注意をした方がよい。夜の宴会は断然やめなければいけない、昼の宴会だといって気を許してはならない。酔っておらなければ、そうそう敵もねらう機会があるものではない、とこまかい注意を大聖人さまから頂き、「只女房と酒うちのみて、何の御不足あるべき」と言われたのは、実にこの手紙の中であつた。去年それ程まで注意されたが、極楽寺の焼失によつて頼基は、主人の前でだまつておる訳にはいかず本日の折伏となつたのである。

(註一) 金吾、鳥の名、よく不詳をさける、漢代この名をとつて執金吾の官をおく。金吾は足に黄金のメッキした銅製の棒で、執金吾は出駕にともする時、この棒をもつて護衛するから名づけたもの。又漢の武帝の時、宮門を守り非常を警戒する役となした。日本の左衛門府の職にあたる。

(註二) 韓非子說難篇

(註三) 保歴間記

(註四) 大日本史

(註五) 建長三年十二月二十六日、了行法師外四名生けどられる。謀叛の企て露顕す。

(註六) 評定伝

一一

建治三年の六月二十三日のことである。

梅雨にぬれて、色が七色に変わるといふ山あじさいの花が、鎌倉長谷の四条金吾の屋敷に見事に咲いていた。

その四条金吾の屋敷に、殿の上使として前ぶれもなく、島田左衛門入道と山城民部入道の二人が訪ずれた。

二人とも四条金吾の上役とはいえ、日頃からの知り合いであるが、上使ともなれば、それ相当の待遇をせねばならなかった。

島田、山城の兩人は型の如く、上段の間に腰掛けて威厳をみせていた。

支度の整った金吾は、その前に出ると、上使の趣きをかしまつて承った。島田左衛門がよみあげた。

「一、其の方儀、去る六月九日叡山の学僧竜象房、長谷桑ヶ谷において説法談の砌り、兵器を携へたる徒党をひきつれて、その座に闖入致しあまつさえ、悪口狼籍の段まことに不都合、同席の人々の証言あるによつてこれを糾明す

一、極楽寺良観上人は執権職北条時宗殿を始め、其方の主人北条光時殿すら世尊の再来と之れを仰いで信伏するに、汝頼基此の聖僧を中傷するは只々不都合の至り重罪至極なり

一、以後竜象房極楽寺良観上人を釈迦仏弥陀仏同様に仰ぎ奉ること

一、是非善悪を問はず、主君の仰せに従うこそ、仏神の心に叶い、世間の礼儀とする、よつて以後頼基は主君光時の仰せに従つて、念仏申すべきこと

一、右の条々堅く守るべきの起請文をさし出すこと

読み終ると、島田左衛門入道は、うす笑いを面にかべて四条金吾の顔をみた。本日上使にたつた島田、山城の兩人は、金吾頼基の法華信仰をきらつて、これを陥しいれようとする張本人であつた。

建治元年の秋頃のこと、金吾頼基は意を決して、主人光時を折伏したことがあつたが、却つて不興をこうむり、又島田、山城等の中傷にあつて、建治二年にはその領地を主君光時より、越後にかえさせられようとした。この時金吾頼基は大聖人の指図をうけて主君光時にこういつた。

「近く第二回目の蒙古襲来というような重大事が世間に起きるような気がいたします。私はそ

の時は、あく迄御主君のおんために一命をすてる覚悟でございしますが、その時に越後から鎌倉に馳せ登るのでは、道が遠いうえに、道中で如何なる支障が起らないとも限りませんので、たとい領地を召し上げられましても、この時勢の物騒な折でありますので、今年主君のお側をはなれず、万が一の時は自分の一命をささげる覚悟でございします。これ以外どのような仰せを蒙むろうとも恐れはいたしません」

と主君光時に断言して、越後の領地がえに応じなかつたのである。

ところが金吾頼基の法華信仰をにくみ、その折伏精神をきらうものには、よい口実が出来たのである。

四条金吾が、領地替えをきらつておるのは、主君の命令を軽ろしめるものである。そのような我儘な者には恩恵を中止した方がよいと家中の者から意見が出た。

そして四条金吾は謹慎の身となったが、四条金吾をにくむ者にとつては、謹慎ぐらいではおさまらない、ついに上使が、四条金吾の屋敷にくるといふことになったのである。

島田左衛門入道は、四条金吾に言葉をかけた。

「上使の趣きしかと承知したか……」

「承知いたしません……」

四条金吾は、はつきりと拒絶した。

「なんと申す」

島田は自分の耳を疑うような顔をしてもう一度四条金吾に念を押すのだった。

「特に第一条などは、全く身におぼえないこと、承知いたしません」

四条金吾の返答は、依然としてはつきりしていた。

「承知いたすも、致さぬもない、御主君の御命令だ」

「御命令と申されても身に覚えのないことは承知いたしません」

四条金吾はあく迄も、主張をまげなかった。

「では、こう致そう、御法に従つて後程、申しひらきの儀は、逐条書面ちくじょうをもつてなされたらよろしい。だが、金吾殿、承知いたさぬという御返答をもつて我等兩人、御主君の許に帰ることは出来ぬ、よつて、さしあたり、この場で御貴殿の申しひらきを、お聞きいたそう、それならば我等兩人も御主君に拝顔いたすことが出来るが、承知出来ぬの返答だけでは我等、この場をひきあげることが出来ぬ、いかがなものだろうか」

山城民部人達が、分別かんべつくささうな顔で、四条金吾に言った。

「よろしい、申しひらきを聴いてくれると言うなら申し上げよう、とくつときかれない」

四条金吾は怒りを腹の底にしずめて口をきった。仕切且戸の向うに、女房のいる気配を感じながら金吾は言葉をつづけた。

「竜象房の法談の席にて、乱暴狼籍の由であります、この条は跡形もないそらごとで金吾自身驚いております。即ち、このことの起りは、去る六月九日、日蓮大聖人の御弟子で、三位房という御方が、この屋敷にまいりました。そしてこの近くの大仏の門の西桑ヶ谷に止住する竜象房というものが説法をしようのには、現当のために仏法に不審のある人は、来たつて問答したまいと申し、鎌倉中の人々が釈尊の如く貴び奉りますが、誰一人として問答する人がいないので、自分はこれから出掛けていつて、問答をして、一切衆生の後生の不審を晴らしたいと思うので、一緒に行かないかと誘われましたが、丁度、御主人の御用を申しつけられておりましたので行きませんでした」

「では、御貴殿は一度も竜象房の法談をきかないと申すか」

山城入道が、返答いかにとつめかけた。

「いや、拝聴いたしました」

「そうれ、そこで、三位房に味方して乱暴をしたのではないのか」

「とんでもありません。法門は度々拝聴にまいりましたが、相手は僧侶、自分は在家でありますから、質問などは一度も致しません。まして悪口雑言などは思いもよらないことであります」

「しかしながら、徒党をくみ、兵杖をたずさえて、法談の席に乱入したとは訴えがあったことだ。それでも嘘と申すか」



「嘘でございます。その法談の席におった人々は、私の全部知っておる人々ですから、その人々をよんで下されば、事の真相は明かになることでございます。ましてや、私はその法談を拝聴して帰りますと、一部始終御主君光時さまにお話し申し上げております。これはこの頼基を嫉んだものが、御主人に嘘を申したのに違いがありません」

この四条金吾の答弁には、使者の両人も一寸参つて、暫し口をつぐんでしまった。

しかし念仏の信者たる島田、山城の両名は、法華の信者たる四条金吾が憎くてならない。それではとばかり、次の問いを發した。

「第一問の申しひらきは、わかつたとしておこうが、貴殿が御主君光時さまを始め御執権職時宗さまさえも世尊の出世と尊敬せられる極樂寺の良觀上人を何故尊敬しないのか、これ詰問の第二條である、これについては、事実であつて申しひらきの言葉もなからうが、どうじゃ」

「どうじゃ……」

と使者二人は、声を荒々しくして四条金吾をせめたてた。

時に四条金吾は少しも臆せず答えた。

「私は日蓮大聖人をもつて、主師親の三徳を備えられた御方と存じ、その大聖人の弟子をもつて任じておるものがございますが、その大聖人さまは知つての通り、去る文永八年より文永十一年の間、佐渡の島に御配流のうき目をみました。然るにその佐渡の国は大聖人さまに対して、大聖

人さまのお弟子を近づけないようにしたり、港の出入の制限を激しくしたり、町の交通をとめたりして、食料せめをして、大聖人さまを餓死させんと企て、ついには大聖人の首をはねよと訴状をかいたのは良観房です。これが八斉日夜の説法には生き草さえきつてはならぬと説教する僧侶の企てることでありましょうか。

そもそも事の起りを申しますならば、良観房が常の説法に、「自分は日本国の一切衆生に八斉戒（註一）をもたせて、日本国の殺生や天下の酒をやめさせたいと苦心しているのに、日蓮房が邪魔をするので果すことが出来ない」と嘆かれたのを、我が大聖人が聞かれて、

「なんとかして良観房の大慢心を倒し、無間地獄行きの大苦を救つてやろう」と大聖人がおっしゃったので、弟子どもは、大聖人さまのおっしゃることは法華経の行者としての大慈悲の現われでありましょうが、何分にも、良観上人は、日本国の人々の尊敬を一身にあつめておる上人ですから、たやすく、そのようなことは言わぬようにと、頼基を始めとして法華の信者一同が申し上げた程です。ところが、文永八年六月十八日の大旱魃の時に、良観房が祈雨をして万民をたすけようと言われたのを、大聖人さまがきかれて、「これは小事なれども、此のついでに日蓮が法門の邪正を万人に知らすべし」となされて、良観房の所に使いをつかわして、「良観上人が七日の内に雨を下す程ならば、日蓮が念仏無間と申す法門をすてて、良観上人の弟子となつて二百五十戒を保つべし」と良観房に申しいでたのです。良観房は、この申込みを非常に喜んで七日の内に必ず



えて、大聖人さまの死罪を二度も企てたのであります。この事柄の一部始終を、この四条金吾は直接みたりきいたりしております。ですから畏れ多い御主君光時さまの仰せに対しましても、外のことならばどんなことでも違背は致しませぬが、「極楽寺の良観房を釈尊の再来と尊信せよ」とこのたびの仰せばかりは、自ら大聖人の弟子檀那と誇っておるこの四条金吾は絶対従いかねるものでございます」

自らの信念を上使の前に堂々と披瀝して少しも臆するところのない四条金吾、さすがに、文永八年九月十二日の竜ノ口の難の時に、大聖人に万一のことがあつたら、腹切らんとした風貌がまざまざと示されたのであつた。

島田、山城の二人も、四条金吾の誠意に押されて言葉の発しようがなかつた。四条金吾は尚も言葉を つづけた。

「良観房を世尊同様尊敬せよとの仰せに従いませぬこの四条金吾が、なんで竜象房を尊敬出来る筈がありましようか。第三条の申しひらきは略さしていただきます。さて第四の「是非善悪を問わず、主君の仰せに従うべきこと等々については、是れ最第一の大事でございますので、決して私の言葉をさしはさまないで申し上げたく存じます。孝経に（註二）「父が道を誤つた場合は子

は父と争い、主君が道を忘れた場合は、臣は君と争わねばならない」とあります。伝教大師は「道にそむいた場合、子は父と争わねばならない、臣は君と争わねばならぬ。親や主君が道をそむいているのに、争わないのは孝でもなければ忠でもない、弟子もまた同じように、師匠と争わねばならない」といわれ、法華経には「我は身命をおしまないただ無上道をおしむばかり」とあります。この四条金吾をば、御上使の御二方は勿論のこと同僚の方々は、無礼な奴としてお咎めでございましょうが、これが世間のことでしたならば、父母主君の仰せに従うのも当然でありましようが、これは出世間のことであります。重恩のある御主君が、悪法の者にたぶらかされて、悪道におちゆくのを嘆くばかりであります。その昔、阿闍世王は提婆や六師外道を師として釈尊を敵かたきとしましたので、マカダ国は仏教の敵となり、阿闍世王の眷属五十八万人も仏弟子を敵とし、耆き婆大臣ばかり仏の弟子でありましたが、最後には阿闍世王も邪義をすてて正法に帰依いたしました。その如く四条金吾も最後には、主君光時さまを救うことが出来るものかと秘かに思っております。それに法華経の譬喩品には「今この三界は皆我がものである。その中の衆生は悉く我が子である」と説かれてありますから、教主釈尊は日本国の一切衆生の父母であり師匠であり主君であります。その教主釈尊をさしおいて、我々には無縁の阿弥陀仏やその他の仏の名号を、昼夜朝夕に六万遍、八万遍も唱えるというのは不孝のいたりであります。弥陀如来の本願はもともと釈尊の説かれたものであります。私は後に自らこれを改めて「ただ我一人のみ三界の衆生を救うも

のである」と言われております。阿弥陀仏がこの日本の国の父母であるとは、いずれの経文にもございません。それなのに今後この四条金吾に念仏申すべしとは、道理にはずれたることを強いるものであります。

そもそも人皇第八十二代隱岐法皇の御代に、新たに禅宗、念仏宗が起つて、真言の大悪法とともに天下に流行いたしましたので、天照太神、正八幡宮の百王百代までもとの御誓いも破れて、社稷しゃしょくもゆるぎ、王威もつきて、天照太神、正八幡宮の御計いによつて、関東の権の太夫義時が国務をとるようになりました。(註三)

然るに、この真言、禅、念仏の三宗が、其後関東に流行いたして天下上下の帰依するところとなり、法華経の教をすててかえりみませんので、法華経を食とし正直を力とするところの、梵天、帝釈、日天、月天、四天王等が、怒りをなして、前代未聞の天変地天を起こし、果ては隣国の蒙古国に仰せつけて、日本国の覚醒を促したことは、天下万民の知るところであります。これは大聖人一人よく御承知のことであります。このように賞罰おごそかな法華経でございますので、この四条金吾は、御主君が法華経を信ずるようになり、みちびき申し上げたいと思ひまして、いろいろな妨げをしのいで今日迄折伏の精神をもつて御奉公を申し上げてまいりました。私をざんげん讒言する人こそ、主君に対して不忠のものと申さねばなりません。私が御主君の側をさることは、主君を無間地獄におとすことになりませぬ。私一人だけ仏になつて何の甲斐がございませうか。良

觀房の保つところの二百五十戒と申しますのは、小乗戒と申す戒でございまして、この小乗戒はフルナという羅漢が、諸天のために説かれたのでありますが、浄名居士はこれを破して「穢れた食物を宝の器うつわにおいてはならない」と断言し、オオクツマラは文殊を戒めて「蚊や蚋あぶのような小乗の修行では大乘の空の理を悟ることが出来ない」と言われました。また釈迦仏は小乗をば驢乳と説き蝦蟇がまに譬えられました。

この四条金吾が、良觀上人を、蚊、蚋あぶ、蝦蟇あぶの法師と申しますのも、経文に明かにあつて私の言葉ではありませんから、私をお咎めあるならば、その前に経文をお咎めあつてしかるべきかと存じます。

右のような次第でありますから、私に起請文をさし出せとの御上使を賜わるのはまことに意外に存じます。この四条金吾が、所領没収をおそれ、頸切られることを恐れて、起請文を書きましたならば、御主君には忽ちに法華經の御罰があるでありましょう。何故なれば、先きに、良觀房の讒訴によつて大聖人さまを佐渡の国に流した時には、大聖人のおつしやつた如く、百日の内に自界叛逆の難が起つて、北条家一家に同志討ちが起こり御主君光時の弟、時章、時幸、教時の御三方は同時に命を失つておるではありませんか。これひとえに良觀房が御三方の命をうばつたも同様であります。それなのに、竜象房や良觀房を信用せられて、私に起請文をかかせるようなことがあれば、必ずや御主君も、法華經の嚴罰をまぬがれることは出来ずまい。

この度の頼基を讒言する人々は、このようないきさつを知らないのか、或いは知っていて、法華經の嚴罰を主君に当てようとたくらんでおるのか、いずれにせよ、この四条金吾にことよせて、主君の一大事をひき起こそうとするものでありますから、それらの人々を召し合せて、御主君の御前において、是非とも糾明していただきたいものと御返答を申し上げます」

四条金吾の御主君の面前において、召い合せて糾明していただきたいと言った時に、島田、山城の兩人の顔は、上使とは思えぬ程に、みるみるうちに真青に変わっていった。(註四)

四条金吾の主君、名越光時は其後いくばくもなくして病床に臥せる身となり、病状も思うように任せなかつたので、仕方なく謹慎中とは言え四条金吾が側近に召されるようになった。四条金吾は武道に鍊達ばかりでなく、医術をよくしていたので、主君に召されたのであった。四条金吾の丹誠こめた医術によって、主君光時の病氣も建治四年の正月になると快復し、その功によって、四条金吾の御勘氣もめでたくとかれたのだった。

しかしその回、四条金吾は受難の時期であったが、大聖人も大いに心痛されていたので、次のような御手紙を大聖人から頂戴している。

「もし、えらい人達や、えらい人達の女房たちから「御主君の御病氣は……」と尋ねられたら、誰に限らず、膝をかがめ手を合せて「私の力には及びませぬが、如何ように辞退しても強いての



仰せでもあり、御奉公の身でありますから、治療申し上げております」と髪もつくるわず、折目もつかぬ直垂したなれをつけ、さっぱりした小袖や、目に立つものなどはきないで当分辛抱しておるがよい。御主君の側におる時は主君から与えられた部屋だから心配はあるまいが、貴殿を憎む者は、夕方や朝方の出入をねらって要撃するだろうから気をつけたがよい。又自分の家の入口の脇、位牌堂、縁の下、高殿の天井などは、よくよく注意したがよい。貴殿を仇とつけねらう人は、これまでよりはもっと巧みな計略をめぐらすであろう」（註五）

まことに微に入り細に渡った、日常生活の御指南をいただいたのである。

（註一） 不殺不盗不淫不妄語不飲酒等々

（註二） 孔子の孝をとける書物

（註三） 承久の乱のことをさす。

（註四） 頼基陳情による。

（註五） 崇峻天皇御書



富 士 (第四卷)

印刷 昭和四十九年五月七日

発行 昭和四十九年五月十六日

著者 柿 沼 日 明

発行者 岩 井 福 次 郎

発行所 法華講連合会 大白法編集室

東京都墨田区吾妻橋一―四―二一

TEL 〇三(622) 五六四三

装幀・挿絵 落 合 歌 二 郎

地図作画 小 山 康 夫